

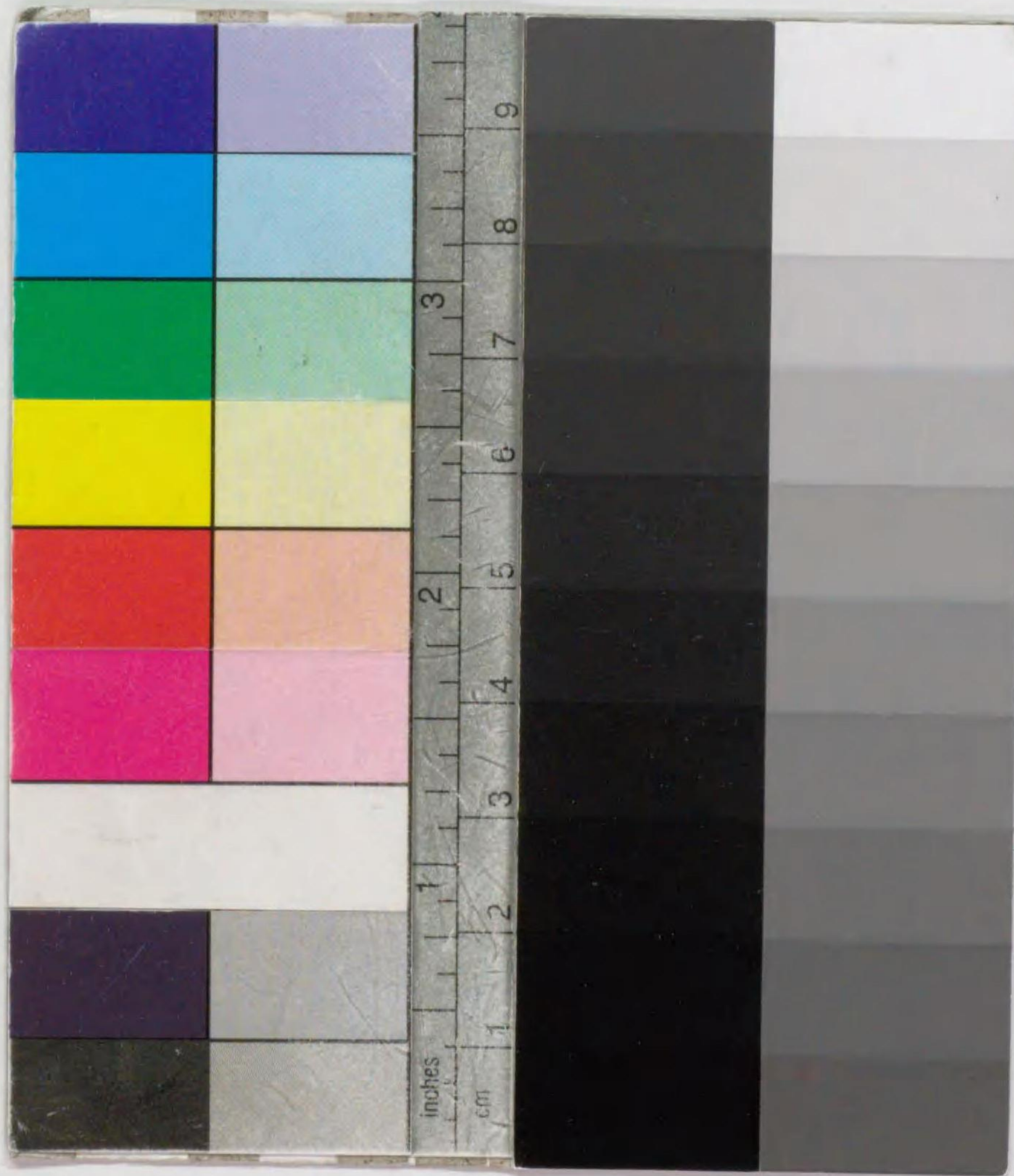
550

177

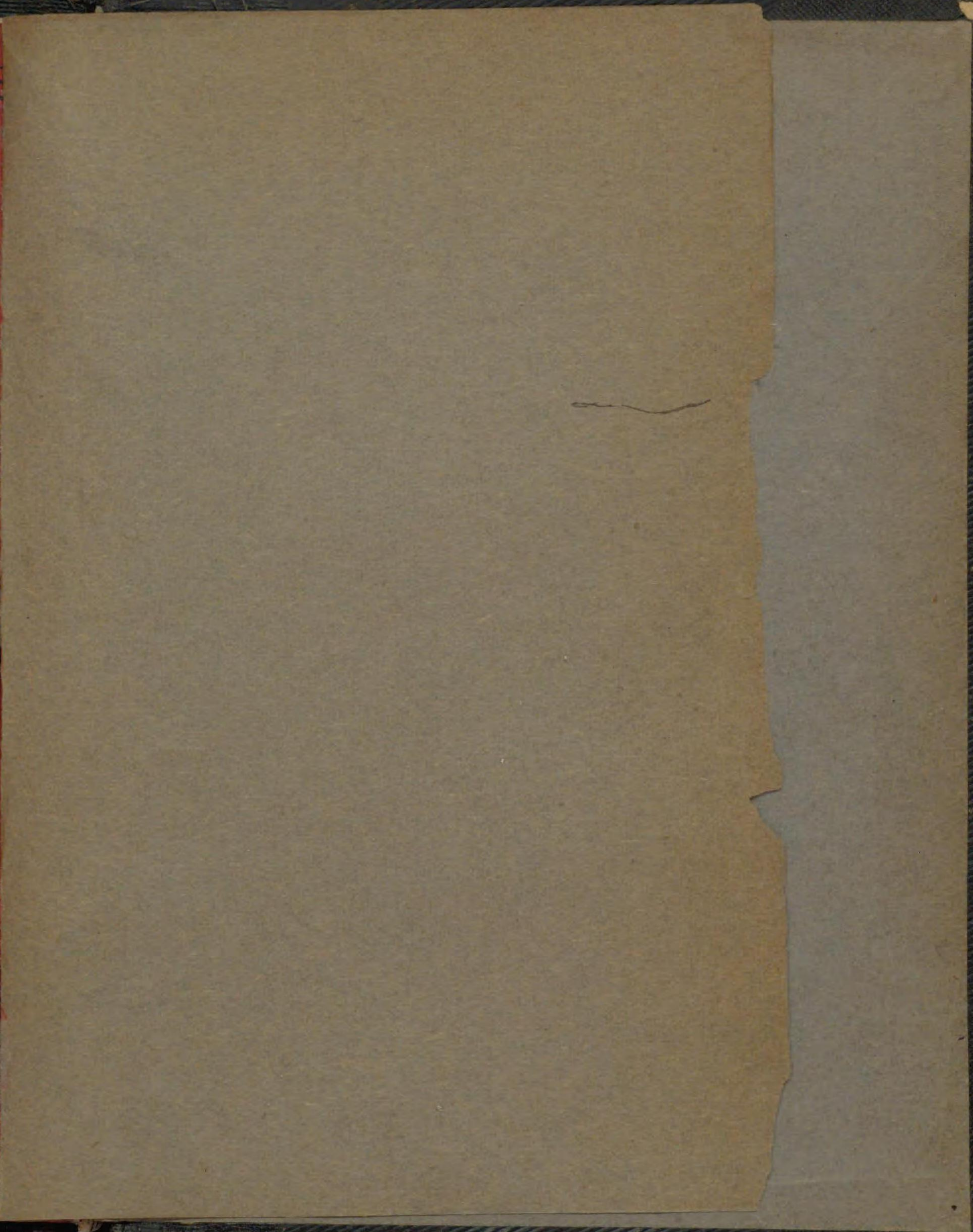
550-177



1200501508231



81.16





日本古典全集刊行會板

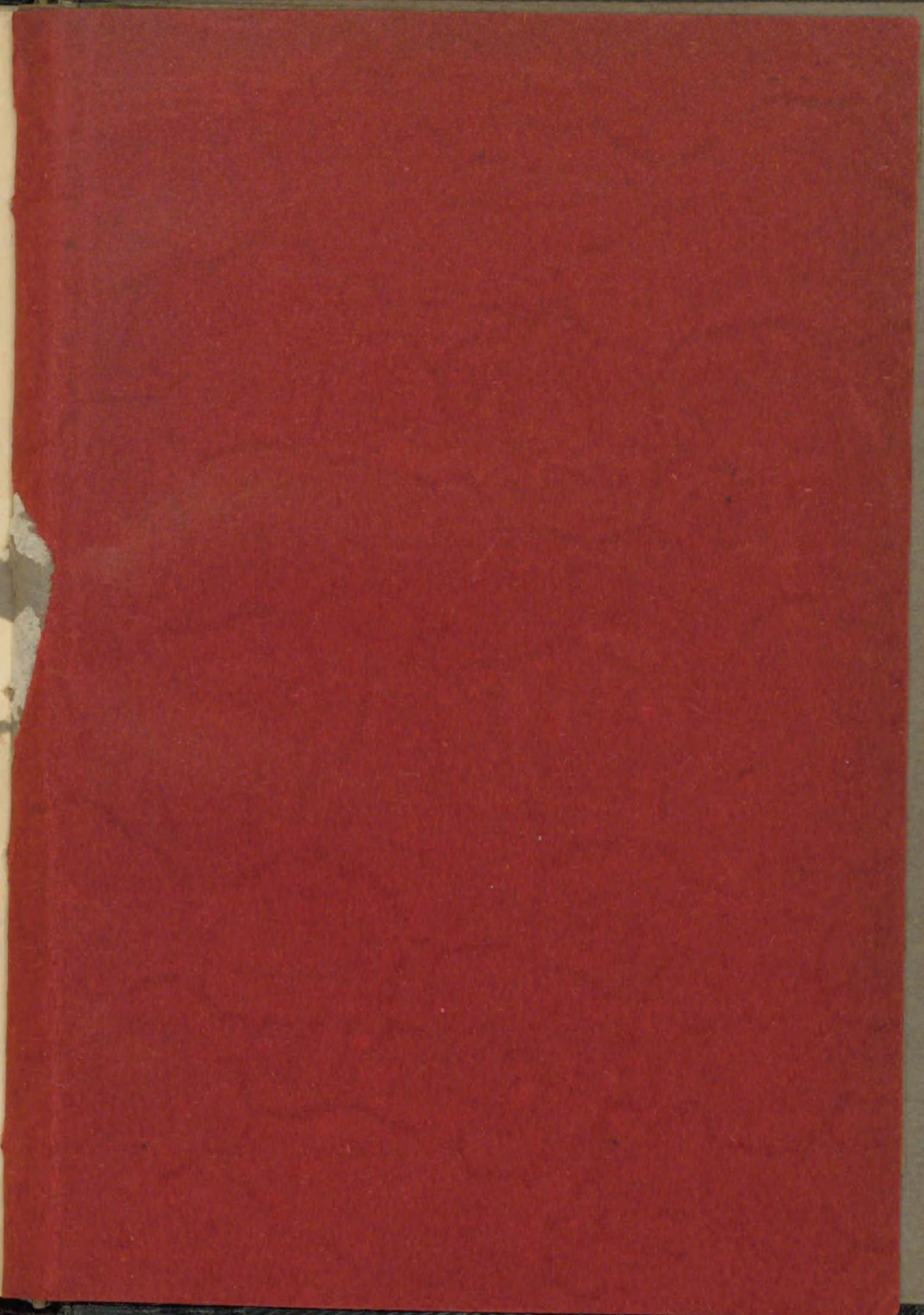
日本古典全集

司馬江漢著

西游日記

與謝野寬
正宗敦夫
與謝野晶子

編纂
校訂



江漢西遊日記解題

一、茲に「日本古典全集」第二期の刊行書目に、我我は、徳川末期の日本畫家、蘭學者、窮理學者（物理學者）にして、また我國に於ける歐風繪畫（油繪及び銅板畫）の先唱者たる司馬江漢（一七三九—元文四年）——一八一八—「文政元年」の長崎紀行「江漢西遊日記」を、その自筆原本に據つて収録する事を得た。此書は江漢が自ら文章の板下を書き、幾多のスケッチを挿み、之を出板する意圖を以て著作しながら、何かの事情に由つて果さなかつた未刊本である。自筆原本は明治卅八年（一九〇五）以來、偶然にも陸軍士官學校の珍藏に歸してゐる。江漢が歿して百十年後の今日、初めて之を印行するに至つたのは、同校の特別なる恩情に由る事である。我我は先づ此事を感謝する。

一、江漢が長崎に遊んだのは、天明八年（一七八八）彼れが五十二歳の事であり、其年四月廿三日に江戸、芝の新錢座の家を發し、翌年（天明九年、正月廿五日寛政と改元）四月十三日に江戸に歸り着いたのである。彼れは其の旅中の日記を抄略して、翌寛政二年に一たび「西遊旅譚」五卷を書き、寛政六年に神吉世敬、大田全齋一家の序を添へて「春波樓藏版」の名の下に自ら印行した。その印行年月は東京上野の帝國圖書館所藏及び京都の杉浦丘園氏所藏の二本が共に記載を缺いてゐるのに由つて想ふと、初めより印行年月を附けなかつたものらしいが、二家の序の成つた寛政六年（一七九四）若くは其の翌年あたりの印行

であらう。次いで享和三年（一八〇三）彼れが六十七歳の八月に、其書の題名を「畫圖西遊譚」と改め、しかも初めの板木を用ひたる爲め、中の題名は「西遊旅譚」としたるまま、江戸の書肆鴨伊兵衛より再板した。是れには「享和三年秋初」に書いた浦上春琴の跋が加はつてゐる。「増訂國書解題」の「畫圖西遊譚」の下に「一名を西遊旅談と云ふ」と有るのは前後を顛倒した説明である。また同解題に「天保八年刊行す」と書かれてゐるので想ふと、天保板の「畫圖西遊譚」も有るらしいが、帝國圖書館、杉浦丘園氏、東京の山下新太郎氏、及び編者の一人與謝野寬等所藏の各本は、何れも享和板である。さて江漢は「西遊旅譚」の抄略本が意に満たなかつたらしく、文化十二年（一八一五）彼れが七十八歳の時に再び會遊の日記全部の印行を企て、其れに多少の増修を加へたるものが此の「江漢西遊日記」六卷である。彼れは第六卷の末尾に「廿八年前遊歴したる時、日日記るしたるを以て、茲に誌しぬ。文化乙亥〔十二年〕三月なり。西遊日記と題號す」と書いてゐる。即ち江漢が此著を成したのは、彼れの歿したる文政元年（一八一八）より四年前であるから、恐らく是れが彼れの著書として最後のものであらう。また此書が今日まで印行されなかつたのは、筆を擱いて間も無く病床の人となつたが爲めでは無かつたか。

一、此の「江漢西遊日記」を彼の「西遊旅譚」に比較するに、彼れに於ては文章も挿畫も甚だしく抄略されてゐるに對し、是れは細大の記述を洩さず、挿畫の量もまた多き事に由り、日記の殆ど全部を録したるものと推定せられると共に、往往「其頃云云」と云ふ語の有ると、頭注を添へたるとに由つて、追記し増修

したものである事もまた明白である。猶「西遊旅譚」の文章の板下は「門人、關江平民誌」と有るが、此の「江漢西遊日記」の文章の板下は挿畫と共に江漢の自筆である。自筆原本は六卷に分れてゐるが、此の「日本古典全集」には一冊として収録する關係上、「」此印の中に原卷數を注記するに止め、全篇を續けて印刷した。挿畫は江漢の自筆を寫眞版として悉く載せたが、文章は卷首の一葉のみを寫眞版として掲げ、他は活字を以て收めた。原文に送り假名、傍訓を施し、假名遣を正し、固有名詞の或物と會話とに「」此印を加へ、また「」此印の中に編者の補注を挿んだ。猶また著者の頭注は紙面の關係から（）此印を添へて本文の中に印刷した。題簽もまた原本に有る江漢の自筆を撮影した。

一、司馬江漢は江戸の人、その祖は「春波樓筆記」に彼れ自ら「予が先祖は紀州の人なり」と云ひ、父に就いては「十四歳の時失ふ、」母に就いては「母七十三にして老耄して歿しぬ」と云つてゐる。彼れの本姓は安藤、名は吉次郎、四十餘歳にして土田家に入夫したが、其頃儒者唐橋世濟に就いて漢學を修め、漢詩を作るに際し、「予も詩の下に誌すに唐風に非ずば風雅にあらずとて、名は峻、姓は司馬、字は君嶽、號は江漢とす。峻嶽を以て名字とす。予が先祖は紀州の人なり。紀の國に日高川、紀の河とて大河あり。洋洋たる江漢は南の紀なりと、故に號とす。其後、如來先生に逢ひしに、江水、漢水とて一水の名なり、之を合せて名としたるを笑ひけり。略人に知られければ江漢にして置きぬ」と述べてゐる。此中の「司馬」は蓋し生涯彼れの住みたる江戸の「芝」を唐風に書いたのであらう。また不言道人、春波樓、桃言、

西洋道人等の雅號があつた。

一、江漢の畫事に志したのは、彼れ自ら「春波樓筆記」に「我が先祖に畫を描きし者ありけるにや、吾伯父は吾親〔父〕の兄なり、生れながらにして畫を善くす。其血脈の傳はりしにや、予六歳の時、燒物〔陶器〕の器に雀の模様ありけるを見て、其雀を紙に寫し、伯父に見せける。十歳頃に至りては達磨を描く事を好みて、數數畫きて伯父に見せけり。後長じて狩野古信に學べり。然るに和畫は俗なりと思ひ、宗紫石〔南蘋風の畫家、一六九七「元祿十年」——一七七四「安永三年」〕に學ぶ。其頃鈴木春信（一七一八「享保三年」——一七七〇「明和七年」）と云ふ浮世畫師、當世の女の風俗を描く事を妙とせり。四十餘〔五十三歳の誤〕にして俄に病死しぬ。予此にせ物を描きて板行に彫りけるに、贗物と云ふ者なし。世人、我を以て春信なりとす。予、春信に非ざれば心伏〔服〕せず。春重と號して、唐畫の仇英、或は周臣等が彩畫の法を以て畫く。多月の圖は茅屋に簷繞り、庭に石燈籠など皆雪に埋もれしは淡墨を以て唐畫の雪の如く隈取りして、且つ其頃より婦人、髮に鬢さしと云ふもの始めて出でき。爰に於て髮の結び風一變して、之を寫眞〔寫實の意〕して世に甚だ行はれける。吾名此畫の爲に失はん事を懼れて、筆を投じて描かず」と云つてゐる。此中、狩野古信（初代榮川）は「大日本人名辭書」に據ると、江漢の生れた八年前の享保十六年正月に參拾六歳を以て歿してゐるから、「古信に學べり」と云ふのは古信の畫風に親んだと云ふ意味であらうか。或は「古信」は其子の典信の「典」の字を、編者の參照した「百家説林」本の

「春波樓雜記」が誤植したのであらうか。

一、江漢はまた「予壯年の時、専ら唐畫を以て人にも教へ」と云ひ、また其頃、仙臺侯に召され、深川親和父子と侯の前にて席畫を成し、和美人、和男子、墨竹、墨梅などを望に任せて筆疾に描きたるに、「親和の曰く、足下は唐畫描と聞きしに、和漢の人物、風景、山水を畫き、大名の前には甚だ能きふるまひなり。今より二十年を経るならば天下に名を爲す人と云へり。吾が居所は神仙座なり、甚だ是れより近しと云ひければ、親和の云ふ、我足下を送らんと戯れければ、小人の宿には茶の生温きが有るのみならんと答へければ、扱扱能き挨拶なり、我等が宿の會日にチトお出でとて別れける。吾が年參拾歳の時なりき」と云つてゐる。斯くして彼れは四拾歳以前、既に日本畫家として名を成して居たのである。

一、江漢が平賀源内（鳩溪、一七二三「享保八年」——一七七九「安永八年」）、大槻玄澤（磐水、一七四三「寛保三年」——一八一三「文化十年」）其他の蘭學者、窮理學者に交つて歐洲の思想文物に觸れ、彼れの心眼を窮理博物の上に開き、以て彼れの自由主義、實證主義の思想見識を養ふと共に、繪畫に於ても歐洲の畫法を研究し、自ら我國銅版畫の祖となり、油繪をも描くに至つたのは、彼れが四拾歳前後の事である。彼れ自ら「西洋畫談」に於て「予壯年の時、源内平賀氏なる者話しけるに、往年阿蘭人、彼國の銅版數百枚舶し來り、日本にて是れを鬻がん事を示す。其頃の人、思ひ淺く、敢て之を奇巧とせず。終に蘭人に反す。日本人、彼國にて板を銅にして刻する事を知らざりしに、夫よりして始めて知れり。然るに銅版

に刻するの術を捜考する者なかりしに、阿蘭書、ボイスと云ふ人の著す書中に、銅刻を作るの技巧の法式あり。向きに我れ、玄澤大槻氏と謀りて之を譯し、天明癸卯〔三年、一七八三〕の歳、竟に此製作を考へ、日本始めて草創するものなり」と云ひ、また「春波樓筆記」に於て、「其頃平賀源内とて、讃州の人なり。江戸神田お玉が池と云ふ所に住す。源内は物産家にて、本草者として、仕官を好まず、浪人者なり。(中略)源内又おらんだの奇物を好みて、其頃は蘭學者も少なく、杉田玄伯、中川順庵のみ名あり。源内は、ヨンストンスと云ふ蘭書は五六十金の物にて、家財夜具までも賣り拂ひ、此書を得たり。此蘭書は世界中の生類を集めたる本にて、獅子、龍、其外、日本人見ざる所の物を生寫にしたる事、數かぎりなし。今は此書も所持したる者ありけるが、其頃は曾て無し。其後に「源内が」長崎へ行きけるに、昔獻上せしに、不用とて長崎へ持ち歸る。此物、通詞の家に數年ありける故に、くづれ、損じ、體なしに成りて有りけるを、源内、東都に持ち歸り、數日工夫をば回らし、竟に考へ究めたり。是れ今ある所のエレキテルなり。大名、小名、之を見物す。爰に於て源内、奇人と稱す。(中略)源内は嘗て金銀銅鐵の、山にあるは、山頂に立つと云ふ。如岩、如石、物現る。之を見るの術あり。我等も是れに加はりしに、甚だしき間違ひ、見損じある事にて、後悔し、止みぬ」と云つてあるのを見ても、彼れが平賀、大槻二家によつて多く啓發せられた事が想像せられる。江漢が蘭語を解し得たのも固より二家の感化であらう。

一、江漢が始めて歐洲の畫法によつて銅版畫を作つた事は明白であるが、油繪は彼れに先だち、若くは彼れと同時に之を試みた少數の人人が有つた。秋田の藩主佐竹義敦(曙山、一七四八「寛延元年」——一七八五「天明五年」)も其一人であり、義敦は油繪を平賀源内に就いて學んだと云はれ、現に其遺作が幾種か存してゐる。想ふに多巧な源内は始めて油繪をも長崎より傳へて自ら之を試み、また人にも之を教へたであらう。江漢は「西洋畫談」に於て、「西畫は蠟油を以て膠に換ふ。故に水に入りても損ぜず。世俗之を油畫と云ふ。畫法は我が日本にても往往模製する者ありと云へど、其眞を得ざる者多し」と云つてゐる。さうして江漢が長崎遊歴以前に既に油繪を描いて居た事は、此の「江漢西遊日記」の記事によつて同じく明白である。しかも彼れが油繪の秘訣を知り得たのは、五十二歳にして長崎に遊んだ後であつた。此事は「江漢西遊日記」に記載を缺いてゐるが、「西洋畫談」に於て「余曩に崎陽に遊ぶ。阿蘭陀人イサク、チツシンギ (Isaac Titsingh) なる者、余に畫帖を贈れり。コンスト、シキルド、ブーク (Konst Schild-Boek) と云へる書なり。爰に於て漸くにして佳境に入る。「西洋畫談は長崎遊歴の十二年後、寛政十一年(一七九九)七月の著である。」今に至りては縦横にして、意の趣く處、筆之に應ず。山水、花鳥、人物、禽獸、畫せざると云ふ事なし」と述べてゐる。

一、江漢の銅版畫は「東都八景圖」が最も世に知られてゐる。此紀行にある如く、彼れが旅中に携へて行き、自製の視目鏡によつて觀覽せしめ、行く所に入人を驚かせた「兩國橋の圖」は實に其一つである。文化二年(一八〇五)に出版した「和蘭通船」の巻尾廣告を見ると、「春波樓藏版目錄」の中に「銅版風景

圖、日本及び和蘭ノ圖十品、彩色入り、並ニ覗目鏡」と有つて、東都八景圖と共に和蘭陀の圖二葉、合せて十品に覗目鏡を添へて販賣したのである。猶同じ廣告の中に「銅版地球圖、並和蘭天説、箱入一冊」、「銅版地球圖、並略説、箱入一冊」が「出來」として掲げられてゐる。また京都杉浦丘園氏は「頻海圖」一葉を藏せられてゐると云ふが、其れは他にも有る「和歌の浦圖」の如き海景の一つであらう。

一、江漢の油繪は、「西洋畫談」の奥に添へた「春波樓藏版目錄」の中に「東都芝愛宕山祠左の方に、相州七里濱の額一面掛る」、「同芝神明宮の左方に、鐵砲洲より芝浦を望むの額一面掛る」、「大坂生玉本地堂の正面に、和蘭陀人物、及び七里濱額二面掛る」、「豫州宇和島、和靈明神社に、播州舞子が濱の額一面掛る」、「右先生、西洋法を以て圖するものなり。寛政己未秋七月佳節、司馬江漢門人誌」と有る。是等の油繪の額は今如何になつたかを知らない。猶江漢は文化の初年に「周防錦帶橋の圖」を油繪に寫して江戸淺草の觀音堂に寄進したが、南蠻の畫は伽藍の清淨を賣すものとして物議を生じ、撤回されたと云ふ事である。また現存の油繪では、秋山光夫氏の調べて下さつた所に由ると、東京美術學校所藏「富士山圖」、侯爵徳川頼貞氏舊藏「海邊鳴圖」、本間耕曹氏所藏「高輪海景圖」、吾妻健二郎氏所藏「和蘭陀風俗圖」、「波止場圖」、「海邊圖」、杉浦丘園氏所藏「富嶽圖」、安藝嚴島神社所藏「木更津風景圖」等が現存する。猶此外にも何れかに珍藏せられてゐるものが幾圖かある事と想像する。また東京帝室博物館所藏の「護持院が原圖」の大作は、無落款であるが江漢の筆と傳へられてゐる。次いでに云ふ、江漢の洋畫には屢歐字の落

款が用ひられた。また其の銅版畫はモノクロオムの物と淡彩の物とが有る。

一、江漢の著作には、前述の銅版諸圖の外、「和蘭天説」(寛政八年版)「地球全圖略説」(寛政九年版)、「萬國略説」(板行年月未詳)、「西遊旅譚」(板行年月未詳、寛政六年の序がある)、「畫圖西遊譚」(西遊旅談の再版、享和三年版)、「西洋畫談」(板行年月未詳、寛政十一年の後語がある)、「春波樓筆記」(文化八年冬十月日誌之ヲとあり、未刻のまま明治に及んで、「百家説林」卷五、及び「日本經濟叢書」十二に收めて出版せられた)及び此の「日本古典全集」に收めた「江漢西遊日記」、是等は何れも刻本と成つたものであるが、猶「西遊旅談」、「西洋畫談」等の卷末廣告に「近刻」として豫告せられた「春波樓畫譜」(西洋畫傳部、和蘭奇巧部、天文地理部の三大部に分つ)、「萬國風土考」等の著作は、未だ今日まで編者等の眼に入らないのみならず、畫家、藏書家に質すも其の刻未刻すら決定し難いやうである。また「泰西諸國錢考」、「紅夷俗話」、「長崎見聞誌」等の著書もあると聞くが、淺學なる編者等は未だ其等の所在を知らない。一、江漢の畫論と畫法、彼れの西歐窮理の學術と支那老莊の哲學とより體驗したる樂天的虛無思想、及び彼れの自然科學者、藝術家としての博識、多巧、多趣味等は、前掲既刻の著作に於て十分に看取せられる。中に就いて特に記念すべきは彼れの隨筆「春波樓筆記」と彼れの畫學書「西洋畫談」である。前者に於て、「或人、予に虛と實とを問ふ。答へて曰く、人の生死を云ふ、死は實なり、生は虚なり。生きてる貌は水上の泡。内、氣を包み、外、水にて掩ふ。容、水氣の爲す所、虚空より出でて生をなす。虚空は實

なり。質となる時は虚なり。實^ハ以^テ不^ニ滅^亡セ、名^ノ可^キ爲^ス名^ト非^ズ。所謂^{イコカ}無名^{ナリ}。天地の間^ニ生^ルる者、皆虚^{ナリ}。無情^之を實^トす。日輪^天に麗^{リテ}無^心。大地^旋りて無^心。氣昇^降して無^心。又曰く、岩石鐵金^{以テ}實^トす。草木^{以テ}虚^トす。花發^け實^を結^び、土^を去^り水^を離^るる時は死^す。是^{コト}生物^{にして}非^情に似^{たり}。故^ニ實^{なる}者、萬古^亡びず。虚^{なる}者、際^{あり}。人^ノ存在^{、之}を虚^トす」と云ひ、「今日七十有五、心^を放肆^{にし}、諸侯^召せども往^{かず}、己^ノ業^を務^{めず}。冬^月、日當^に臥^し、夏^月は樹^下に坐^し、性好^{んで}山水^を愛^す。數^{東西}に旅行^す。名山^{風景}を瞻^ては家^に歸^{りて}畫^に摸^し、また我^が天文^地轉^{の説}を好^む者^と窮^理を談^じ、樂^{これに}過ぎず」と云ふは、彼^レの宇宙^觀及^び人生^觀の一端^{であり}、後^者に於^て「西畫^は只^能く造化^の意^{を取}るのみ。和漢^の畫^は翫^物にして用^を爲^{さず}。且^つ西畫^の法^{に至}りては、濃淡^を以^て、陰陽^{、凸凹}、遠近^{、深淺}をなすものにて、其^眞情^を摸^{せり}」と云ひ、「畫^は毎^毎云^ふ如^く寫眞^{〔寫實〕}に非^ざれば妙^{とする}に足^{らず}、また畫^{とする}に足^{らず}。其^寫眞^{とは}、山水^{、花鳥}、牛羊^{、木石}、昆虫^の類^を畫^{くに}、毎^見新^たにして、畫^中の品物^悉く飛動^{する}が如^し。是^レは西洋^風にあらざれば能^はざる事^{なり}」と云ひ、「和漢^の畫^法にては決^{して}眞^を畫^く事^能はず。其^所以^は丸圓^の物^を畫^{くに}輪^{を描}いて彈丸^の形^とす。中心^の堆^き所^を巧^む事^能はず。正面^の像^を畫^{くと}雖^も、鼻^の中心^の高^き所^{を描}く事^{あた}はず。畫^もと筆^描より起^るにあら^ず、日^の蔭^{より}起^る」と云ふは、彼^レの畫論^の一端^{である}。さうして「我^が日本^の人^{、窮}理^を好^{まず}、風流^{文雅}とて、文章^を裝^り偽^り、信實^を述^{べず}」(春波樓筆記)

と慷慨^{した}彼^レは、油繪^と銅版^畫の外^に、天文^{、地理}、歷數^{、鑛物}、電氣^{、動植物}、醫藥^{、種痘}、風俗^{、金石文}、解剖^{、古錢等}の諸學^{、ピイドロ} (硝子) [、] 視目鏡^等の製法^にまで、その興味^と研究^心とを及^{ぼし}、且^つ多^{くの}著作^を以^て世人^の爲^{めに}先唱^{啓蒙}の偉業^を成^{した}のである。

一、江漢^は漢文學^を修^めながら、其^の著作^は悉^く近體^の假名^交り文^を以^て書^{いた}。此^の見識^もまた漢文學^を中心^{勢力}とする當時^の學者^{藝術家}間に於^て、彼^レの實學^を重^{んず}る新精神^の發露^{である}。彼^レは友人^{の大槻}玄澤^に對^{して}も、「大槻^{玄澤}と云^ふ人^は仙臺^侯の外科^{にて}蘭學^に名^{あり}。頃日^{、タバコ}の起源^の書^を引^{きて}、皆漢文^{なり}。タバコ^は多^くは愚人^{卑賤}の好^むものにて、故^に此^書は世^の嘲弄^{のもの}となりぬ」と云^ひ、また「京^{、東森}の隱士^{無外}子圓通^{と云}ふ出家^{、佛國}曆象^編と云^ふ書^を著^{せり}。是^レは須彌^山を是^{とし}、地球^を非^{とし}たる事^{にて}、萬書^を引^{きて}漢文^{なり}き。文盲^{なる}者^を嚇^す謀事^{なり}。また文學^者にも理^に疎^き者^ままあり」と云^ひ、「予^倅に文^を學^{ばず}、故^に國字^を以^てす。是^レ兩道^{に通}じ安^く、漢文^{、意}を述^べ難^く、視^る者^肯て解^し難^し」と云^{つて}、國文^{國語}の獨立^を主張^{して}ゐる。殊^に此^の「江漢西遊日記^{」は}平易^{通俗}なる文章^を以^て、矯飾^の跡^無き記述^を爲^し、彼^レが人^及び學者^{藝術家}としての眞率^{を示}してゐる。此^中に彼^レ自ら「何方^へ行^きても尊敬^{される}も不思議^{なる}事^{かな}」と云^{つて}ゐるが、實際^彼レは何人^{にも}親^{まれ}る性格^{風采}の人^{であ}つたらしく想^はれる。猶「江漢^が年^が寄^{つた}で死^ぬるなり浮世^{に残}す浮世^{一枚}」と云^ふ狂歌^を贅^に書^{いた}と云^ふ彼^レの油繪^{自畫}像^は今何れ^に有^{るか}を知ら^ぬが、此日記^の挿畫

の中に偶然幾つも遺された自畫像は、正に善く彼れの風手を傳へたものであらう。

一、江漢の妻子の名は傳はらないが、此日記の中に「吾宿に妻子あれば歸りたく思ふ」、「とかく故郷へ歸りたし、妻子ある故か」などの記述に由つて妻子の有つた事は明かである。但し「春波樓筆記」に「然るに段段と生長して後は、各の志を露し、必ず親の志と差ひ、己の身體、親の躬より出でたりと云ふ事を辨ずる者鮮し。且つ又孝をつとむる者多からず、親を親とせざる者多し。親は子を子とし、子を思ふの情深し。是れ己の體より出でたる故なり。今に至りて考ふるに子は無きに如かじ」と云つてゐるので想ふと、或は其子は父と業を異にし、學問の人と成らなかつたのであらうか。

一、江漢は豁達洒落の人であつたらしく、此日記にも旅中で屢妓樓に一酌した事が忌まずして書かれてゐる程であるから、生涯の逸話も多かつたであらうが、其れは從來殆ど世に傳はつて居ない。唯だ「古今雅俗、石亭畫談」初篇卷上に「死人不言、司馬江漢」と云ふ目を立てて、「司馬江漢、名は峻、字は君岳、春波樓と號す。江漢の時、洋畫は未だ開けず、蘭人僅に外科醫法を傳ふるのみ。獨江漢、始めて洋畫を學び、銅版の畫を製す。後世洋畫の盛なる、詢に江漢を先覺者と爲すなり。江漢曾て事故ありて、偽りて已に死せりとなして、芝某町に潜居す。或人、途上にて江漢の後背を見、追うて其名を呼ぶ。江漢足を逸して走る。追ふ者、益呼んで接近甚だ迫る。江漢首を回し、目を張つて叱して曰く、死人豈に言を吐かんやと。再び顧みずして復走ると云ふ」の一事を傳へてゐるのみである。然るに今此日記には、讀むに従つ

て幾多の逸話的事蹟が疊出し、伊勢にて畫僧月仙と邂逅したる事、長崎にて蘭館に赴く爲めに丸坊主となり江助と名のりたる事、平戸にて藩主の出獵に加はり鹿の生血を啜りたる事、到る所にて銅版畫と硯目鏡を以て人を驚かしたる事、一一に興味ある話題に富んでゐる。

一、今日まで江漢の傳記には朦朧たる所が多かつた。今茲に自傳の一部と云ふべき「江漢西遊日記」が世に出でて、大に其明るさを加へるに至つた。「百家說林」の編者の書いた「司馬江漢小傳」の中に、江漢が長崎に赴いて蘭語を修め、併せて初めて洋畫を學んだと云ふ如き記述は誤謬であつた。また同編輯者が、江漢の日本畫の師に就いて、初め戀川春町に學び、後、谷文晁の門に入つたと云ふ説は、「春波樓筆記」に江漢の自ら述べてゐる所と相違してゐる。恐らく根據なき浮説を傳へたものであらう。また江漢の生年を延享四年とする同編者の記述は「古今書畫、鑑定便覽」に「文政元年十月廿一日歿す。年七十二」とあるのを輕信して逆算したらしいが、文化八年の著作「春波樓筆記」に於て、江漢自ら「今日七十有五云云」と明記してゐるから、之に由つて勘算すると、「鑑定便覽」の「七十二」は「八十二」の誤であり、従つてまた其の生年は「元文四年」に當るのである。この歿年は「大日本人名辭書」も「美術辭典」も「鑑定便覽」の誤を襲うてゐる。

一、森潤三郎氏が特に往訪して調べて下さつた所に由ると、江漢の墓は、もと東京市深川區本村町、日蓮宗齋院寺に有つたが、今は東京府北豊島郡巢鴨町字染井の墓地に移されてゐる。即ち染井墓地の中央道路を

西へ抜けて突き當り、寺の門の前を折れて墓地に入り、敷石づたひに最も西の側を南に進むと正面に屋根附の墓が見える。其れは昔赤穂義士の仇討に吉良家方で討死した小林平八郎央通の墓であるが、その左に並んで江漢の墓がある。二段の臺石の上に立つた墓碑は高さ四尺二寸、幅一尺、厚さ七寸五分、大正十二年の大地震に二つに折れたのが漆灰で次がれ、表に「江漢司馬峻之墓」と刻し、墓に向つて右の側面に、上部三列に「華成院憲詠日喜（右横に、寶曆十一年己二月廿二日）」、「唯心院妙修（左右の横に割つて、寶曆十一年辛巳、七月二十六日）」、「快蓮院妙華日法（左横に、安永十年丑正月廿六日）」と有る。この「華成院」、「唯心院」、「快蓮院」等は養家の人人であらうか。さて其の下部に「桃言院快詠壽延居士（右横に、文政元寅天十月廿一日）」と有るのが江漢の法諱である。また向つて左の側面には「文化庚午社八月日建之（右横に、茶湯料三兩納之）」と刻し、裏には「齋堂金入不許萬古毀」と刻されてゐる。

一、江漢に弟子の有つた事は「西洋畫談」の卷末に「門人誌」とあるので知られるが、その人人の名は未だ明かで無い。唯だ「春波樓筆記」に據ると、江漢が呼んで「門人」と稱する二人がある。一人は小林源吾、江漢に天文を學ぶこと半年を経ずして小星の名までを記憶し、師をして「實に奇人と稱すべし」と驚歎せしめた。一人は奥喜三郎、獨り能く新製地轉儀と日本萬年曆とを製作して師を喜ばせた。猶世に江漢の傳記資料と、此他の門人の姓名とを知られる人があるならば、希はくは示教を受けたい。我我は他日其れに由つて此解題を追補するであらう。

江漢西遊日記



天明戊申四月二十三日有子と申す是
 神澤山と申す一々金川と云は其日
 是下所より往者三宿に宿タル中子と
 軍二十位の者より松前此産生れたる吾
 新交れ旅行を始めてより是より肥州
 女將方其外浦玉と巡覽し々三年と
 経るれば帰るまどと思ひ立しや又三宿
 生ありと云ふ故に賜宴を承りてあぐま
 故金川に滞りし河内を差替三宿と云
 人と申す是より戸橋より河内と云ふ

江漢西游日記

天明戊申四月二十三日。晝遊、江戸芝神僊座を出立して金川〔神奈川〕に至る。其日曇りて雨無し。從者には宿に居たる弟子なり。歳二十位の者にて、松前の産れなり。吾が此度の旅行初めてなり。是れより肥州長崎の方、其外諸國を巡覽して、三年を経ざれば歸るまじと思ひ立ちしにや、又は宿に妻子を置きたる故にや、胸塞り氣分悪しく、夫れ故金川に滞留して、河内屋善三郎と云ふ人を弔〔訪〕ふ。是れは江戸橋本丁河内屋と云ふ藥種屋の親類にて吾が十七年以前一面の識にて此度尋ね弔〔訪〕ふに、妻死して娘壹人を愛す。山水の畫一枚を贈る。善三郎案内して、一本松と云ふ處は後ろの山より富士、大山見え、眼下に前の海洲、千辨天、向の地は野毛、本目〔本牧〕、海を隔てて向ふ國は上總房州なり。夫れより臺の茶屋にて蕎麥を食ひ、善三郎の云ふ、「夫れにては長崎までは覺束なし、此處より伊豆熱海に湯治して江戸へお歸り」と云ふ。廿五日。天氣好く、氣分は悪しく、朝五時出立して、戸塚と程谷の間の繩手蟬鳴く。是れは麥の赤らむ時初めて啼く蟬と云ふ。夫れより藤澤なり。毎藤澤までは來りしに、此處より先は初めてなり。甚だ珍しく、小松原、右は山、左は海なり。場入〔馬入〕川、大山見えて風景好し。氣分も好く、大磯の驛に泊る。七時頃なり。

廿六日。天氣好し。大磯を出立して、小磯など云ふ處を過ぎて、程無く酒〔酒匂〕川から渡し、夫れより國

府津と云ふ處を越ゆれば小田原なり。大久保侯の領地、ウイロウ〔外郎〕の少し先き左に入る。熱海路なり。熱海まで七里、左は大海、浪打ち、右は山なり。石橋山、眞田の塚あり。米神村、立場あり。皆山坂路にして、眞奈鶴など云ふ。石を切り出だす。海上には大島、初島見え、山は雲を吐き、眞に初めて見たる所にや、不快全快す。夫れより根府川番所を越え、江の浦、土肥など云ふ處を過ぎて、熱海に至るに、皆山路、左に海を見て風景好し。熱海、今井半大夫方に至る。其頃入湯の者多し。江戸へは二十七里隔たるなり。廿七日。朝より雨天。湯治場には初めてなり。此湯は晝夜三度づつ半大夫庭より涌き出でて、一村に樋を以て掛ける。曝氣ありて熱湯なり。江戸へ快くして長崎の方へ趣く事を申し遣はす。入湯の者、淺草へ歸る人に頼む。(熱海へは其後四五度も行く。一昨年半太夫方にて入湯せし時、二代目なり。前の半太夫は、甚だ面白き人なりき。)

廿八日。曇にて、少少雨。此日初めて海岸を歩す。不漁とて魚少なし。

廿九日。朝雨七時頃天氣となる。今井に一碧樓と云ふ有り。晝など認め、持參したる蘭器、蘭書など取り出だし、皆皆に見せけるに、好事なる者も無し。見物山の如し。

廿九日。朝より雨降る。後天氣。熱海より十八丁小田原の方、山路を越えて瀧の湯あり。同宿の者と行く。誠に此様なる深山幽谷に至る事初めてなり。所に珍しく面白し。(廿九日は晦日ならん。)

五月朔日。朝雨。晚天氣。脇本陣渡邊彦左衛門方へ行く。此處にも一色樓あり。海を望む。日金山へ登らん

事を話す。

二日。曇る。終日晝を認める。半太夫井に同宿の者集り、吾が話を聞く。氣候寒し。綿入に衾を重ねて着る。

三日。雨天。自樂亭と云ふ離座敷に、松平長門侯のお部屋と見えて、五十位の婦人、下女壹人、侍二人、下男二人連れ同宿しぬ。此處より地引をして得たるとて、鯛二つ、サヨリ二つ贈る。即ち生寫にす。

四日。朝より天氣。從者ヨンゲルに晝を描かせ樂む。また灸治をする。宿より柏餅を贈る。(ヨンゲルとは從者の事なり。若い者と云ふヨランダ辭なり。)

五日。節句なり。四時より雨。後大雨。額一面、堅物一幅出来る。半太夫父子禮に来る。

六日。天氣。西南の風。漸く此日單物を着る。湯の權現、來の宮へ參る。夫れより渚邊を歩す。熱海一村、所所に湯涌く處あり。海中に涌く處あり。故に名づく。

七日。天氣。自樂亭に居る婦人、從者と、吾れ、從者と七八人して、日金山の頂に圓山あり、是れへ登らん事を約し、即ち五十丁登り、峠に地藏堂あり、坊舎三軒、肉喰妻體〔帶〕なり。地藏は丈六の座像にして銅佛なり。坊舎誠に穢き處、然れども夫れへ毛氈など敷き、辨當を開き、彼の婦人と共に食事す。亦此處より五六丁小路を登るに、山頂少し平らかなる所あり。石碑あり。眺望を誌す。(廿八年以前と違ひ、坊舎一軒は縁側折れ廻し、甚だ好し。花吳座など敷き、茶等を出す。箱根より越ゆる立場となる。日金越えとて駕籠往來す。)

往來す。

伊豆國加茂郡日金頂、所ニ觀望ニ者十國五島、自子至卯、相摸國、武藏國、安房國、上總國、下總國。

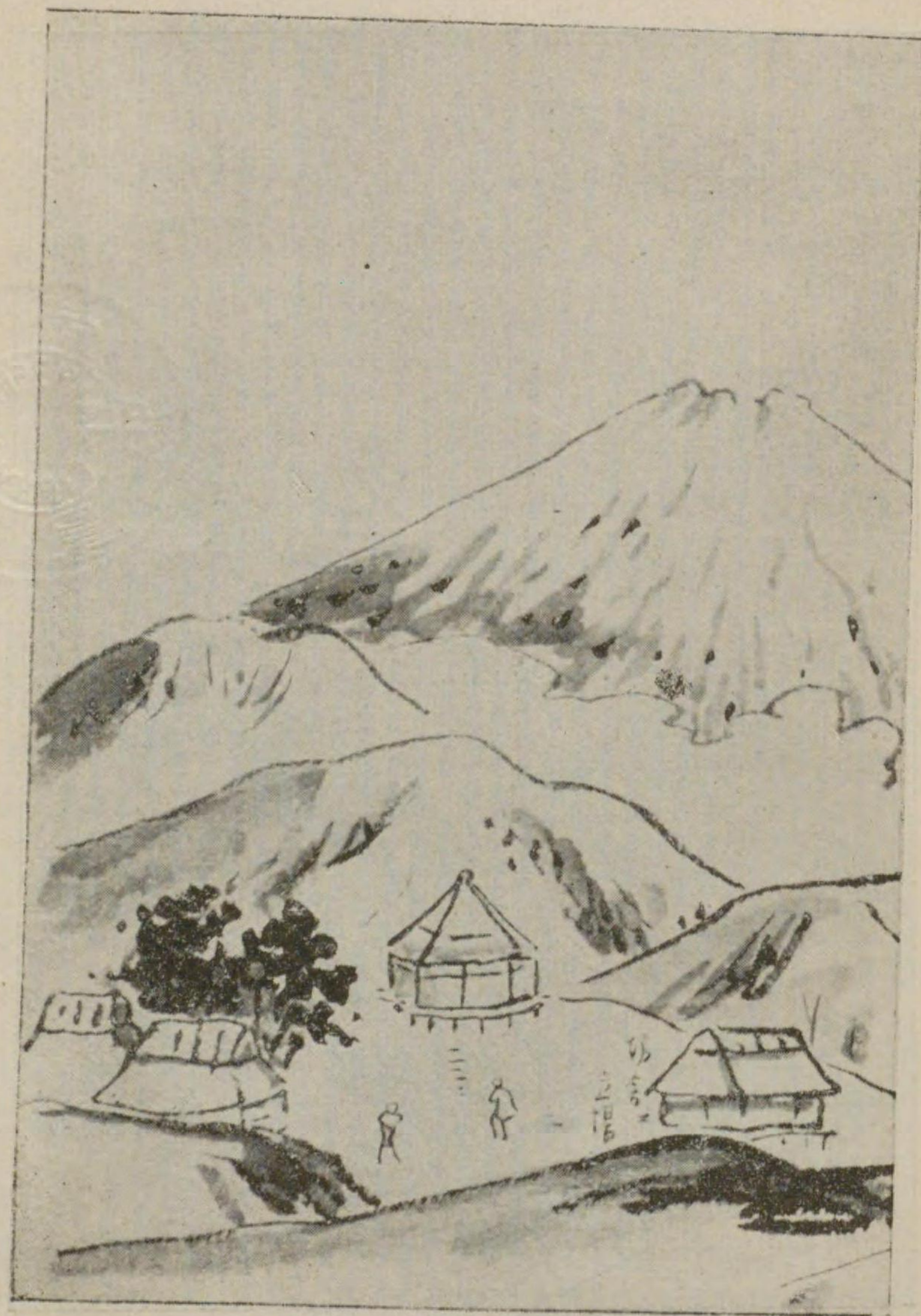
自辰至申、其國所ニ隸之南、五箇島、及遠江國。自酉至亥、駿河國、信濃國、甲斐國。天明三年八月、東都林居士、應熱海長渡邊房求之需建之。

此眺望誠に日本第一なり。此邊の山は茅生じて木無し。

八日。天氣。日金山、圓山の景色を寫す。屏風に山水を認める。宿より蕎麥を贈る。

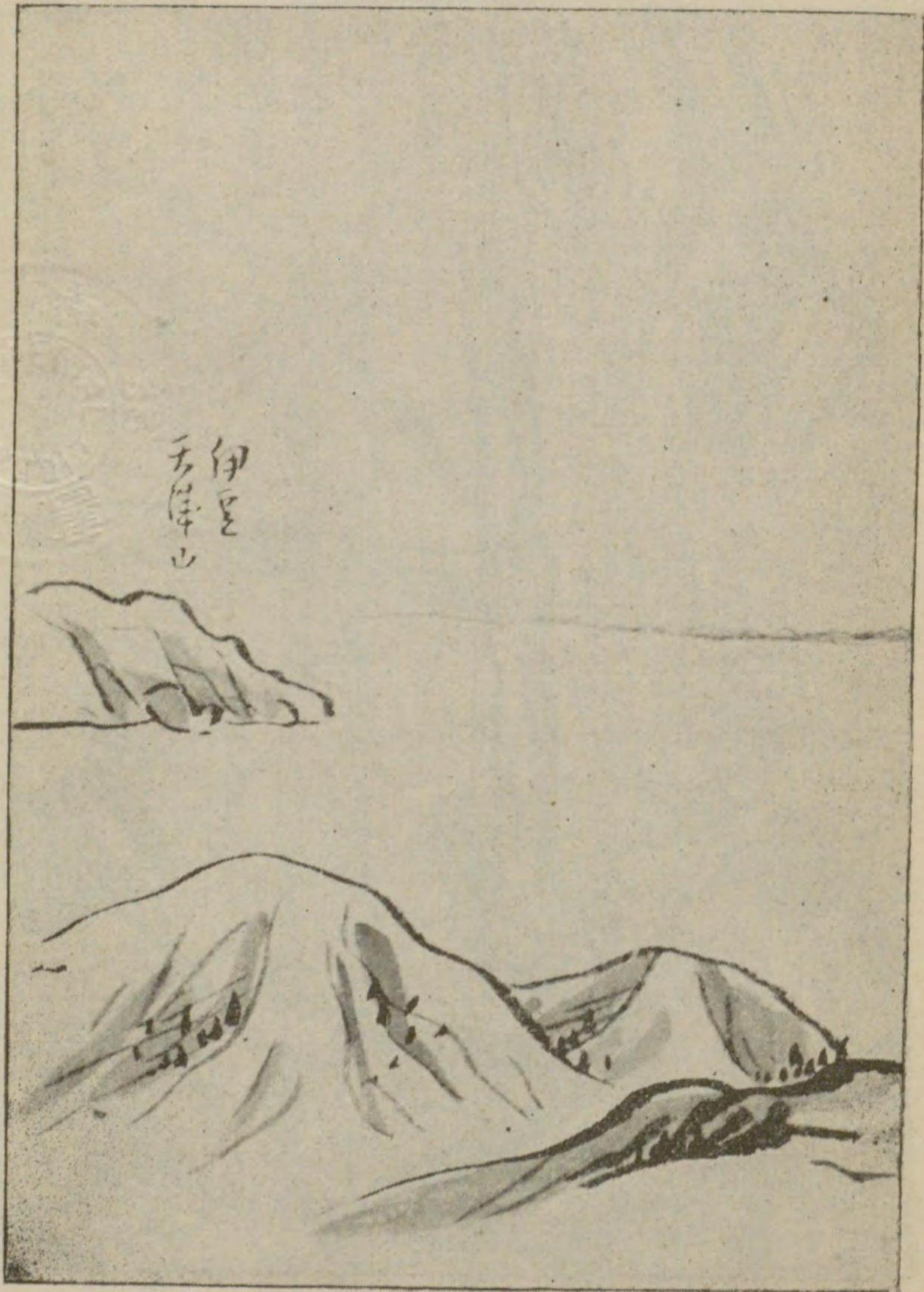
九日。曇る。其頃南天の花盛なり。此花は毎日一ひらづつ開くなり。盛り長し。生を寫す。葉至つてむつかし。明日は出立せんとて仕度する。

十日。朝曇る。晝日照す。晩方雨。今井半太夫方を出立して、山越えして三島へ五里あり。二里登りて峠の地藏堂あり。肉食妻體〔帶〕なり。誠に深山にして鹿の飛び走るを見る。此處より下り坂にて輕井澤と云ふ處、人家あり。亦山を越えてピンノ澤と云ふ處、少しく人家あり、觀音堂あり。夫れより平井村と云ふを過ぎて漸く三島明神の前に出づる。此處は往來なり。此の山路皆茅生じて、柴木のみにして大木無し。右に箱根山、左に天城山見えて、往來の人に逢はず。天曇か雨天の日、狼路に出で居る由。伊豆は山國にて是れより下田へ往くに天城を越ゆるなり。三島より沼津に至り、狩野川とて豎に流るる河あり。原、吉原の間、疊りて富士見えず。夫れより藤河、大急流舟渡し、渡れば岩淵と云ふ處、栗の粉餅を賣る。名物なり。此間田



生一々木

熱海より日金 地を
 あり五十七 登る
 五十七 此山
 圓山マリ
 伝言三が丸
 地を
 今四角
 二十八年
 山奥
 開け



伊豆
天保山



圓山頂ヨリ西ヲ望
み爾山ヨリ三峰
伊豆狩野河
富士河見元

山皆カヤ
染



畑を過ぎて、駿府桔梗屋と云ふ旅館に宿す。十一日なり。

十二日。天氣。其頃、大田原飛驒侯、駿府の加番にて此地に御詰あり。御城の外に屋敷あり。即ち参りて御目に拂かり、色色御咄し申上ぐ。

十三日。天氣少し曇り。札の辻南波屋庄藏とて御出入御町人あり。宿所仰せ付く。是れへ参る。其主人雅人なり。其友一兩輩來る。各風流あり。此日共に淺現〔間〕の山に登る。大松の根を枕にして伏す。目の下に阿部川を見、向ふに伊豆の山山を望み、夫れより山を下りて游亭あり。魚を售る家なり。酒肴を出だして日暮に歸る。

十四日。終日大雨。近所の者参る。晝頃よりして大田原侯へ参る。三加番巨勢と云ふ方、客なり。席晝を認む。夜の九つ時に歸る。

十五日。天氣。阿部川漲る。河留まる。白川越中侯、庄藏方御泊り。晝頃大田原侯の臣三人來り、酒肴を出だす。夫れより兩替町六丁目長谷玄庵へ参る。右は御城坊主なり。同道して小西源左衛門、藥種屋、此の隠居へ参る。茶人なり。

十六日。曇る。不雨。晝二三紙描き、小西へ参る。麥飯馳走になり、夜に入り歸る。海老屋太兵衛と云ふ人、雅人なり。晝の門人と成る。亦詩を贈る。

叢桂亭邂逅 司馬君、君善畫、因賦此呈。





逢歡傾蓋樂。更喜接佳賓。詩畫儼同調。風流仍故人。毫端看舉彩。座上忽生春。輕拂丹青妙。造工皆入神。毛彌

太田侯爵官贈詩文

夫天雷者以夏鳴矣、人者以才鳴也。其所以鳴、雖不同、然所以成名者一也。今江漢先生者、以丹青之術、鳴于東都也。亦善于音律、其玄妙豈誰可比哉。今茲戊申夏五月、先生爲窮畫工之神妙、遙蹈海嶽萬里之雲路、自欲游崎陽之客館也。余又陪從駿城副衛之駕、今也有此地也。于時先生崎陽羈旅之暇日、爰留藜杖也、偶爲傾蓋者、欣然而如有舊、笑談頗沈腹胃也。余雖不肖、感其風流奇骨之仙、謾賦巴詩一章、以呈先生之机下、請有一笑幸也。

天下一知東武人。畫工神妙也方眞。風流自是懷中璧。堪羨德光海內新。右 阿資東順紳

十八日。天氣。日暮に雨。駿府に「あんざい」と云ふ處に鯛屋清兵衛、大家なり。誹諧を好む。玄庵も誹人故、之と同道して參る。亭主、袴にて出で、酒肴を出だし、馳走する。畫二三紙認め、日暮歸宅す。

十九日。天氣。終日畫事。

廿日。天氣。今日も色畫出來。

廿一日。天氣。晚方雨。甚だ寒し。小袖綿入を用ふ。近邊の者數人來る。おらんだ其外色色の事聞く。此處より一里、湯の涌く處あり。之を湯治場に取立てんとすれども、山上にあり。山の下に引き、亦其湯微温

江漢西遊日記

し。或は病の事を問ふ。八時頃より大田原侯へ参る。

廿二日。朝曇る。四時頃より玄庵方へ参る。夫れより同道して小西隠居へ参る。椿の油にて揚げたる茄を食す。隠居の話に云ふ、「若き時の事なり、尾張の國名古屋に三月と九月、御城の女中に敷入とて小宿ありて世話をする事なり。夫れを女郎の如く買ふ事なり。閨房至つて深し」と申されける。一笑の談なり。

廿三日。雨天。終日晝を描く。去年今日米拂底にして天下亂を爲す。宿元を出でて今日まで三十日を過ぎたり。手代の話に云ふ、「此の在所にワラシナ村あり。百姓椽澤五郎右衛門と云ふ者は先祖は京都東福寺の開

山にて、今年五百年忌とて東福寺より尋ね來りしに、其子孫五郎右衛門、東福寺へ参りたる」と云ふ。

廿四日。曇。元通町小判屋源右衛門方へ参る。本膳など出だし、酒肴以て馳走になり、日暮に歸る。

廿五日。曇りて寒し。給を用ふ。晝を描くのみ。

廿六日。曇。晝より清水觀音と云ふ處へ参りて、門に二王あり、其作至つて不細工、一向の田舎なり。

廿七日。曇。大田原侯へ参る。客あり。晝を描く。

廿八日。天氣。九時より玄庵と久能山「三字ノ上ニ一ヲ引キテ消シアリ」へ参る。此處より三里、御法樂とて參詣多し。辨當、酒、菓子、茶器等を持たせ、玄庵宅の裏路を行きて本道へ出で、久能に至るに、前は海なり。山は俄かに高し。石段十七斜めに曲り、石の欄干登り盡して、唐金の鳥居あり。左に五重の塔あり。右に經藏堂。御廟は山上に有り。正面本社なり。夫れより山を下りて、一里餘を行きて龍華寺あり。山

の中段に、庭に蘇鐵甚だ大きし。亦サボテンあり。九尺程にはびこり、其花咲く。黃檗色、福壽草の花に似たり。此の續きに久能寺あり。山に登りて觀音堂あり。眼下に蒼海を眺め、海の向ふの遠山は伊豆の天城山、鶴卷山、駕津山。左に寄りて箱根山。其向ふに富士山。前には藤川の邊より岩淵、薩埵山、清見寺山。左に沼津、江尻の邊、山連りて、亦海の半には、右の方より三穂の洲三筋に出でて、下の人家ある一村は清水の湊なり。家は千餘軒、泊船數艘舟掛かりして、漁舟は木葉の如く、誠に天下絶景なり。昔雪舟、支那に渡り圖したるは此處より見たる景色、是れを渡唐の富士と云ふ。此下に富士見橋と云ふ橋ある由。富士を見る景、天下第一なり。此日夜に入り五時過ぎに歸る。

廿九日。雨天。小判屋頼みの晝を描く。善藏に彩色をさせる。海元亮、戴安道の晝、禮持參。鹽谷桃庵來る。主人庄藏出で、酒肴を出だす。

三十日。大雨。晝事。

六月朔日。天氣。小西宗與と共に曲金と云ふ處に九兵衛と云ふ者、田地三千石を持つ。此處へ参る。病に伏して逢はず。夜に入り大風。

二日。天氣。小判屋源左衛門來る。頼みの晝を遣はす。

三日。天氣。小判屋より晝の謝禮來る。此日玄庵と二丁町と云ふ處（此地の色町なり）参り、往來のはづれ左へ少し入る處、誠に二町あり。入口に茶屋あり。玄庵案内にて何屋とか云ふ亭に登り、新造を二人呼ぶ。

八部山ヨリ眺むる圖

昔靈舟遊干支那而
所圖富嶽之日系何
中望無知者余登
於駭陽矢部神
陀洛山上始觀之

寛政己酉春
三月三日鷹野
平安客館乃入
天覽



中位の美人なり。酒肴出でる。硯蓋にタタミイワシとて、白魚を干したる物に醬油付け焼きたるをあしらへ、其餘の食品皆之に順ずるなり。日も暮れければ、娼婦の云ふ、「チト、其處ラへ參ロ」と云ふ。初會にて手を引かれ、見世を見歩る。誠に奇妙なり。二階の縁に欄干あり、皆穿き物を此處に置くなり。疊きたなし。酒一向に呑めず。故に酒肴は別に申付け取寄せるなり。地まはりとして、サラシの手拭を頬冠りにして、ぞめく者あり。酒さへ呑ますれば座敷へ參り太誠を持つなり。亦此處に酒樂とて其頃通人あり。然るに江戸吉原は此處より來ると云ふ故にや、見世格子、吉原の趣なり。然るに女郎の見世に並び様に違ひあり、格子の處は横になり、暖簾の内に入りて横の處正面なり。打掛にて並びたる見世付吉原風なり。夜に入り雨風。此處に泊りて翌朝歸る。

四日。大風雨。四時頃止む。海老屋太助、桃源の畫の謝金持參。

五日。天氣。暑を催す。玄庵、宗興、兩三輩にて寺町と云ふ處、野芝居あり、見物す。江戸より尾上松助、三津藏、佐野川市松、其外此藏、三郎參る。狂言草履打。岩藤に松助、尾上に三津藏、下女はつに佐野川市松、また菅原車引の處あり。(此の駿府に久しく滞留せし故、江戸より從者に連れ來りし松前の者不埒の事あり、故に此處にて暇を遣はす。)

六日。天氣。さて此處より庵原と云ふ處へ行かんとて、玄庵案内者にて明朝此處を出立せんとて、太田原侯へ御暇乞に參る。御酒出で、金子頂戴。宿庄藏へも書を贈りければ是れも金子を贈る。

七日。天氣。府中より三里半、江尻の山の方にて往來より一里入り、山中なり。庵原川、小き流あり。其川の左右に僅かに人の家あり。柴田權左衛門とて富家あり。先づ此處に至る。酒肴を出だし、主人の兄は原の白隠の弟子にて、弟に家を譲り、剃髮して蘇溪と云ふ。長崎の方を游歴して此頃歸ると云ふ。

八日。天氣。晝頃同所、川を越えて向ふなり「るカ」山梨平四郎方へ參る。是れも富家にて酒造なり。子共兄弟三人、兄は書を好み、次男は多藏と云つて劍術を好み、三男醫者なり。景平と云ふ。甲州八代郡石和村の者、信州野田曾根榮治門人、同村同所内藤一新齋門弟、小野一統流山中幸太郎と云ふ者なり。「劍術御好みの方之れあると申す事承り及び候。夫故參り申す」と申す故、道場へ通し、仕合を望みける。我等も座に連るなり。其外大主人、五十餘の人なり。兄弟三人、また壽慶と云ふ坊主、是れは江戸廣尾に百五十俵取の旗本、親近藤宗三とて、譯ありて親に切られ、家を出でし者なり。顔肩に切られたる疵あり。恐ろしき様子の子者並び居て、多藏門人一人出でて相手になる。劍術者幸太郎、甚だ此の様子を見て、恐れ怖ぢけて忽ち負けたり。赤面して早早歸りける。大笑なり。

十日。天氣。泥龜を取らんとて、壽慶惡坊、多藏を連れ、田の畔、山の腰、無上に歩し、泥龜無し。故に道に寄り、酒を呑みて歸る。

十一日。天氣。川に向ふ柴田權左衛門方へ鱈振舞に參る。江尻海にて取る魚なり。

十二日。雨天。全體江尻まで歸りたるは、府中に長く居たるは兎角氣不勝、大田原侯仰せには「夫れにては

長崎までは覺束なし、一先づ江戸へ歸りて出直すが宜かるべし」との事故、先づ歸る氣にて此處まで参りたるなり。然るに此の庵原に居て三人の兄弟と共に酒を呑み、誠に宿無しの如く、一向に苦無し。故にや、氣分善くなりければ、またまた長崎へ往かんと思ふなり。此節雨天續き、大井河漲りければ、見合せて先づ此處に居る。

十四日。雨天。寒く、給を用ふ。

十五日。雨。三男亮平は本宅よりは三丁ほど隔たり、四面皆田にて一軒家なり。誠に寂寞として人語無し。其夜泊る。大雨。樂山亭の額あり。誠に山四面を廻る。

十六日。偶然として暮す。老婦利口な人なり。度度江戸へ出でたる故に江戸の話をし、心安くなる。

十七日。雨。川向ふの柴田氏へ行き書を描き、一宿す。

十八日。書頃雨少し晴る。少し暑を催す。主人と共に江尻某の處へ行き、兆殿主〔司〕の羅漢の畫五十幅あり。之を見るに、一向の畫なり。此處を去つて清見寺に至る。畫二三紙認め、日暮になりければ即ち泊る。誠に山寺にて、瀧の音を聞きて獨り眠る。其夜雨止み、漸く月出で、青天を望む。阿部川、渡舟すと聞く。十九日。朝天氣。四時より亦雨。清見寺の山へ登る。路に瑠球人の塚あり。四丁程登りて三十疊敷の亭あり。朝鮮人の詩あり。至つて俗筆なり。眼下に海を望み、海中に三穗の松原、洲幾筋にもなりて、其景妙なり。右の方へ下り大慈閣あり。僧一人住す。夫れより方丈に歸る。本堂の脇に家康公の駕籠あり。四つ手駕籠の如く、至つて龜末なる物なり。方丈にて畫二十枚認め、皆出來惡しし。晚方庵原へ歸りぬ。

廿日。天氣快晴す。明日は此處を出立して、いよいよ長崎の方へ赴かんとす。

さて府中より此地の風土、暖土にして、風蘭、石斛〔斛力〕蘭、水仙、自ら山野に生ず。蘇鐵、サボテン、地に生じて大きし。故に花咲き實を結ぶ。府中に町九十六丁あり。男は江戸の物言に少し異なる。女子の言語は甚だ異なり。女は必ず色黒く野卑なり。たまたま色白く好き女は他國の産れなり。婦人老ゆるまで後ろ背にする。冬は寒からず、雪も多く積らず。夏は忽ち氣候變じて冷氣となる。是れは富士より冷際の風を吹き下ろす故と云ふ。庵原は江尻と沖津の北の方へ一里山に入り、庵原川僅かなる流にて、其左右に人家あり。山梨、柴田川の左右にあり。此の兩家のみ富家なり。川の上は北瀧とて三四丈落つる瀧なり。此の山中、紙を漉き、木を樵りて産とす。農夫皆太布を着る。甚だの深山なり。

廿一日。天氣。朝、山梨を出立せんとす。兩家より饒別に寶金を贈る。また府中に来りて長谷玄庵を弔〔訪〕ふ。太田原侯へ傳言を頼み、瀬戸川を越し、程無く阿部川を渡る。水出でて漲る。夫れより宇津の山を越して、卷狩橋、八幡橋を渡りて、漸く藤枝に至り、小西庄兵衛方に泊る。庄兵衛の曰く、「此所より十里あり、遠州に櫻が池あり。秋の彼岸に祭あり、供物を櫃に入れ、中に入るに、其櫃直ちに沈む事奇妙とす。」庄兵衛内は甚だきたなき事、疊、蚤の幾らも飛び出で、夜中一向に寝られず。誠に蚤に喰はれける。(庄兵衛悴弊喜、歳十六、之を連れ、此者長崎まで至りて江戸まで来る。)



金谷見ヨリ見下る図

下ノ町 登谷宿
大井河

信州山
雲海

大井河



廿二日。天氣。晝頃より大塚甚兵衛とて、藤枝一人富商なり、酒造家にて、此節米拂底にて酒は休みて居けり。庄兵衛と共に此處に至る。兄弟、兄は藤藏と云ふ。弟は軍藏とて、二人出でて酒肴を出だしてもてなす。「昨夜は嘸かし御難儀なされたと存じ申す。」兩人ともに文人にて、畫を好む者にて、甚だ喜び、數日滯留を願ふなり。

廿三日。天氣。畫を二三紙描く。酒肴を出だし、兄弟離れずして話しす。晩方裏口より出でて、田畑を隔て蓮華寺と云ふあり、池あり、其堤に登り、酒、茶、菓子等取寄せ樂む。

廿四日。天氣。暑を催し熱し。おらんだ風の畫は蠟油を以て彩色をす、故に、光澤ありて眞物の如しと云ひければ、兄弟頻りに請ふ故に描かん事を約す。然るに府中に暫く滯留の中、長崎の方へは參るまじとて、蠟畫、其外地球の圖、其餘蘭物、皆江戸へ返さんとて、府中に置けり。飛脚を以て取寄せんと云ひければ、兄弟早早飛脚を遣はし取寄せける。此處より五里、往來十里なり。蠟畫パウリユスと云ふ半身の異人の像なり。髭のチリチリとしたる處、誠に活けるが如し。見物の者 奇意「異」の思ひを爲す。亦地球の圖を以て世界の事を話す。聞く者、此様なる話は初めてなり、感ずる。

廿五日。天氣。蠟畫を描く。皆皆肝を潰す。

廿六日。天氣。小西庄兵衛が忤十六歳になる者、此處より僕として連れる。五時過ぎに立つ。兄弟、金寶を餞別に贈る。大主人は江戸へ出で留守、(是れは能 亂舞を好む) 故に逢はず。大門を開き外まで出でて送

る。夫れより瀬戸川を渡る。松原へ出づる。左に土手如きは金谷原と云ふ。大井河漲り、八十八文、川運臺にて渡る。金谷棒はづれにて中食をす。右の方に城の趾とて山の形あり。皆往來山坂路、半里程を過ぎて顧みれば、金谷宿直下に見え、向ふに大井河、幾瀬にも成りて流る。其亦向ふ富士山見え、左の向ふ遠くに信濃ノ山見え、好き景色なり。夫れより小夜の中山越え、日坂より掛川に至り、矢口屋と云ふ家に宿る。七つ時半なり。此日甚だ暑し、伊勢、西國は大洪水と云ふ話を聞けり。

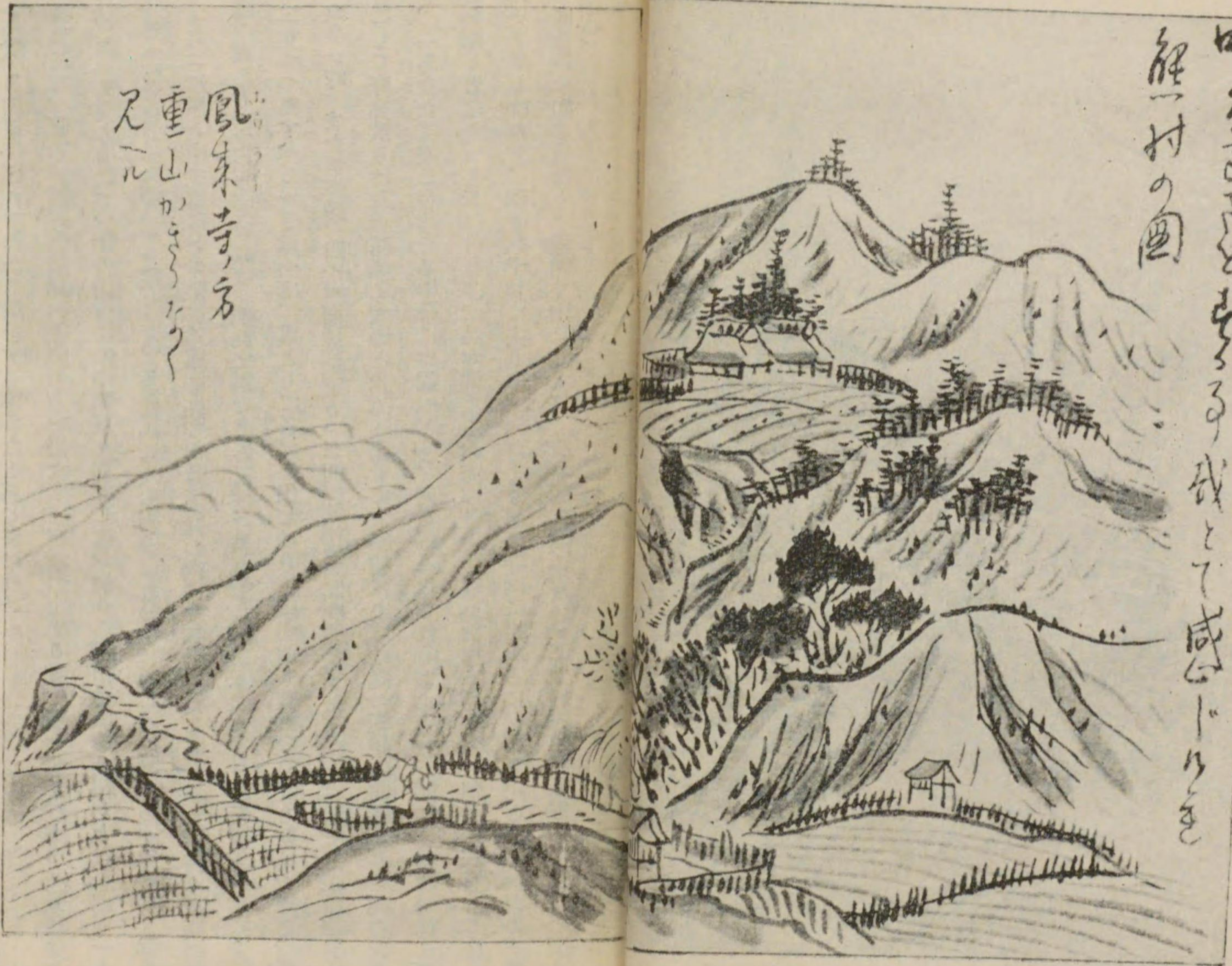
廿七日。朝より快晴。暑し。朝、掛川を出立して、宿はづれに鳥居あり、秋葉路なり。山路にして二里程行き、流あり、歩にて越す。また一里行きて川あり、歩にて越す。夫れより森と云ふ宿なり。一の瀬と云ふて人家あり。森宿は好き所にて富商あり。番茶を仕出す處なり。此處より流川を渡ること六瀬なり。山中に處、此處も八九軒人家あり。酒等あり、人求める。すべて此河を四十九瀬渡る。皆同じ流なり。三倉より一の瀬まで半里、一の瀬より麓まで三里と云ふ。楠屋と云ふ家に泊る。「以上第一冊」

麓の前に瑞雲坂を下り、瑞雲寺あり。夫れよりして小天龍と云ふ川、また乾川、舟渡し、乾村あり。人家つづく。また麓までに坂あり。此處まで掛川より五十丁九里の路なり。山山高く杉松の木茂る。秋葉參詣の往來なれば、山中と云へど酒等あり。泊りをする家もあり。樵婦も田婦も山中と云へど鬘さしを入れ髪を結ぶなり。麓より山に登ること五十丁なり。先づ唐金の鳥居に額あり。金明嶺とあり、三十丁過ぎて山門に最勝

關とあり。本堂に大登山、月舟の筆なり。堂は南面、本尊觀音を安置す。鎮守南向權現の社あり。寺は禪宗、秋葉寺と云ふ。是れより三河の國の鳳來寺へ行く路なり。即ち寺の後ろより坂を下ること五十丁、戸倉と云ふ處に至る。山坂多し。半里過ぎて犀河なり。此處にて休み、晝食せんとて腰なる行李を取出だし、握り飯を食ふとて當り「四邊」を見しに、老婆一人居て云ふには、「あなた、どちらのお國のお方でござる」と申す故に、「吾等は江戸の者」と云ひければ、婆婆の云ふ様は、「夫れは夫れは御封はう「果報」なる事かな。お江戸は好い處と承ります。此處はまあお聞きなされまし。米とては一粒も無し、稗、麥に芋の食に致します。其上鹽は拂底、味噌など得難く、生魚とては見た者一人もござらぬ。晝は猿の番を致し、夜は猪を追ひます。御覽の通り、畑の廻りに圍ひを致します。猿は其の圍ひを飛び越して麥や稗を荒します」と話ける。握り飯の食ひ残りを四つ五つの小童に遣はしければ、誠に饅頭でも貰うた様に喜びけるなり。犀河は天龍河の源なり。川原ヒロビロと廣く、此河、舟渡し、何處を見ても渡し舟見え。人の足跡あるを見て行けば渡し場なりと思ひしに、人の足跡にはあらず、獸の足跡なり。夫れより大音にて「舟よ、舟よ」と呼びければ、何處からか舟出でければ、其舟に乗り渡りける。六月の炎暑なれば往來の人曾て無き故なり。渡し守一人二人を渡しては賃錢取れぬが故なりとぞ。此處より石打と云ふ處へ出で、また二里を過ぎて熊村と云ふ處、山の中段、誠に深山にして溪水飛び流る。日も晩景になりければ庄屋の家に泊る。此家、障子無し。夜になれども燈火無し。松の節を燈火とす。寐入りて、夜更け、猪を追ふ聲を聞く。江戸に産れて此の



カイ川一休の圖



かろくこととまろり我とて感ドクを
解一村の圖

鳳来寺方
重山からうたう
見

山中に至ること初めなり「れカ」ば、奇妙に珍しく思ひぬ。此處まで來る路より人を雇ひ荷物を持たせしに、廿二三の女なり。額にて背負ふなり。顔色を見れば相應に見え、衣裝を好く化粧するならば美人とも云へしが、斯かる山家に産れて斯かる業をする事かなと感じてけれ。

廿九日。天氣にて、明方、熊村庄屋孫右衛門の方を出立す。四面の山より霧、靄を起し、山中の景色なり。人足の者話に、「去年の事にて、此の山中にて小童草を刈りしに、何やら獸出でて飛び掛かりければ、一人は逃げたり。跡へ行き見れば頭ばかり残してあり。當年も大の男追はれける。何と云ふ獸やら、色は赤く覺えた」とや。また「江戸と申す處はどの様なる處」と聞く故に、荷の内に我等造りたる視目鏡を所持す。兩國橋の圖、江戸橋の圖あり。之を見せければ、惘れて誠なりとせず。吾れ戯れに曰ふ、「是れは唯だ見せてはならぬ、一人三十二文つつ出すべし」と云へば、眞として各錢を出しけり。山中の人質朴なること斯くの如し。巢山へ一里、カウレ峠、また坐頭轉、四十四曲坂を下り、三河、遠州界の峠一里半、五十丁一里にして大難所なり。殊に炎暑にして汗を絞りける。程無く大野と云ふへ出でて人家續けり。此處の間屋は醫者なり。其の醫者の云ふには、「あなたは差し付けたる申分には候へども、何を好みなされるおん方」と問ふ。「我等は江戸の者にて畫を描く者なり」と云ひければ、「左様なるお方、此邊の地へお出で希なり。何卒兩三日私宅へお滞留あれ」と申しけれど、留まらずして去りぬ。夫れより鳳來寺山に掛かるに、板敷川と云ふ流あり。淺くして川の底皆板の如き岩なり。程無く山に登るに、行者越と云ふ處、一二寸岩石を踏み攀ちて登る。頂まで

五十丁、遙かに遠州海見える。山山波の如し。三四丁下りて權現の祠あり。石階を少し下りて、藥師堂、本堂なり。末社、堂の後ろに多し。左の方、岩に沿うて塔あり。夫れよりして石階を下ること九丁、其半に十二坊、天臺眞言の二派あり。學頭に天臺には松高院、眞言には醫王院の二坊なり。山を下り盡せば角屋町、旅館多し。此處を過ぎて瀧川へ出る。舟にて渡る。錢瓶村あり。三里を行きて新城と云ふ處、人家續きて富商あり。夫れより野田へ二里十六丁、大木村へ三里、豊川左に見て、小ナカフドが原、家のが原、本野が原。此間、原にして木無く木陰無くして、誠に暑し。夫れより松原を行くこと一里餘、漸くにして御油往來へ出でたり。掛川より入りて此處まで五十丁一里にして二十七里、大難所なり。七月朔日なり。角屋宿を出立したる日なり。御油へ出でければ、誠に江戸へ歸りたる心地したり。赤坂宿、八文字屋市三郎方に泊る。

七月二日。好き天氣。至つて暑し。赤坂を正六つ時に出立して、岡崎に至るに四つ時少し過ぎなり。晝食す。夫れより舞木村など過ぎて藤川に至る。岡崎は好き驛なり。

此虻、江戸近在に見ず。蜂に非ず。アブなり。此虻、能蜂を喰ひ付きたるを取り寫す。此道中筋に多し。

池鯉鮒、鳴見、此間矢矧の橋あり。また八つ橋、杜若の名所。桶峽、今川の亡び「し脱カ」名所。右へ少し入り石碑立つ。尾張屋と云ふ家に泊る。



三日。天氣。誠に大暑なり。朝六つ頃出立して、五時頃宮に至る。舟出る故に舟に乗り、桑名に着く。四日市を過ぐる事半路、日永村清水源兵衛宅に至る。此處は江戸に出見世あり。兄弟出でて話す。六月二日出の状を見る。

四日。天氣。大暑。此處に暫く滯留す。父子出でて話す。晚方夕立、冷氣となる。

五日。天氣。暑し。草畫六七枚出来る。また金の小襖、山水の畫認む。少少不快。父子世話する。

六日。朝雨。少少冷氣。病氣未だ不快。夜に入り大雨雷。江戸中橋の者、白川侯へ西の久保を通行の時、鶴籠へ直奏したると状の中にあり。

七日。天氣。晚方雨ばらつく。庭にて蟬の蛻けるを見る。兎角癩氣なり。

八日。雨。今日も不快。夜も眠らず。

九日。曇る。後天氣。不快少少宜し。龜六と四日市筑地と云ふ處の高尾九兵衛と岡三英、右の者と娼家に登る。酒を呑みて日暮歸りぬ。三英女房、吾に向ひ云ふに、「行かしてござりませ」とは、「もうお出な脱力」さるか」と云ふ事なり。「サイゼン」とは四五日も過ぎたる事を云ふ此地の言なり。

十日。天氣。四日市西丁澤邊三藍は龜の石を所持す。見物に行く。晝食出す。明の小僮の畫を見る。波を渡る仙人なり。中條木屑と云ふ人は津の町の茶人なり。此者の云ふ、「江戸に參りし時、江戸橋と云ふ處を江戸の人を雇ひて供にして通りしに、茶人、往來の人を見て云ふには、『今日は何事か有りしや』、供の者へ尋

ねたり。江戸は人の多い處なり」と話しける。

十一日。天氣。高尾氏頼みの畫出来る。

十二日。天氣。鴨の畫、衝立獅子の畫出来る。晚方裏の田畑へ出でて歩す。日暮庭に床机を立てて涼む。此處に長右衛門は源兵衛の伯父なり。其妻京の産れ、京の話聞く。

十三日。天氣。雨ゆゑ暑さ緩む。晚方給を着たり。此邊、盆踊とて、此村より出す踊あり。四日市より半路隔たり、此處の踊は「ツンツク踊」とて、十二三、十六七の男女、手を取り輪に成つて、「ツンツク、ツンツク」とて踊るなり、中に十五六の男の子、白き晒布の手拭を頬冠にして歌を歌ひて太鼓を叩く。

十四日。天氣となる。今日は中元の御祝義とて、一村皆皆禮に至る。晝食には餅に小豆を付けて食す。其夜も前夜の通り「ツンツク踊」あり。踊と云ふには非ず、唯だ手と手を取り、伸びたり屈んだりするのみ。誠に田舎の踊なり。婦人も綿帽子を被り禮に歩くなり。

十五日。天氣。朝飯、料理も無し。ズイキ酢あへ、小豆を壺に入れ付けたるのみ。日暮より龜六同道して四日市行き、盆踊を見る。桑名、此邊は川崎音頭とて、女郎、お山、蘆笠を被り、羽織着たる者は巻き羽織にし、踊は中に屋臺を造り、男數人居て三味線に合せて音頭を歌ふ。其の文句年年變る由。さて宮を越え、此地は言語風俗、皆京に屬す。家の建て方、大家根の軒を長く出して、隣の堺に「ヘキリ」とて塀の様なる物を入るなり。大火後、京都には此の「ヘキリ」無し。

十六日。曇る。後天氣。此の四日市、日永よりも四里程あり。菰野と云ふ處、土方侯一萬石の領地なり。此處に鈴木久右衛門とて畫の門弟あり。此者を弔〔訪〕はんとて、從者と二人して參りけるに、漸く晝頃に至りける。鈴木氏宿に居て、酒肴を出だして馳走する。此處に久保幸助と云ふ者來る。

十七日。雨時時降る。同藩に伊藤孫右衛門と云ふ者、雪溪の門人にて畫を描く。鈴木氏と共に久保氏を弔〔訪〕ふ。二十丁程隔たりたる處なり。此路河原の幅一丁程ある砂漠あり。石磊磊として水無し。湯の山、青瀧と云ふ瀧の流の末なり。漸くにして至る。主人は文人にして風流なり。座右に文房を飾り、珍品多し。甚だ馳走する。歸らんとする時、右に云ふ幅二百間も有る河原一面に大河と成り、渡ること能はざる故に此處に一宿す。主人は吾を待つ事數年なり。「先生を此處に留めんとて砂漠漲りたり」と云ふ。

十八日。雨天。此處に滞留して畫を數枚認める。書齋に修講館の額あり。終日雅談不盡。

十九日。雨天。青瀧を見ん事能はざる故に、伊藤孫右衛門方へ參る。茶人なり。圍ありて茶酒等出だし、芋蕪を煮て馳走す。また鈴木氏へ歸る。谷川にて取りたる鰻、蒲焼にして食ひける。至つて美味、然かし皮硬し。鈴木氏に泊る。

廿日。雨天。湯の山へ行かんと欲す。一人案内の者を連れ、此處より二里を隔つ。先づ一里を過ぐ。一里方なる原あり。其頃秋なれば萩、桔梗、女郎花、白シシ、花盛り。小松、小笹を生じ、また山は皆土に非ず、石の碎けたる物にて色赤く白し。谷河あり、中に大石の幾らも有りて、水其石に觸れて飛び流る。怖ろしき

湯の山谷川





處なり。其石より向ふの石へ飛び越える事なり。落ちれば深し。四面皆山の間なり。思ひ切つて飛び渡りしに、二三丁行くも亦同じ様なる谷川あり。以上三つ渡りて、程無く湯治場に至る。山間に家を造る事十軒ばかり。半に湯屋あり。湯の涌く處は山の根にあり。水の如し。火を以て沸す。浴する者多し。近江水口の奥、日野より山を越え來る。四里を隔つ。人家無し。溪川三つあり。狼、熊住む。總べて此の山中、家無く土なく、〇〇如此くなる石の碎けたる物にて、野菜不生、五穀尤も無し。宿の主人鉢に朝良を植ゑしに、其砂へ植ゑたる朝良是れを土と思ひしにや、花咲きけれ。客館は橋屋と云ふ家に居しに、或時青瀧を見んとて、一人衣を着たる出家を案内者として行きけるに、山の棧道を行く事にて、下は深き谷、一方は山なり。其路曲曲と巡り行く路にて、向ふより熊の來りしにや、熊も此の行く者も一向に知らずして、山の棧道の曲り角にて、思はず知らず熊に出合ひければ、先に立つたる出家肝を潰して、衣の兩の袖を翻しけり。熊一向人の來る事を知らず、風意なる故に、熊、人の如くに兩手を揚げて立ちける。勢に、仰退に谷底へ落ちけり。夫れ故後をも見ずして逃げ歸りける。故に瀧を見ず。また江戸屋と云ふ旅人宿あり。其主人、下菰野へ行き、歸るとて、甚だ酒を呑みて酔ひ、一里方なる彼の原中にて狼三疋出でて飛び掛かりしを、酔つたる勢に櫂の木を腰に指して居しが、其棒にて三疋ながら打殺したり。酒と云ふ物はすさまじき勇氣に成る物と話しけり。宿の亭主の話しけるに、「内の男、山仕事に參り、歸りに木を背負ひて行く後より、狼送り來る。此男、石など打付けつつ歩みしに、遂に宿へ歸る。夫れより

急なる用事にて下菰野へ日暮れて出でけるに、最前の狼、彼の溪川の石に乗りて待つて居けり。夫れ故行かずして歸る」と云ふ。狼は兎角避ける事を耻づる者とぞ。此地、冬は雪深く、夏は冷氣にして、野菜生ぜず。土無く、皆岩の破れたる小石の如くして、山碎け路を埋め、四面山高く、常に雲霧を生じ、其頃兎角雨降り、四日市の方を望むに遙かに見え、日照して青天なり。歸りたく思へども谷川水出で歸る事能はず、困りける。

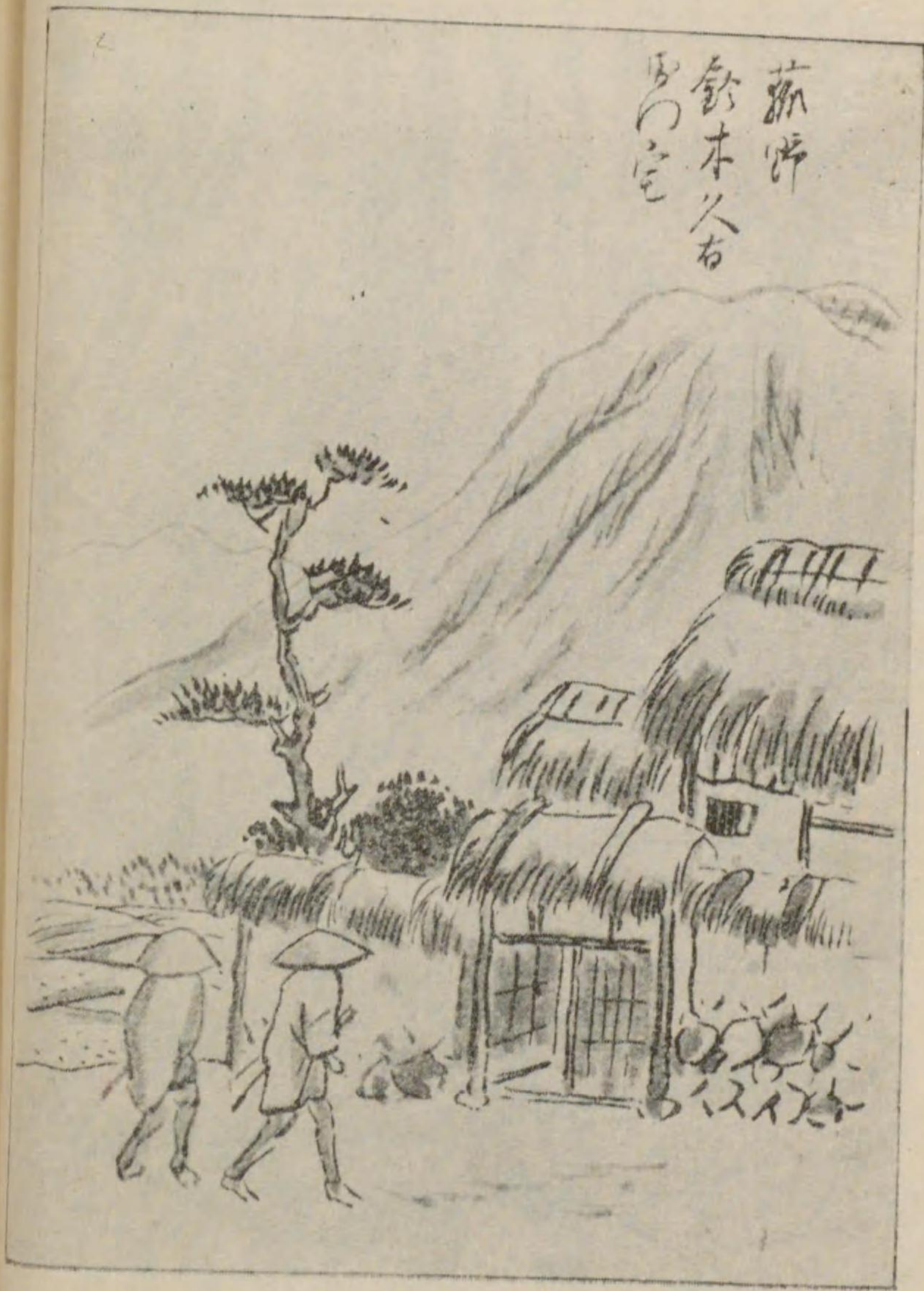
廿一日。大雨。亭主晝を請ふ。此の山中に唐紙二三枚持ち來る。富士の圖、兩國橋の圖、芝の増上寺の圖三枚を認め遣はす。日暮よりまた大風雨なり、四日市お山五人居れども是れも歸る事能はず。

廿二日。昨夜より大嵐なり。銅板晝、目鏡を見せる。皆皆感心する。

廿三日。朝より風雨。山山雲を吐き、いつ天氣になるべしとも見えず。夫れ故何分にも歸りたしと云ふに、歸さず。昨日、所の者彼の谷川にて過まつて死にけり。「此處元へ御出の時お飛びなされたる石、皆水底と成り、流れ尤も急にして、其石に滑りて倒れければ、石に觸れて忽ち死に申す」と云ふ。然れども甚だ體屈しければ何分歸りたしと云ふに、附け人足八人掛かりにして彼の谷の急流を渡り、誠に危き事、命掛け成り。三つの谷川を越え、人足を歸し、夫れより二人して一里ある原に至るに、雨は頻りに大降りとなり、原は小き笹の生じて芝の如くにして、細き路僅かにして、其歩む路瀧の如し。誠に難義なり。また一つの川あり。谷川には非ざれども水出でん事を恐れ、急ぎ行きけるに、果して水増し、股切りにて越えける。夫れより松



菰野路なるに
 其時ひろい
 石とつみりて
 難義なる
 名ツク其石と
 見ても其時
 ると思ひゆる



蘇峰
飲本久右
馬の宅

原へ出て漸く鈴木氏の宅へ歸りぬ。飯酒を出だしけるに、頃は八時過ぎにて、雨頻りに降り止まず。日永ま
で參る路に川あり。水の出でん事を恐れて日永へ歸るべしとて、鈴木氏を出でて、行く事一里、大雨止まず。
佐倉一色村と云ふ處あり。此處に御瀧河の末と云ふ、幅八九間あり、手と手を組んで渡るに、向ふの土手
の後ろより人出でて云ふ、「其橋の落ちたる跡は首も立たず」と教へたり。夫れより路無し。田の畔を四五
丁ばかり行く。四面人家無し。雨はますます降りて日は暮れ掛かりければ心細く成りける。路一向知れず。
田は深田にて踏み込めば草鞋を下へ置きて足を拭く。漸くにして堤へ至る。家一軒あり。又川ありて、水車
の樋の中を行きて、向ふへ越し、夫れより程無く日暮れ、日永へ二十四五丁を過ぎて行き着きける。
廿四日。朝天氣。晩方大雨。夜中止まず。主人と話す。「善くぞや歸りたり、菰野山中さぞさぞ大水ならん」と
申しける。

廿五日。天氣。時時雨。四枚襖、墨晝認める。

廿六日。天氣。油照著し。四日市諏訪祭あり。夜宮にて、龜六と參る。京風の山と云ふ物出づる。富士の卷
狩の練り物を見物す。三省方へ參り、食事酒肴出だす。日暮れて山參るとて、其山に提灯數とぼし、夫れ
へ參る事なり。夜に入り日永源兵衛も來る。龜六、お山一人連れ來る。此間湯の山にて見たる婦なり。ま
た近邊の娘十七八の者參る。美人なり。物云好し。髪は京風島田くづしを後ろの曲を多く出だし、前の方は
少しにして竿に引つ掛け、鬢も少し出したり。江戸の女より至つて好し。赤飯家毎に出来るなり。

廿七日。天氣暑し。四時より四日市へ參る。祭見物、所所散歩して、其所の風俗を見るに、婦人總べて越後縮、次は晒布。絹は更に無し。宮參りする婦人、絹にて綿帽子の如く是れを戴く。町數五六丁四方なり。江戸より暖氣。地面も砂地にして、雨止むと忽ち草履にて宜し。江戸の様に泥濘る事無し。蚊多くして、蚊甚だ大きし。

廿八日。天氣少し曇る。晚方雨。雷も少し鳴る。八部山眺望の富士大横物出来る。福祿壽の畫、三省に贈る。

八月朔日。天氣。風あり。高尾九兵衛、畫の謝金持參。主人よりも錢別寶金を贈る。明日出立して神戸へ至らんとす。

二日。天氣にて、龜六と同道して四時頃行き着く。夫れより城内へ入り、本田侯に見ゆ。涼しき所とて隅櫓へ登り、畫四五枚席畫。程無く旅宿へ歸り、其夜亦大雨。

三日。曇り。折折雨。四時より亦城内に參る。絹地畫六枚、紙五六枚、扇七八本認め、八時過ぎ神戸を出立す。程無く白子觀音に參詣す。此處を過ぎて津に至る。藤堂侯三十萬石の城下、富商軒を連ね、繁昌の地なり。雨、路より大降り。茶人木屑は日永にて逢ひ、申して云ふには、「私は津の町に居申す。必ずお道筋に候間、私方へお泊り可被成」と申す。故に此の茶人方へ參る。茶人出でて迷惑相なる顔色をして「是れは是れは雨にてお困り。さあさあ是れへ是れへ」と云ふ故に、先づ上に上がり見るに、家内三人なり。家は借

家と見え、町並にして内は廣し。三十三四五の女房、十八九の娘、どれもふきりやう「傍註、美ならず」。木屑は五十餘の人なり。居る風呂を立て、湯に入れ、食事して休みけれ。

四日。天氣。然れども時時雨。朝五時に此處を立つて、津の町を見るに、町横堅に有りて、往來は入口より出口まで二里程あり。好き渡海なり。夫れより雲津と云ふ處に至る。雲津川を渡る。此川、伊賀山より流ると云ふ。また河を二つ渡る。此間松坂を通る。好き所にて、江戸駿河町三井と云ふ越後屋の本案あり。一丁程住む大家なり。津と違ひ、横町は餘り無し。此處より「おわた」と云ふ處へ四里、此日多く歩行す。甚だくたびれたれば、一里手前、新茶屋と云ふ處に泊る。此邊六月頃大水出でたりと云ふ。

五日。天氣にはあれど、ハラハラ雨。朝出立して宮川の渡し渡れば、山田、皆町續く。皆瓦屋なり。日本國中より人の來る處故、繁昌の地なり。先づ下「外」宮へ參詣す。夫れより中の地藏と云ふ處に寂照寺に月仙と云ふ畫を描く坊主住みける故に尋ぬるに、月仙出て逢ひ、吾に向つて云ふには、「其方は何人なりや」と云ふ。「吾は東都の者にて司馬江漢と云ふ者なり、足下吾名を知らずや」と云へば、「如何にも知らず」となりと云ふ。此處に於て色色持ちたる畫出だし見せけり。其中に蘭法にて描きたる人物あり。髭のチリチリとして活けるが如き者あり。之を見て、忽ち其の挨拶變りて、「先づ内宮へ參詣して、我方にてお宿致すべし、ゆるゆる滞留し給へ」と云ふ。夫れ故に參詣して、歸りに寄りけるに、打つて變りたる馳走振りにて、酒肴よとて、其夜は此處に泊りけるに、其夜蘭畫を望みけるに、なかなか蘭畫は蠟油を以て作る故に一朝

に出来ず、彼れが如きザツ晝に非ず。故に逃れて前の娼家に行き見んとて行きけるに、お山十二三人、吾を中に置き、ぐるりと取巻きたり。さて之には甚だ困りたり。此地の風にや、酒も肴も未だ出さず、甚だテレたる者にて、やうやう酒肴と持ち來り、夫れより話などして所持したる覗目鏡を取寄せ、兩國橋、中洲の涼みの景を見せければ、お山ども肝を潰し、夫れより心安く話しける。「明日もお話にお出で」などとて歸りける。月仙待ちかね、再再迎への人を寄越し、其夜、兎角月仙話をして、肴も無き酒を出し、漸く五更過ぎに寝る。「明日は何分蠟油晝を望む」と有りければ、明朝二見が浦を見物して亦此處に歸るべしと申し置きける。(ダシヌケに出立しければ、月仙甚だ腹を立ちけるとぞ。)

六日。寂聖寺を出でて二見浦に行くに、山に入り、半路過ぎて川あり。渡りて程無く二見に至る。其路、茶屋に寄り、中食す。座敷袋戸、月仙の晝なり。戯れに一句を書す。「一水北流到吾屋、斷橋幽人傍岸歸」と。夫れより五六丁行きて浦邊なり。山の根に岩二つあり。其の波打にて垢離を取る處、聞きしよりはザツトしたる處なり。其岩の根を飛び越し、浦邊傳へに鳥羽浦に行く。其路往來に非ず。程無く一村に入る。川あり。舟にて渡る。夫れよりしては、山の腰を行く。一向路知れずして路を同ふ人も無き處へ、老婆と小童二人行くを見付け、其者の後に付きて行くに、山一つ越して磯邊へ出で、岩に飛び乗り、或は海に入り、また浦邊を行き、磯傳へに行く事なり。池の浦と云ふ處、池の様に海入り込み、飛島または七つ島と云ふ處あり。面白き處なり。夫れより松山を過ぎて鳥羽に至る。八時半頃なり。此處は狭き所なれど、大廻しの船此



二見が浦
鳥羽浦也



鳥羽浦

ヒヨリ山

爰に諸国の船

港留て天気

風と又名で

船と生えぬ

なる

小嶋敷
アール

處に船掛りする處なり。旅館多し。此處まで五十丁一里にして四里の路なり。旅館の裏の口より出でて四五丁山に上る。即ち日和山と云ふ。山上に小き亭の如き有りて、四方を眺む「る脱力」に、鳥數數見え、好き風景なり。此處にて日和を見定め船を出だすと。

七日。天氣。宮より舟に乗り、小島數數の間を乗るに、景色妙なり。飛鳥右に見て、左に淺間山を望み、二里程も走り、二見の岩を左に見、夫れより一里程過ぎて三軒屋と云ふ處に入内川なり。此處にて風少し吹き出す。沖にて風出づると甚だむつかしき處なりと。三軒屋と云ふ處を五六丁過ぎて川崎なり。此處より宮川の渡しへ一里、さて山田は裏裏まで草葺無し。皆瓦屋なり。川を渡りて、一里行きて晝食す。また一里半過ぎて金剛坂と云ふ處に、森島平四郎と云ふ者の處へ、津の茶人の手紙を添へ、我等に寄るべしと云ふ故、尋ねければ、入口に札を掛けたり。曰く、「儒者、學者、虛名の者、並に物もらひ不可入」と有り。夫れ故、尋寄らず。此處は山田への往來にて埒も無き色色の者寄りて難義なる事なるべし。夫れより櫛田川を越え、また餘程行き、松坂なり。一里手前より三寶荒神の馬に初めて乗りて見たり。漸く六軒茶屋に參る。此處にて悪しき家に泊る。

八日。天氣。西風。六軒を正六時に立出して、三里程過ぎて津に出で、夫れより窪田と云ふ處へ一里半あり。また椋本と云ふへ二里を経て、松山繩手を過ぎて、楠原と云ふ處へ一里あり。また關へ一里、坂の下へ一里二十丁餘來りて、坂の下に泊る。此處まで皆山路なり。

九日。上天氣。夜の引明に坂の下を出立して、山中にて明くる。往來皆山路にして土山に至る。宿のはづれより右に入り、日野へ行く路なり。山路に掛かり、小川二瀬越え、また大河を二つ渡る。夫れより山に登る。二里を経て「かる掛」と云ふ處、人家あり、此處にて晝食をする。未だ四つ半頃なり。夫れより田の間を行く。さて日野(岡本丁)と云ふ處に至るに、此處は家並びてあれども、前は正木の生垣にして、少し引込みて見世の様子あり。藥種屋多し。此處に中井源左衛門とて、一代に三十萬兩の金持に成りたる人なり。源左衛門隱居して其頃七十六七になる老人にて、其の子息は四十位にて、奥州仙臺に見世ありて未だ日野へ歸らず。夫れ故老人出でて、「あなたは、どちらからお出で」と問ふ故に、「私は江戸の者にて、かねて子息可七様とは御懇意にて、此度長崎の方へ参り候が、是れより京へ参り候序に此の日野へお尋ね申すべしとお約束致しましたが、未だお歸りは無きや」と申しければ、「左様なら先づお上がりなされまし」と云ふ。然し此のぢぢ様、一向に物好きも無さ相に見える人にて、家内を見れば人も少なく、然し家は善き普請にて、金持とは見えれど、是れは困りたる所へ参りたると思ひ、先づ奥の座敷へ案内して通しけるに、此間出柰たる座敷と見えて、至つて綺麗なり。先づ善き茶を出だし、菓子を出だし、夫れより茶漬を出だす。此處に於て申すには「我等所持したる珍物を御覽に入れん」と云ひければ、「ハイ、只今可七弟歸ります。其時拜見仕るべし」と申す。程無く弟孫三郎歸りて我等に挨拶す。二十五六歳の人にて、是れは晝も好きな人故、夫れより色色所持の物を取だし、覗目鏡を皆皆見物して感心す。ぢぢ様も甚だ喜び、母様も出でて話

す。夫れより膳を出だす。茶碗盛、焼物、壺、平、皆料理手際なる事なり。此處は湖水へも遠く、魚一向に得難し。夜に入り休みけるに、夜具は緞子なり、蚊屋は萌葱の紗なり。縁は緋縮緬なりき。

十日。朝曇る。後天氣。此の日野は山中故か、伊州よりは寒し。朝夕は給小袖を用ふ。銅板、覗目鏡は、此様な物初めて見る故、甚だはやり、二人嫁出で、一人は孫三郎妻と見え歳十六七、紫色の縮緬振袖を着て吾に逢ふ。老人夫婦も離れずして話する。家に藏する晝色色田だし見せる。中には善き晝もあり。

十一日。朝曇。蒸し暑し。二枚襖子、山水、また衝立花鳥を認める。茶菓子等出だしてもてなす。日暮れければ庭の石燈籠の火をとぼして、龍吐水にて庭に水を掛け、さて其頃中年の婦人、是れは京大火事にて此所へ奉公に來りし者なり。相應に暮したる者にや、是れに琴を弾かせけり。また吾が所持したる地球の圖を取だし、來る人人に講釋して見せけるに、歳頃三十六七位の婦人傍らに居て話を聞きしに、やがて近くへ寄り、「只今御咄を承るに、天竺お釋迦様の御出でなさる所も承知致しましたが、極樂と云ふ處は何處にござります。私はどうぞ生きて極樂へ参りたうござります。死んで行つては一向に夢中故、どうぞ生きて参りたく、其の極樂は何處でござります」と云ふ。此處は多く門徒宗にて、此内も其の宗旨にて、皆極樂へ遣る積りなれど、生きて行きたいには坊主もちと困り入りたると見えたり。我等此處に於て申すには、「さて生きて居ては極樂へ行かれぬ譯は、此の世界の圖は圓い物ぢや。其外は天でござる。此様な世界が天の中に幾つもござります。其中、極樂世界が有りて、此の圓いと丸との間が離れてある處は皆天でござる。此處で

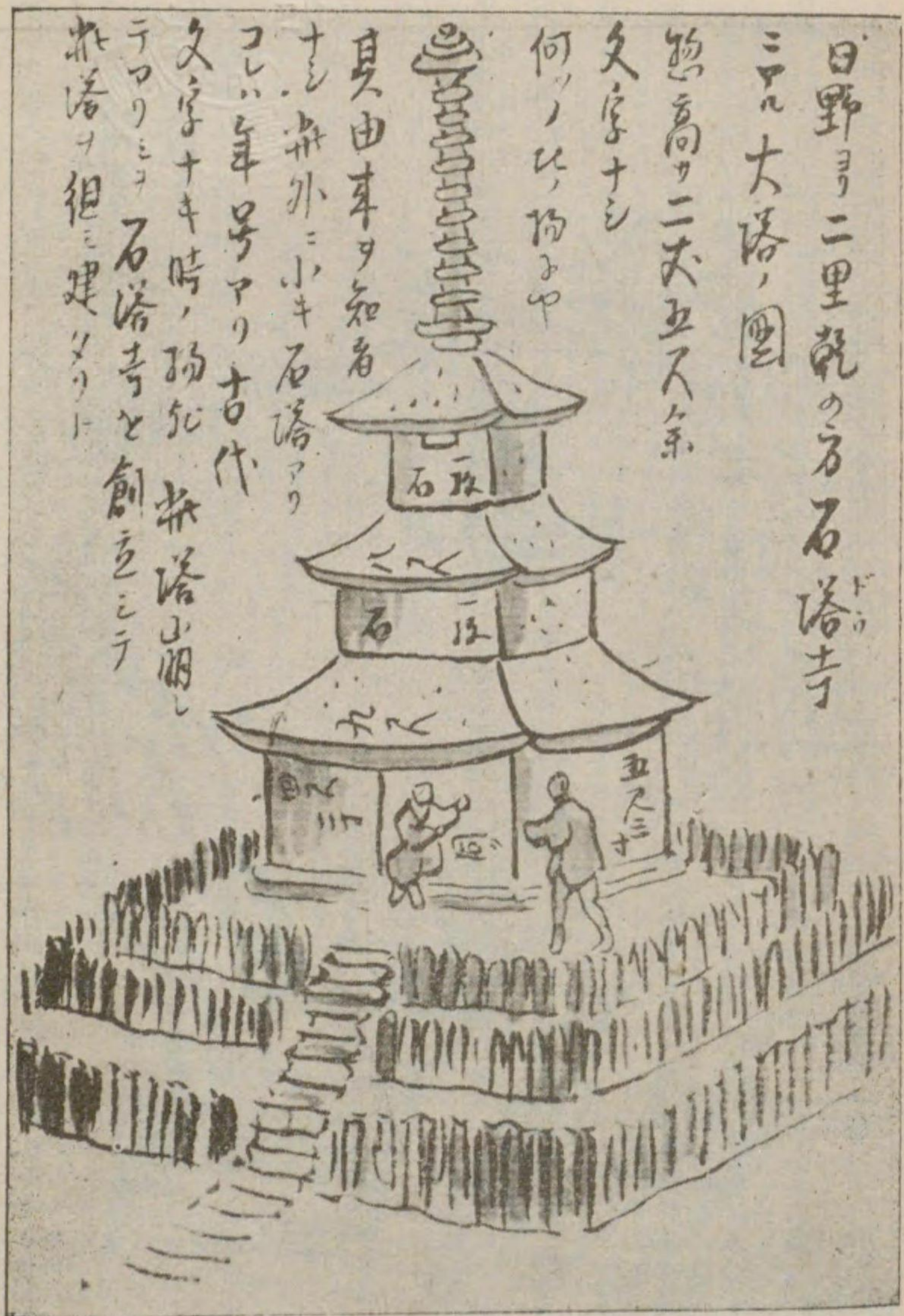
活きて歩るいて行かれぬ。此天を飛ぶには神に成らねば飛ばれぬ」と云ひ聞かすれば、其の婦人、至極に合
點して、「いよいよ阿彌陀様をお頼み申す事」とて、重に菓子、煮しめを贈りける。此の婦人は此家より近
所へ嫁して、今寡婦となりたるなりと。唯だ極樂へ行く事のみ願ふ人なり。

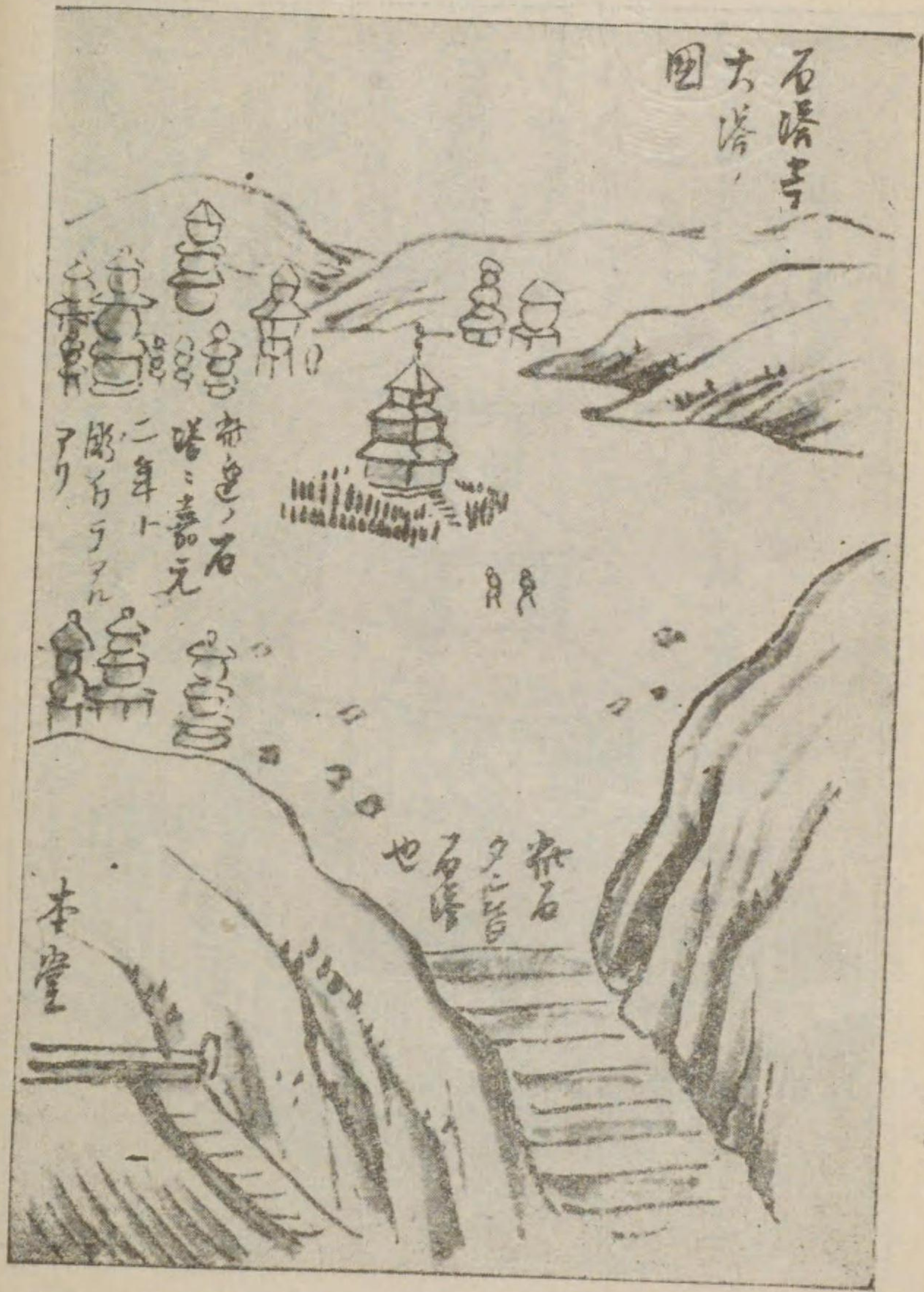
十二日。上天氣。此處の親類に助右衛門と云ふ人、其頃五十位にて、此日案内して、先づ六七丁行きて門徒
宗の寺に至る。本堂の天井に雲龍、左右十六善神を畫く。筆太にして雲谷風なり。此所の人の描きたると云
ふ。此處は一體人の利口なる所にて、畫など描く者數數あり。此處は蒲生郡と云ふ。水口佐渡守加藤侯の領
地なり。人家千軒餘と云ふ。夫れより山路に入り、一里餘を行きて小野村と云ふに至る。井田助右衛門、此
所に少しの知る人ありて其れへ寄る。此處にて辨當を開きけるに、小童四五人來りて辨當を食ふのを見物す。
故に煎餅を與へんとて出だしければ、四つ五つの小童は傍まで來りて取りけるに、六つ七つ位の者は怖れて
逃げ去りける。誠に山村にして地面平かならず、山に家を建て、家數四十餘軒と云ふ。夫れより田婦案内し
て、人魚塚を見んとて行く事四五丁、路の傍らに四角なる塚を指さし示す。吾が聞くに六角なりと云ふに、
また一人老婦の來りて、此處より西の方、不動堂の前に有りと教ふる。行き見るに小き草葺の堂あり。ガマ
の大樹ありて其傍ら六角の塚あり。是れ人魚塚なり。前に僅かの流あり。蒲生河是れなり。人魚塚は八角に
して文字見えず、高さ一尺二寸、下の臺石横一尺三寸位、また四角の塚は救世菩薩の塚と云ふ。人魚は蒲
生川より上がる。推古帝二十七年四月四日、聖德太子崩御の時と云ふ。日本記に有り。夫れより二里程行き

江漢西遊日記
人魚塚の圖



日野より二里余の處にあり
前川に二万石あり、大七
なる川系と云ふ
蒲生川是也 不動堂
かて木





て石塔村に至る。其の一村に入ると、其處らあたり皆石塔の片割れなり。寺あり、石塔寺と云ふ。本堂の礎、階段、其外皆石塔の古きを用ふ。石段を二三十間登る。其の石段も皆石塔なり。登り盡して、上平地にして、百五六十間も有るべし。中に石の塔あり。畫圖に出だす。雨降り出だす。日野より迎への者來る。雨具、傘、草鞋まで持たせ來る。邊土にて草鞋も無き所なり。夫れより日野までは二里田舎路なり。田畑を過ぎてまた山に入る。皆芽生じて大木無し。雨止み月を戴いて、其路鈴虫すたく啼き、芽を押分け押分け山を見渡し、漸く初更に歸りぬ。(以上第二卷)

此の入魚塚ある處は仙臺候八千石の領地と云ふ。蒲生郡日野は古き所にて、古跡多し。由來分明ならず。此家にも記事あり。餘暇無く寫し難し。此碑は町はづれに綿向の社の堺内、神輿の庫の南の土手に有り。

二親幽靈無法界

采五佛得道也

方卒都婆志者爲

延慶三年十月十六日

願主日記重吉

延慶は人王九十四代花園院の年號なり。天明戊の年まで四百八十九年なり。石塔寺の大塔の後ろに九輪の塔あり。左右にも數數あり。「嘉元二年」と有るものあり。四百六十四年になる。

十三日。曇りて後天氣。晝色色認める。

十四日。天氣。夕方大きな雷二つ鳴る。此處のぢぢ様の像出來上がる。中食せんざい餅、江戸にて汁粉餅の事なり。色色中へ突き込みたる柿餅を出す。夕飯には鯉の刺身、何やら川魚焼物、汁鮒、壺、平付にして膳を出す。皆魚は湖中の産なり。湖も此處よりは路隔たりてあり。また三年漬けたる酢食を出す。至つて珍物なる由。明日は出立せんとて仕度する。錢別とて金寶を贈る。

十五日。天氣にて、朝五時前に日野を出で、一里行きて川原へ出づる。一人小童を案内者に付く。此處にて歸す。夫れより山路に入る。秋なれば萩、砂參、女郎花、桔梗、蘭、すすきの花の盛りなり。また二里程行きて水口へ出づ。往來なり。河あり、渡れば石部なり。此處にて晝食をす。町のはづれに閑「間」道ありて、札を立て、「此路、旅人通るべからず」と有れど、皆人通る故に、我も此路を行くに、草津に至る。此處より石山寺の山下、旅館に泊る。月漸く照し、前は湖水の流、向ふ瀬田の橋を望む。景妙なり。旅館より少し行けば石山寺なり。門を入りて石段を登り、さて此石は誠に奇妙なる石なり、造り物にしたる様なる趣にて、他國に無し。山上よりは眼下に流を望み、瀬田の橋より湖水を隔て、比良の山また三上山、左の方は唐崎の方を見る。時に八月十五日の夜なり。夫れより旅館に歸りて酒を呑みしに、十六娘出て酌を取る。其娘に色色話などしけるに、一向に笑はず。是れは東方の人、此地と言語異なる故なり。此處は江州なれど京に近し。故に京の言と同じ。肴「ウゴヒ」また「ハス」と云ふ魚、皆湖中の物なり。全く道中は初め

て故、不案内にして唐崎の松を見ず。

十六日。曇りて雨降らず。暑し。五時此處を出立し大津の方へ行く。膳所の城際を歩き、矢波瀬と云ふに出づ。夫れより三井寺觀音山へ登る。湖中目下に見え、此處より裏の坂を下り、また坂路を行く。此處にて追分を聞くに跡「後」なりと云ふ。何分先づ伏見へ行て、京へは出ぬ量見故に、大廻りをしたり。(其後に京へ上りし時、唐崎の松を見て志賀の山中を越え、白川へ出で、夫れより二條へ出る。又文化壬申の十月、備中の人と共に京より白川山中越して、峠より左に下り松を見る。湖の傍らを通り、石山に泊る。三井寺に参り、小關越と云ふ處を通りて京に歸りぬ。)夫れ故何やら一向の田舎に入る。音羽と云ふ處の由。東西も分からぬ畑の間へ出でて川あり。音羽川と云ふ由。川を渡り、大塚と云ふ在所へ出づ。此處は追分よりの伏見往來なり。然れども往來の人も無く、至つて淋しき通りなり。夫れより三里程行きて、山を越え、田畑を過ぎて、漸く墨染と云ふ處へ出でたり。即ち伏見なり。墨染櫻など云ふ木ありて、左の方に簾を下ろし、お山出でて往來の人を泊めるなり。此處より行き當りて左に行けば即ち伏見京町なり。此處に日野中井の店あり。尋ねて此處に至るに、手代六右衛門と云ふ者ありて、此者案内して八百屋作右衛門舟宿の舟に乗る。一人前百文、二人して四人前借る。夜五時過ぎに舟を出す。段段と下り舟にて、淀の方に近づく。月出で漸く照して、淀の城、水車、大橋を越え、山崎山右に見え、夫れより程無く牧方に至る。此の河中、物賣る舟、酒、汁、飯、一向に味無き物を賣るに、「食らはん、食らはん」と云ふ。此の云ひ方、此處の名物なり。夫

れより守口など云ふ處を経て、程無く大坂入軒と云ふ處に舟を着ける。明けて五時頃なり。十七日。天氣。日本橋金物屋と云ふ旅人宿に至る。嶋の内清水町筋、中津町と云ふ處、丸屋清兵衛方に至る。此者案内にて道頓堀芝居の邊を通り、北堀江兼葎堂へ参り、また米市場天満屋加助米師へ参る。夫れより新町を見物す。皆揚屋にて、其内、吉田屋と云ふは名家なり。夕霧の文を珍藏す。此處は江戸吉原同前の處にて、太夫あり。揚代七拾五匁、雜用共なり。揚屋に、中居とて若き女、緋縮緬、紫縮緬の前垂にて出て取持つ。妓子數人呼びて、太夫は揚げずと濟むなり。また太夫を借りて見るは僅かの物入りにて二十五六人出でる。搔取装束にて衝立の陰より出で、客の前にて盃を手に取り酒を呑む摸似方をして立ち退くなり。其内、我が氣に入りたるを揚げる事なり。之は江戸に無き事なり。夜に入りければ先づ宿へ歸り、夫れより硝石板を造ると云ふ者の方を尋ね、其路、石屋ある處を通る。何やら飯焚女と云ふ風俗にて、路次の入口などに立ち居る。「何んぢや」と聞けば、あれは「ソウカ」とて、江戸の夜鷹の事なり。夜鷹は大坂が好し。また日本橋へ出て道頓堀へ行き、芝居座五軒あり。茶屋へ上がり、丸山が畫を見、酒を出す。妓子二人呼び、一興して歸る。

十八日。曇りて、後天氣。四時頃より北堀江兼葎堂へ参る。吾が造る銅板兩國の圖を見せけるに、「眞に日本創製なり」と云つて感心する。菓子酒等出し、七時過ぎに中津町へ歸り、また亭主と北の方十四五丁程行きて、天神橋へ出で、渡りて天満宮へ参る。夫れより東の方へ四五丁過ぎて權現の祠に参る。夫れより

天満橋を渡りて城見え、好き景色なり。田沼屋敷の跡と云ふ處あり。夫れより大手の前へ出で、此路に美人蕉を見る。植木屋なり。芭蕉の如く、檀特に似て中より至つて紅き色なる花出づ。花は葉の卷葉の如き物なり。至つて寒氣を恐ると云ふ。往來する婦人、夏月は薄絹、絹の類を以て帽子として之を被る。冬は綿にて作る。女の髮の風、東都と甚だ異なり。

十九日。天氣。芝居近所、至つて繁昌の處、二三町の内、裏店あり。其外は餘り無し。時は太鼓を打つ。又は鳴子を鳴らす。風呂屋、近所には見えず。路幅至つて狭し。傘をさして二人並んで行かれず。江戸の如く商人、見世に色色を並べる。此節辻辻には賽を賣る。其日も暮れて、日暮よりして道頓堀芝居ある處の竹屋と云ふ茶屋へ行き、小梅と云ふ妓子、又おあさと云ふと二人呼び、色色酒肴を出し、三味線唄は大坂風にて珍らし。夫れより白人來る。此處にてはお山を白人と呼ぶ。江戸深川の如き處にて、帶付常の女の風なり。總べて江戸の女と顔色も違ひぬ。鼻筋皆通りて長成りの顔多し。此女廿一二と見え、名は村と云ふ。服は花色輪子、帶は縹子の白きに墨繪を織りたる物なり。尤も衣裝は色色時の流行あり。妓子は八重地を淺葱に染め、總模様、或は褌上がり、半襟の所まで模様あり。帶は緋縹子、金糸にて繡ひたるあり。又は腰より下、色の異りたるあり。すべて男女共に小振にて、風俗、東都と甚だ趣違ひぬ。

廿日。天氣。此日伏見より六右衛門参る。共に浮ぶ瀬と云ふ茶屋へ参る。此處は年年和蘭陀人此の茶屋へ参る由。大座敷二間あり。山岸に家を造る。向ふは畑見えるなり。赤前垂の中居數人出で酌を取る。夫れより

清水觀音へ參る。また天王寺へ行く。見物し、歸りに亦道頓堀竹庄へ上がり、彼の村と云ふ白人參る。妓子小梅、お淺を呼び、大酔す。其夜此處に泊る。村は大坂の者にて、親兄弟無し。年明け前にて「三十兩出し被下候へば年も濟み、江戸なりとも長崎へなりとも連れて行て下され」と云ふぞ可笑し。

廿一日。天氣。此節、角力あり。町中、角力の太鼓廻る。其の太鼓小きなり。音かちかちと云ふ。道頓堀、時は銅鑼を鳴らす。また太鼓なり。四時より住吉へ行かんとして、日本橋通堺筋眞直に行き、大坂を出離れの町、兩側傘を造る職人なり。夫れより畑の路へ出で、此邊綿を畑に植う。夫れより左右料理屋あり。石の鳥居、反橋崩れて石の杭残る。宮居三殿あり。石燈籠多し。夫れより濱邊へ行き、松原の中を通りて、茶屋あり。此處にて酒を呑む。蛤あり。また元へ歸り、往來を少し行き、難波屋の笠松を見て、一里程また行き、堺と云ふ處に至る。兩側軒を並べて家至つて大きし。温飩蕎麥屋あり。中庭あり。石燈籠、萩垣などありて、内至つて廣し。地代、家賃安き所と云ふ。夫れよりして妙國寺に至り蘇鐵を見る。歸りに蛤一升求めしに、一升四十文なり。

廿二日。天氣。飯後より兼葭堂吉右衛門へ行く。また油屋吉右衛門とて、犬兼葭と云ふ人、是れは大家にて、兼葭と同道して行く。酒肴を出だし、色色珍物見物して歸る。今夜兼葭に泊る。

廿三日。天氣。少し冷氣。伏見六右衛門歸るとて、晝認め贈る。

廿四日。天氣。少少不快。按摩の曰く、堀江白人一座と云ふは二匁なり。二座と云ふは三匁なり。道頓堀

は三匁八分花なり。また新町に見世を張り居るは六字と申す。六十四文花なり。線香一本を三つに折りて、其一本經つ間なりとぞ。尤も何れも雜用は別なり。蠟燭の代まで取るなり。總拂の時に二割引にして拂ふ。此地の風なり。

廿五日。天氣。順慶町の夜市は、兩側の家、見世を開き、凡そ十餘丁、行き當りは新町へ至る。歸りに彼の六字の見世付を見物す。江戸吉原の川岸見世の様なり。紅き衣類にて打掛、顔色好く見えると雖も、甚だ似せ物にて大笑なり。

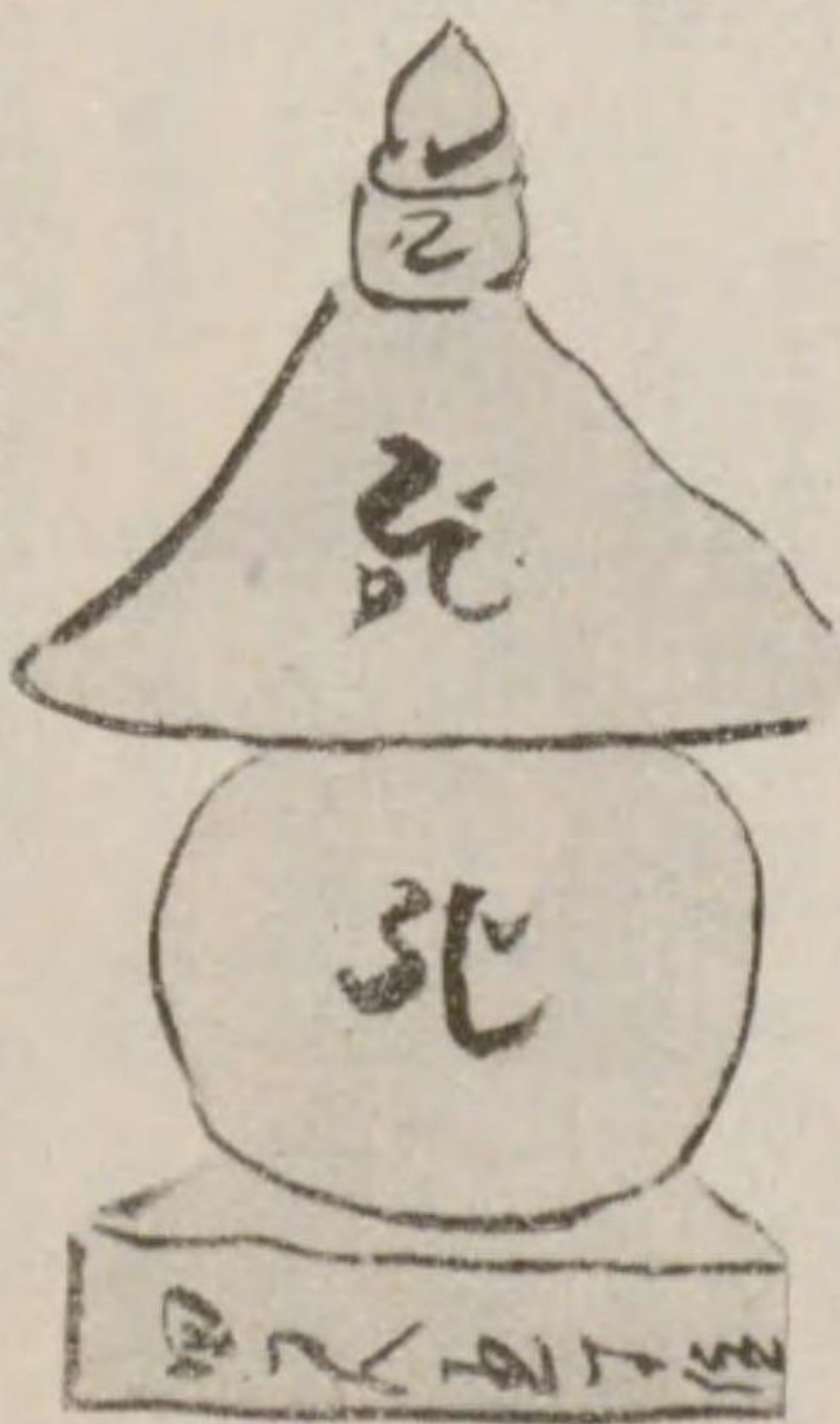
廿六日。曇。晝少し認める。氣分悪しし。

廿七日。雨降る。兼葭堂より鯛と蛤を贈る。京大坂にては蛤貴し。明日は出立せんとて、所所暇乞に行く。また色色揃等濟む。其の晩方、西國橋と云ふより乗合船に乗る。其夜、天氣風等悪しく、船出です。宵より夜明けて五時前まで船中に居る。一向眠らず。其上、下は板敷の上に荒蕪を敷き、蚤と蚊に責められ難儀し、漸く風直りて阿志川の河口まで船を出すと、また風悪しくなり、船また此處に掛かる。乗合の者、色氣を揉み、また大坂へ歸る者もあり。下賤ども騒ぐ。夫れ故無理に船を出す。風荒く波高し。皆皆船に酔ふ。中に婦人、小兒を連るる者あり。小兒聲を揚げて啼き叫ぶ。吾も如何とせん迷ひ、漸く摩耶山下を打過ぎぬ。此處は摩耶おろしとて灘なり。程無く北風吹き出し、兵庫磯の町、尼が崎屋新兵衛と云ふ人の方に泊る。

廿八日。天氣。築嶋清盛の塚を見、夫れより湊川を過ぎて楠の碑を見、碑より少し山に入り、廣巖寺は楠寺なり。碑を石摺にして賣る。楠の弓矢また像あり。寺は禪宗にて、和尚雅人にて、共に布引の瀧を望む。和尚詩作あり。共に興じて寺に歸る。

廿九日。天氣。和尚の像を描き遣はす。外に草畫二三枚なり。酒、索麵を出し馳走する。

卅日。好き天氣。彼岸の中日なり。此處を出立して、燕子花の名所あり。芭蕉塚、村上帝の社あり。攝津國、播州との堺、須磨の大「内」裏の跡、鐵拐が峰、鴨越、夫れより東垂水、西垂水、仲哀天皇の陵、千壺の處、山に登り見るに生燒の壺、徑り一尺餘の物、數數あり。皆破れたり。夫れより舞子が濱は松原にして、右はなだらかなる山なり。左は波打、向ふに淡路嶋見え、遙遙向ふには伊豫山を見る。海中、嶋嶋見えて好き景なり。敦盛の石塔は路の傍にあり。堅九尺餘、文字無し。唯だ梵字あるのみ。此日天氣好く、三月の如し。楽しみ深し。西谷と云ふ處、塗屋と云ふ旅舎に泊る。



九月朔日。天氣。須磨寺あり。人丸の祠、門に碑あり。「寛文四年甲辰、明石城主日向守源信之」と誌す。夫れより姫路の城を過ぎて加子川と云ふを渡り、左に入る。田舎路なり。尾上の鐘を見る。是れ世に有る

鐘と異なり、

龍頭の處に穴

あり、是れ

は黄色の音に

したる物と云

ふ。廻りに天

入を鑄付けた

り。夫れより

高砂子の松、

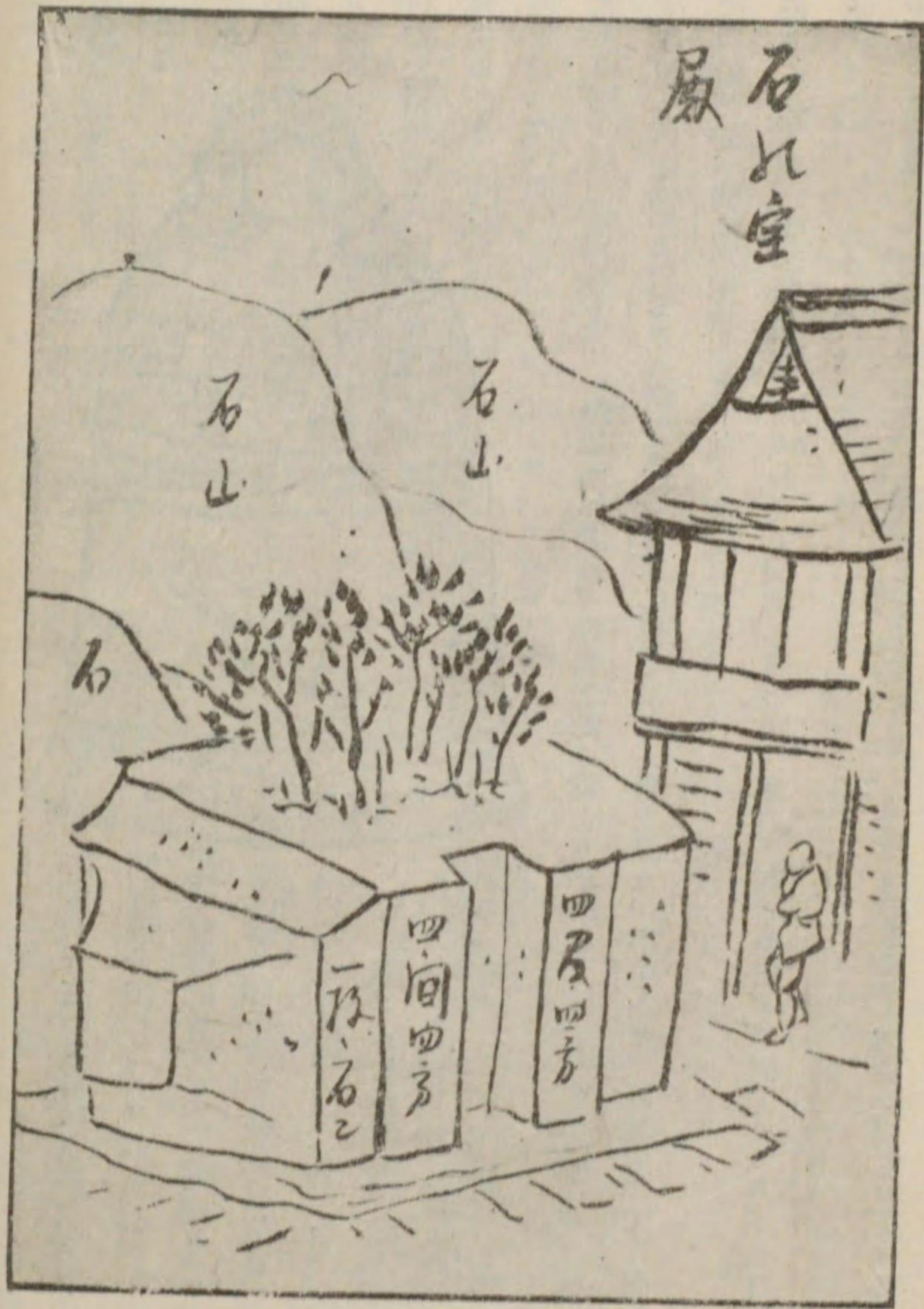


住吉の宮。曾根の松は天満宮の社の内にあり。石の寶殿は奇妙なる物なり。其近邊皆山石なり。御影石是れなり。此の寶殿は神代造りたる物にて一向譯知れず。夫れより豆崎へ出る。市の河の前より姫路の天主見える。下の手と云ふ處、きたなき家に泊る。昨夜も蚤に責められ、篤と眠らず、困り入る。

二日。朝より雨天。二里行きて、いかるがへ至り、片嶋と云ふ處より赤穂に入る。雨も小降なり。松山を過ぎ、城下に至る。此處まで三里の路なり。入口、河ありて、橋を渡り、市中人家、皆瓦屋。町に魯庵と云ふ醫は江戸詰して、其節の懇意なり。故に此處に至る。

三日。曇りて後天氣。畫二三紙描く。夫れより同藩の者の處へ參る。酒肴を出す。宿より六月十九日出の状を見る。

四日。天氣。甚だ暑し。衛守と云ふ人、織部と二人太夫なり。此處に至るに、酒肴を出し話す。此家、城



内にて至つて古し。昔、麻〔淺〕野家の時の小野氏の屋敷と云ふ。また大石氏の屋敷趾あり。是れは焼けて門のみ残る。瓦を見るに二つ巴あり。城は一方は海をかた取り、角樓、大手、外堀ありて好き城なり。

五日。天氣にて、新鹽濱と云ふ處に參る。是れは新規に取り立てし鹽濱なりとぞ。鹽濱は田の如くにして四面に溝あり。其溝へ自ら鹽のさして、かつて潮を汲みて濱へ打つこと無し。潮を煮る所あり。一間四方にして、厚さ六七寸、所所繩にて吊りて薄鍋なり。赤穂鹽、日本第一なり。此處に富人の家あり。夫れより三崎大明神の祀あり。社古び、大松繞り、海岸波荒く、嶋數見えて好き景色。此處より舟に乗りて三里あり。山の腰を行く。風無くして波平かなり。坂越と云ふ處、船着なり。商家軒を並べて好き處なり。町の後ろは山なり。山に觀音堂あり。欄干に倚り海を望む。詩など作りて歸りぬ。

六日。雨。晝を認める。暑薄し。

七日。天氣好し。明日出立せんとて、所所暇乞に行き、出立の仕度する。

八日。天氣。明六つ時に魯庵方を出で、八木山と云ふを越ゆるに、其頃秋なれば、松山、松茸を生じて人の取りたる跡あり。吾も取るべしとて心を付くれども、皆人の取りたる跡のみ、一向に無し。人の取りたるを落したるを一つ拾ひける。此路、山中狭き小路にして、漸く往來。伊部と云ふ處へ出でけり。伊部は焼物を賣る見世あり。備前焼是れなり。此處を過ぎて加加戸と云ふ處に至りて、大瀧路と云ふ碑あり。さらば瀧を見んとて小路に入る。兩方大山。其山の腰に石を積み、其上には草木生じ、口一方にあり。穴藏

の如し。樵夫に之を聞けば何れの時作りたる物にや、知る者無し。あなたの方には二間、三間、一枚石を以つて造る物多し。之を塚と申すなり。此處は大路与申す所なりとぞ。夫れより十餘丁行き、寺あり、觀音堂あり。龍は埜も無き唯だ谷の流れなり。又あとへ歸り、藤井と云ふ間の宿に泊る。此處より備前岡山へ二里と云ふ。播州までは京に屬して、人の物云ふ事、此の備前に入ると、江戸の音に成りぬ。彼の拾ひし茸を吸物として、其夜酒を呑みけり。宿に十六七の娘出でて酌を取る。其娘の物云ひ、はきはきとして甚だ異なり。

九日。雨。今日佳節なり。藤井を五時出立して、二里、岡山に至る。城下町好し。二丁程隔たりて橋二つ掛かる。石關町と云ふ處に赤穂屋喜左衛門と云ふ者、吾を知る者と聞き、夫れへ參る。父子共に好事の者に、甚だ歡び、此處に留まる。其日、浦上兵右衛門甚だ好事家にて、先づ之へ尋ねる。酒飯を出だし、また石關に歸りぬ。豆腐に蒲鉾を入れ、菜として飯を出す。浦上方と同じ事なり。

十日。雨天。絹地に蘭畫を認める。忤、吾が側を離れず、歡ぶ事限り無し。明の季唐が畫、軸にして精妙なる物なり。また文徵明、皆以て、眞物なり。之を珍藏す。

十一日。雨。石關を出立して行きけるに、向ふへ兵右衛門來り、「先づ先づ滯留致し候へ」と云ふ。留まらずして行くに、往來に非ず、ミカドと云ふ處へ出て、夫れより四里を過ぎて足守に行く路、吉備津の宮あり。參詣す。また行きて備中の堺にまた吉備津の宮あり。此社内に湯立の釜あり。銀二十目納むれば釜に

湯を入れ火を焚く。忽ち鳴動する事奇妙なり。夫れより宮内と云ふ處より入りて二里あり。則ち足守なり。木下侯未だに御着無し。用人役黒宮氏へ尋ねる。

十二日。大雨、夜に入り止まず。藩中の者代る代る參り、吾が奇談を聞く。四五枚畫を描く。此地松茸取りたて食するに脂の香あり。江戸の松茸は此香無し。此家の庭に徑二尺餘、丸柱の礎あり。是れは備中足守、賀陽郡溝手村賀陽寺の跡より掘出す。千年餘の物と云ふ。また口五六寸、生燒の器あり。同じく岩下より掘り出す。

十三日。雨天。今朝先づ雨無し。晩方雲晴れ、月漸く出づ。日秋色を催し、衣服薄し。主人の衣を借着する。俄かに大衝立を張り蘭人物を描く。出來好し。裏には山水、一日に出來上がる。日暮より木下男成と云ふ人の方へ行く。酒菓子を出す。

十四日。天氣。朝冷氣。五時過ぎに出立して長田村と云ふ處に至り、序助と云ふ者の家に寄る。菓子茶を出す。夫れより窟木村と云ふを過ぎて岡田と云ふ處に至る。此處は伊東侯の領地なり。藩中の醫者熊谷連鱗と云ふ者の處に至り、此處にて晝食す。「サウザ」と云ふ處より人家續きて、中原川を渡り、往來に出づ。此路に吉備公の墳あり。矢掛と云ふ驛に泊る。

十五日。天氣。矢掛を發して神邊に至るの間、増山侯の臣春木文彌とて、文もあり畫かく。此者吾を後ろより呼び掛け、之も主人の命にて長崎へ行く者なり、同道して路十餘里行きて、今津の驛に泊る。此路、

福山の城見ゆ。

十六日。天氣好く、出立して、二里行きて小野路〔尾道〕と云ふ處より船に乗る。此處は好き處にて富商多し。西の小江戸と云ふとぞ。東風吹きて、十八里程走りて小嶋に掛かる。夜半また東風吹き、船を出だす。十七日。天氣。小嶋に掛かり、北の方、廣嶋の川口見え、西の方宮嶋見える。程無く廣嶋猫屋橋と云ふ處に船を入る。船より上がれば城下瓦屋を並べ、富商多し。城は左の方に見て右の方に入る。魚市場を過ぎ、町はづれより海邊へ出づ。海上嶋數見え、草津と云ふへ一里半、程無く猪の口と云ふ處より小舟に乗る。三里渡りて宮嶋に至る。雨天なり。先づ宮へ參詣す。左右回廊、本社は半にあり。潮のさし入る瀉に造りて、回廊の下まで潮さし引きす。平相國清盛の創立と云ふ。眞に古びたる事云はん方無し。廊の燈火水面に映る。此嶋は巡り七里、人家千餘軒、田畑無し。猿鹿多し。其頃市町とて芝居あり、茶屋など出でたり。十八日。雨降る。此日此處に滞留して春木氏に別る。詩を賦す。

晚秋與司馬君暫同道、別于藝州巖島

山川好景暫同遊、俱宿旅亭巖嶋秋、百八回樓分手處、孤舟遙見靈燈明 南湖鯉拜

娼家三軒あり。夜、見世付あり。揚代十七匁、雜用とも。また晝の間旅館へ呼ぶ時は六匁なり。妓子も同段。

十九日。雨漸く上がりて天氣と成る。四時舟に乗りて「おかた」と云ふ處に着く。夫れより六里程行きて關戸に至る。往來なり。此處より三里入りて岩國なり。日暮に及びければ錦帶橋の許に宿る。此處は巡禮宿にて一向に汚き處なり。外にも旅商人一兩人、是れと枕を並べて寝る。

廿日。天氣。此の岩國の江戸屋敷は今井谷なり。留守居役内坂十良兵衛、當時は此處に居けり。因つて先づ内坂宅へ人を遣はしければ、迎ひ参りて、「二三丁行きて好き家に參る。夫れより町奉行の下役の者参りて申すには、「子細を書き付け差出しなされべし」と云ふに付き、「私、此度肥前長崎表へ晝修行の爲め参り候に付、此地相通り候間、御機嫌相伺申度、絹地の晝一枚献上」と書き付け上げる。夫れよりしては滞留中、上よりの賄にて、毎日三度の食の時、先づ吸物酒を出して、膳を出す。袴を穿きたる者給仕をする。岩國は山中にして海は三里を隔つ。然れども魚澤山。北の方は石見の國なり。橋は廿五間の橋五つ掛かる。中三つは橋杭無し。河幅百二十五間なり。錦河に掛かる故に錦帶橋と名づく。俗に算盤橋と云ふ。橋の裏、算盤に似たり。人家は橋より西南二十餘丁、家數二万餘軒、多くは瓦屋なり。他國の者滞り居る事を禁ず。故にや盜無し。

廿一日。天氣。旅館主人は俳諧を好む。晝二三紙認め遣はす。錦川の川原を二三丁行きて見るに、昔獨立と云ふ唐僧此處に一年齧に隠れ居しに、吾が生れし處の赤壁に似たりと云つて感じたる處、何んの事も無き所なりき。日暮より内坂氏へ行く。酒食を出し馳走す。江戸に無き物とて、牛茸と云ふ菌を食はせけり。是れは傘を擱けたる大ききなりとぞ。少少苦味あり。夜の八時に歸りぬ。

廿二日。天氣。此日祭あり。橋を渡れば陣屋あり。其後ろの山を城山と云ふ。旅客は此邊へは行く事を禁ず。祭にて是れを許す。川の邊に棧敷を掛けて見物す。此所絹服を禁ず。縮緬、板締め、緋縮緬の如く見ゆる物、皆木綿なり。此日祭故に宿よりも酒を出す。鮎の鮎、其鮎幅二寸、長さ八九寸あり。江戸には無き物なり。さて旅館主人は萬兵衛と云ふ。話に、此國至つて疱瘡を嫌ふ。私家内に疱瘡人ありし時、此處に居る事ならず、故に小津村と云ふ處へ引越し、頃は三月なり、此處は屋氣樓の立つ處なり。天氣至つて長閑なる日、霧の如く霞みて其中に現はれる。長州八代嶋、三万石の處、禿嶋、上の關、此嶋の間に立つ事なり。其嶋一面に霞みて見えざる様になると、其中に竹林或は松並木、樓閣の如き物、薄墨にて畫く如く見ゆ。正面は海士路村は正面なり。小津村は斜なりと。此處にては嶋遊びと云ふなり。さて亦此國に犬神と云ふ者あり。犬神の人來りて食物或は器物様の物、好き物と思ふ心起れば、其品物を所持したる者忽ち犬神取り付き、狂人となるなり。犬神の者は曾て人に取り付きたる事を知らずとなり。また山代と云ふ處近くに鎌が原村あり。此處より三里深山に入り、其所の人物、髮鬚を剃らず。異國の人の如し。岩石に水晶、石英を生ず。

廿三日。天氣。五時より旅館の俵を案内とし、行厨持一人、此方二人、四人にして橋を渡り、上の方へ十餘丁行き、また河を此方へ渡りて十五六丁行き、阿品村を過ぎて山合に行く事八九町、犬戻と云ふ處、山皆岩石なり。溪水岩の間を飛び流れ、眞に畫の如し。頃は秋なれば紅葉錦の如し。岩上に登りて酒を呑み、

其の景色を寫す。夫れより一里半行きて彌山が嶽あり。登る事廿一丁、路無し。岩石に取り付き登る。頂に小き社あり。山神を祭る。鐘あり。其鐘を無上に撞き鳴らし、傍らに茶屋あり。其家横に倒れ掛かりて、一人顔色青く膨れたる男居る。此處にて行厨を開きけり。岩國より此の山神へ參詣する者ありと見えたり。四面山にて塞ぎ、見所無し。夫れより下りて、暮六時過ぎに歸りぬ。路路鈴虫鳴く。

廿四日。雨天。此日上へ牡丹の畫、絹地なり。外、扇に畫を描き、之を獻上す。家老五人へ紙地に畫を描く。また用人には大唐紙二枚づつ之を贈る。町に使者屋あり。門構へなり。玄關より上がると、下役の者と見え、出向ふ。口上を上役の者へ云ひ次ぐ。上役吾が前に來りて口上を聞き、夫れより座敷へ通し、二十五菜の膳を出し、酒肴を出し、夫れより上より下されしとて白銀三枚、外に金三百疋なり。此處を去りて内坂氏へ行く。上より内意ありて、内坂を以て、何分にも病中故お相「逢」申されず、残念なる事なりと。廿五日。天氣。家老、用人よりも各挨拶ありて、明後日は出立せんとす。

廿六日。天氣。藩中の人代る代る參り、夜に入り内坂へ暇乞に參る。又又酒肴出し馳走する。さて此地へ來ると馳走役人附添ひ、三度の食に魚肉多し。甚だ困り入る。

廿七日。天氣好し。明方に出立して、先づ橋を渡り、向ふの河ぶちを通り、程無く山に入る。夫れよりまた濱邊へ出て、大ヶ崎と云ふ處なり。はき嶋、八代嶋、其外小嶋數見え、此所は屋氣樓立つと云ふ。其所の者に直に聞きしに、春三月頃、長閑なる日、嶋霞みて、其霞の中に色色の模様現はれ、また段段と此

方の嶋に移り、「以上第三卷」後の島は現はれ申すと云ふ。夫れより由と云ふ處に至る。全體此路は往來にては無し。濱邊通りにて、岩國の領分柳井津と云ふ處を見せんとて、此路を教へ示せしとぞ。七八里の廻路なり。此處より右は山にて、左は海なり。漁人に聞くに、前嶋は一里あり、大嶋は十里、其餘、小嶋に小馬嶋、小桶嶋、小黑嶋、小新五郎嶋、其數二百も有る由。磯邊岩石多し。飛び越し飛び越し行く事なり。人家無く、一向に休み處無し。砂路にして歩み難し。葦の一丈餘なる物、枝ありて太し。是れは「濱よし」と云ふ物か。一方には一面に生へてあり。一向人の往來無き所故に、我等を見て何處の人と問ふ。夫れより山に登り見るに、嶋の間僅かにして潮瀧の如く急流なり。岩石數數出でて、船其間を乗る事なり。此處を大島瀨戸と云ふ。此處を過ぐれば大島村に入る。空腹になりけれど食店無し。此處に肴屋ありて、「赤えひ」と云ふ魚の切り掛けあり。傍らに土竈ありければ、吾が僕、火を焚き、其魚を買ひ取り、煮て晝食の替りに食ひけり。夫れより其村を過ぎて柳井津と云ふ所に至るに、此處は好き所にて瓦屋あり。此處に久保利右衛門と云ふ者の方へ内坂よりの手紙あり。此者、此所の役人と見えたり。我等を座敷へ通し、「先づ暫くお控へ給へ」と云ふ中、絹布の夜具を出しければ、此處にて宿をするかと思へば、さには非ず、亭主案内して、二丁程行きて大相なる大家へ参り、是れへお宿申付け、おん入りとある。上段の間、金屏風にて圍ひて、亭主、役人、兩人袴を穿き、挨拶をす。我等申すには、「岩國滞留中毎毎お料理に肴ありて殊の外飽き果て難義致し申す。夫れ故食事には決して魚類無用なり」と斷り申す故、皿に玉子を湯出たるを

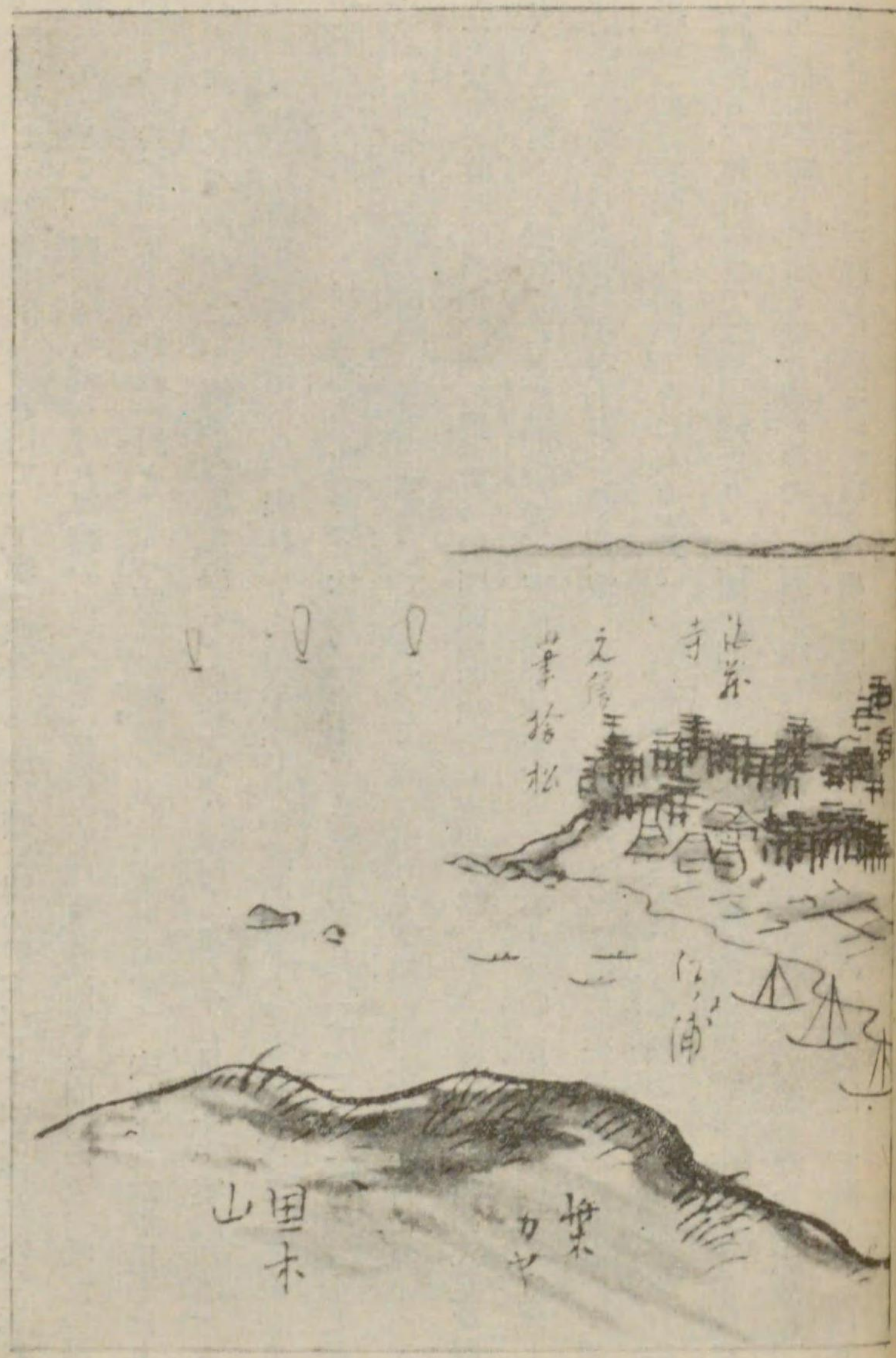
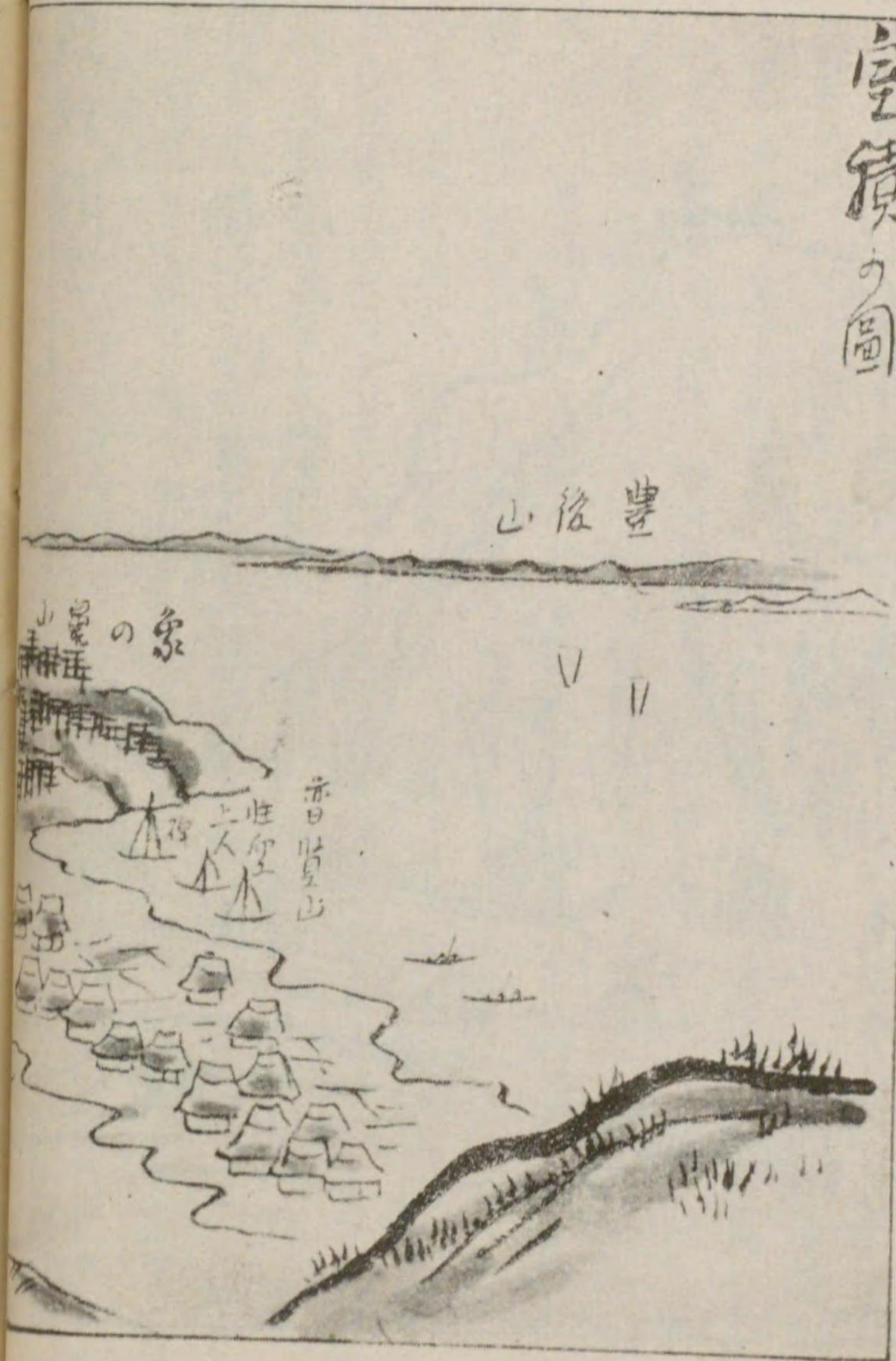
大島瀨戸



瀨、三十二里
 船を渡るゆゑ

空積の圖

豊後山



あしろふのみ。其夜は心地好く寝ねけり。

廿八日。天氣好し。今日も兩人の者出て、丁寧ていねいに尊敬そんがうす。故に書を認め申すべしと云ひければ、「夫れは有り難き事なり」とて、唐紙たうし持ち來りければ繪かく。筆は荷物にものの内に有り。出すも面倒ゆゑ、唯だの筆にて認め遣はす。五時に出立す。此國の風とて先づ飯前めしまえに握飯にぎわいを出し、茶を出す。夫れより膳ぜんを出しけり。さて二人の者先へ立ち、町はづれ、橋ある所まで送る。所の者はれは何人なんびとなるやと見物す。案内の者一人荷物を持たせる。此所このところは麻布あまふを晒す所なり。夫れより一里半來りて多武瀨村あり。染物屋多し。是れより岩國領に非ず。赤羽の市と云ふ村を過ぎ、此處にて休む。「えそ」と云ふ魚あり。「すばしり」に似て少し長し。さて夫れより國木山と云ふ山路に入る。茅生かやじて木少なし。峠に至りて室積むろつみと云ふ處を一目に見下ろす。甚だ面白き所なり。此處は長州防州の堺なり。岩國領柳井津より五里の路なり。此處より案内の人足を歸す。山を下りて人家あり。晝食せんとて柿など賣る家に寄り茶を乞うて食事す。此所このところ、邊土へんど故に食店無し。さて此處は家十餘軒あり。昔、靈空上人と云ふ出家の墓あり。船掛かりの處故に遊女あり。遊女うらわしや家に大黒屋、ゑびす屋の二軒は其頃より續いて今に有りとぞ。江の浦と云ふ處に元信の筆捨松あり。此處より坪生村あり。赤松村あり。嶋田村まで二里の路なり。此處に泊る。往來に非ざれば旅人宿無し。庄屋より差圖さしずにして宿を取る。此所このところ、町にて埒も無き穢きたなき農夫、三疊敷程の所、内に俵たわらやら薦かこやら、物置の様なる處故に、先づ掃除せんとて、吾は杖を持ちて疊たたみを打ち叩き、僕辨藏むすねぞうは笠にて覆り、微塵みじんの五味ごみを出して漸く坐しけり。此





節、此所には市町とて芝居もあり、遊女なども来り居ると云ふ。さて家に鼻で這ふ様なる老婆、目の爛れたる女二人居て、食事を拵へ、燈火暗く、一向に食へず。夫れ故、此様なる時は酒を呑み心を轉じ、また夜具あるや、定めて穢からんと思ひし中に、向ふを紫の色の襦袢切つたる衣服着て女の通りける故、「あれは何ぢや」と老婆に聞きしに、「あれは女郎なり」と云ふ。「さらば遊女屋へ行って遊ぶべし、何處に有りや」と問ふに、「遊女屋は無し、此處へお呼びやれ、揚代は十七奴なり」とぞ。大笑して止めぬ。夫れより芝居を見んとて行きけるに、畠中へ蕪張りして夜芝居の人形なり。僅かに見物す。至つて寒し。芝居の内に「うゝ」を賣る。先づ之を食ひ、芝居を出て右の方に行けば、明家を俄かに竹を打ち付けて格子として、遊女四五人並ぶ。何れも赤き装束なりき。格子の側へ寄り見る者無し。大道の眞中に立ち、吾は格子に寄りて見物して、穢き宿へ歸りぬ。夫れよりまた酒を呑み、酔つた紛れに寝入りけるに、一寢入して目覺め、聞くに人聲のして外を通りける。芝居濟み、見物の者の歸るなり。程無く鳥の聲、鳥告げ渡りて、夜も明けて、着たる物を見るに、眞に戸板の様に厚く「さし糊」を剛く付けたる蒲團なり。彼の目腐れ女と老婆、手鼻をかみかみ拵へ食事を出だしけり。

廿九日。天氣。朝六時に此處を出て、一二町行くと河あり。舟無し。渡る。水眞に冷たし。半里行きて瀆邊に出て松原を通り越し、また磯邊、大石あり。夫れより鹽濱へ出て、向ふに寺の如き處見ゆ。漁夫に問ひければ、戸永と云ふ處、磯邊際右衛門と云ふ者の宅なりと。是れは殿様お入のある家と云ふ。此處は毛

利家の分地、徳山の領地なり。此處より山の腰を廻りて人家一村に入る。此處にて晝食せんとて百姓の家に入り、「我等は徳山へ通る者なり、茶を一ばい貰ひたし」と云へば、床「縁」に呉座など敷きて茶を出しけり。傍らに七つの小童吾を見て云ふやう、「あの人は脇差を二本さして、一本短い」とて笑ひけり。此節稻の出來秋、百姓忙し。此處を出て、程無く戸石「遠石」と云ふ處へ出づ。往來なり。夫れより徳山なり。是れまで四里の路なり。夫れより福川、富海へ二里、宮市へ二里、此間舟渡しあり。おがうり「四字、小郡」四里あり。山中へ二里半。此間、長門の城下藪へ行く路あり。此の山中に泊る。此處は一向に旅人宿無し。宿内一町ばかりあり。此日、短日に十四里程歩きたり。旅籠、料理は新菊のひたし物のみ。薪高しとて風呂も立てず。

二日。曇。六時に山中を出立して、河を渡り、峠あり、小坂あり、二里半行きて舟木に至る。此處は好き所にて商人軒を並べ、大名お泊りある處、本陣あり。此邊石炭を焚く故に往來自然と煙り、仍つて臭し。此節十月霜枯時分なれば往來の人一向に無し。一日に向ふから來る者三三人、皆六部の類なり。一人大襦袢を着、恐ろしき顔色の者、後へなり又先へ行き、路連れにならんと云ふ。どうやら氣味の悪るい奴故、此方からは見ぬ振をして居れど、兎角に慣れ慣れしく口を利く故、先きへ行くべしとて、淺の市にて駕籠に乗り、吉田より馬に乗り、小月を越え、長府まで三里堤の上を通り、其頃櫛と云ふ漆の木、實は蠟を取る、此邊畑の間、其外一面に植ゑ、皆紅葉して錦の如し。漸くにして長府の間屋場に至る。夜の五時頃なり。夫れ

より駕籠に乗り行くに、闇夜なり。駕籠の内にてとろと眠り、目を覺ましけるに、眞に山中にして猪を追ふ聲のみし、又は鈴虫松虫の聲のみして怖ろしき處なり。夜四時頃に下の關に着き、煙草屋と云ふ旅舎に泊る。此處は大船着にして、瓦屋を建て並べ、富商多し。

廿「衍ナリ」三日。天氣。風あり。此處は九州へ渡る處にして、小倉へ三里、大「内」裏へ一里半あり。四時頃より乗合船、尤も渡船は小舟なり。西風強し。故に船を出す事を見合せ居る。體屈故に岩國內坂氏より贈りし吸筒を取出し、酒を買ひ呑む。餘る處は乗合の者にも呑ませける。乗合の者「船を出さんか、出さんか」と口口に云ひければ、漸く船を出しけるに、西風だんだん剛くして、沖の方より大浪高く船の内に入り、小倉は西に當り、内裏は少し南に當り、風少し開きなり。帆は横に曲り、船傾き、潮、舟の内に入る。屋倉に入りたる者は風呂に入りたる如く、皆皆死したる者の如く反吐を吐き、眞に舟覆へらんとす。吾と一人飛脚體の者年五十餘、屋倉の上に乗し、向ひ合ひ居たり。其頭の上を浪飛び越す故に、桐油を着て波を正寫にせんとて、波の飛び上がるをのみ見しなり。是れは酒の酔ひ此處にて發し、少しも舟に酔はず。此處に於て酒は氣を甚だ太くして、呑むまじき物なりと知りけり。夫れ故漸く二里半「の略カ」内裏へ半時の内に着けり。船中働く者僅かに三人、「帆を下ろせ、下ろせ」と呼びけれど、帆に風を含み、一向下ろす事ならぬものなり。船に打ち込む阿闍を替へるも此三人のみ。乗りたる者は死人の如し。眞に危き事に逢ひけれ。夫れより岸に上がり、皆皆人ごこち付きたり。内裏と云ふ處、町あり、蕎麥屋あり。

先づ是れへ寄り、荷物等直し、皆潮に濡れ寒く、先づ蕎麥を申し付け、之を食ひ、暖まるべしと思ひしに、盥に水をなみなみと入れて、夫れへ僅かなる蕎麥を浮べ出だしけり。夫れ故に「是れにては食へず、温かにして出すべし」とて、爲直させ食ひけり。此處に大村侯、本陣に滞留ありて、玄關に幕を張りあるを見て、吾れ衣服を改め、君邊へ申入れ候へば、早速お逢ひありて、「此風には此方へ渡るには至つて悪しし」と仰せられ候。何分不案内の事故なりと、此處を去りて、此處よりは海を右に見て左は山なり。一里半波打ち濱を通り、漸く小倉なり。十万石小笠原侯の城下なり。人家續きてあると雖も、淋しき所なり。吾が僕の云ふには、「此處は最早唐の地へ参りたるや」と問ひけり。小倉、問屋場無しと云ふ。夫れより頃も七時なれば、急ぎ黒崎までは三里の路なり。さて此邊の人、網笠を被り、農夫は口の所を手拭にて包み、頬冠して歩く者多し。日も暮れ、闇く、山路にして往來の人も無く、僕と二人漸く五つ時前なる頃、黒崎の驛に至る。好き家に泊る。此節旅客無し。

四日。昨日より雨。今朝止み、また降り出す。此邊時雨とて風雨多し。晝頃より風止み、大雨となる。三里程行きて、こやの瀬と云ふ驛より、飯塚まで七里半餘の路なり。此間鶴多し。雁の如く幾むれも飛び、田の面に下りて居るなり。多くは眞奈鶴。黒鶴は小振にして頭の邊り赤し。また白鶴あり。大きき眞奈鶴の如し。全體白くして嘴、足、代楮石の色なり。雁は一向に居ず。また晝に描く丹頂と云ふ鶴は且て無し。路路樹の木植えて、紅葉して錦の如し。雨にて七時過ぎに飯塚と云ふ處、穢き家に泊る。寒ければ早速火

鉢を出しけるに、網五徳にして、夫れは石炭を入れ、上に熾を置きたる物にて、其熾の勢にて燃える事にて、其熾消ゆれば石炭共に消えるなり。全く石の燃ゆるに非ず、硫黄の氣の燃ゆるなり。風呂も是れにて立つる故、とかくに臭し。此の石炭は一遍焼きて炭にしたる物なり。焼かざる物は焰立ちて木を焚く如し。此處にて好く好く聞くに、是れは山の根より出づるなり。夫れ石炭を掘るには山の上より谷底へ負籠とて藤柱「葛」にて造りたる物を下ろし、車にて上に引き上ぐるとぞ。皆木の石と化し、硫黄の氣を得て燃ゆるなり。さて此處より太宰府へ行く路あり。また豊後に中津の近邊に切貫と云ふ處あり。是れは山の根を洞穴の如く往來に切り抜き、内暗き故また窓を切り明け、穴の中は馬に乗り往來するとぞ。また此處より二里程行き、石羅漢あり。本堂も半分は石にて作りたる物と云ふ。路隔たりし故に行かず。此日霽など降り、寒し。此邊は十月雪降るとぞ申す。

五日。曇りて寒し。此の穢き宿を朝六時頃出立して、飯塚と内野の間三里半あり。路に生なる椎茸を食ふ。是れは初めてなり。此處より少し往きて、右の方田路に入る。太宰府へ行く路なり。夫れよりだんだん山坂路にて、大石二十間、三十間ある物、行く路にあり。飛び越し行く事なり。四里を過ぎて漸く太宰府に至る。大鳥居あり。池に三つ橋掛かる。左右は反橋、中は反らず。池の邊大楠あり。山門あり。本社左右回廊。飛梅と云ふは本社脇にあり。眞に侘び寂びたる處なり。日も西山に入りければ鳥居の前なる大野屋と云ふ家に泊る。毎年八月廿一日より廿六日まで祭禮あり、近郷より参詣多し。此所は外外よりは至つ

て寒し。十日以前より霜降り申すとぞ。
 六日。寒し。風あり。朝、晝を認め神主に贈る。五時過ぎに出立して、此處より十四町行きて觀世音寺あり。隣に海代寺あり。堂の前に大きな石臼あり。譯を聞けば埒も無き事を云ふ。夫れより七八丁も行きて、田の中に一間四方なる石に丸柱の礎幾らも有り。土民に聞けば此様なる礎、耕作の妨げ故に取り除けたりと云ふ。都府樓の趾と云ふ。何にせよ、すさまじき殿あり「し脱か」と見えたり。此邊、田の中、路の傍ら、嶋「縞」目付きたる瓦幾らもあり。奥州多賀城の瓦の如し。是れは其礎の時代よりも手前の物なり。菅大臣の此の筑紫へ流されし時、「只僅見瓦色」と詩句あり。礎は都府樓の物なるべし。路路此瓦を拾ひても重ければ一つ二つ持ち歸りぬ。針磨りと云ふ處は福岡への往來なり。四里ある由。太宰府には古跡多し。其一二を誌す。

天原山安樂寺は地名なり。岩踏川、社の北の方三里にあり。思川、宰府町の西へ流るる川なり。愛染川、社の南にあり。歌に「今宵よりまた濡らすべき袂かなある染川の末の白波」。白川は宰府町の西南にあり。歌に「むばたまの我が黒髪は白川のみつわくむまで老いけるかな」。幸橋の歌あり。「頼もしき名にも有るかな道行けば先づ幸の橋を渡らん」。漆川の歌に「名には云へど黒くも見えず漆川さすがに渡る人は濡「塗」るめり」。其外、刈萱の關の古跡あり。水城の關の古跡あり。原田より中原、蛭子の像を石にて刻み辻に立つる。原田より田代の間、筑後の高麗山見える。中原より彦山へ行く路あり。十六里ある由。また久

留目「米」の城見ゆ。此間より兎角寒く、此の旅舎悪しく、風邪なり。此の中原に泊る。七時過ぎにあり。埒も無き家なれど疊も綺麗なり。飯を出だす。菜は平皿に十筋程昆布を入れ、蒟蒻一切、鰯魚切身一切、眞に奇妙なる料理なり。穢き田婦の小兒を抱きて給仕する。

七日。時雨にて雨降り、又止む。神崎と云ふ處、此處に喜鶴と云ふ鳥、野邊に飛ぶ。田夫に聞くに「大ないがらす」と云ふ。實は「高麗鳥」と云ふ事の由。此邊の言葉、奥州の言葉に似たり。豆腐屋の前に通りしに、豆腐を買ひに来る。價を聞きしに、賣者云ふ様、「ゴンマエ」と答へたり。是れは五文と云ふ事なり。佐賀城下四里程あり。然し中國邊より穢し。夫れより牛津なり。此間の宿はづれの家に、荒海布の如き物に文字ある物を以て暖簾にす。是れは唐より荷物を包み來る物なりと云ふ。二里過ぎて小田と云ふ處に泊る。此邊は東海道筋の様なる泊家は無し。皆百姓にして恒の家なり。先づ茶を出すに、土瓶に茶碗を銅の盥へ入れて出しけり。然し九州の地、番茶無し。嬉野と云ふ處、茶を出だす所なり。茶釜無し。一度一度に土瓶にて煮花なり。是れのみ甚だ好し。

八日。天氣。小田を六時出立し、さて江戸にてお約束申し候て、必ず萩と云ふ所へ參るべしと申上げ置きしに、參るべしと存じ、此處にて聞くに、夫れは三里後なりと云ふ。何分にも參るべしとて、半路程後へ歸りしに、いや、いや、是れは歸りに寄り申すべしとて、また取つて返し、長崎の方へ赴ける。後にて承れば、往來問屋場へ「此様なる旅人通り申し候や」と度度お尋ねあり「し脱力」とぞ。此方同勢一向に

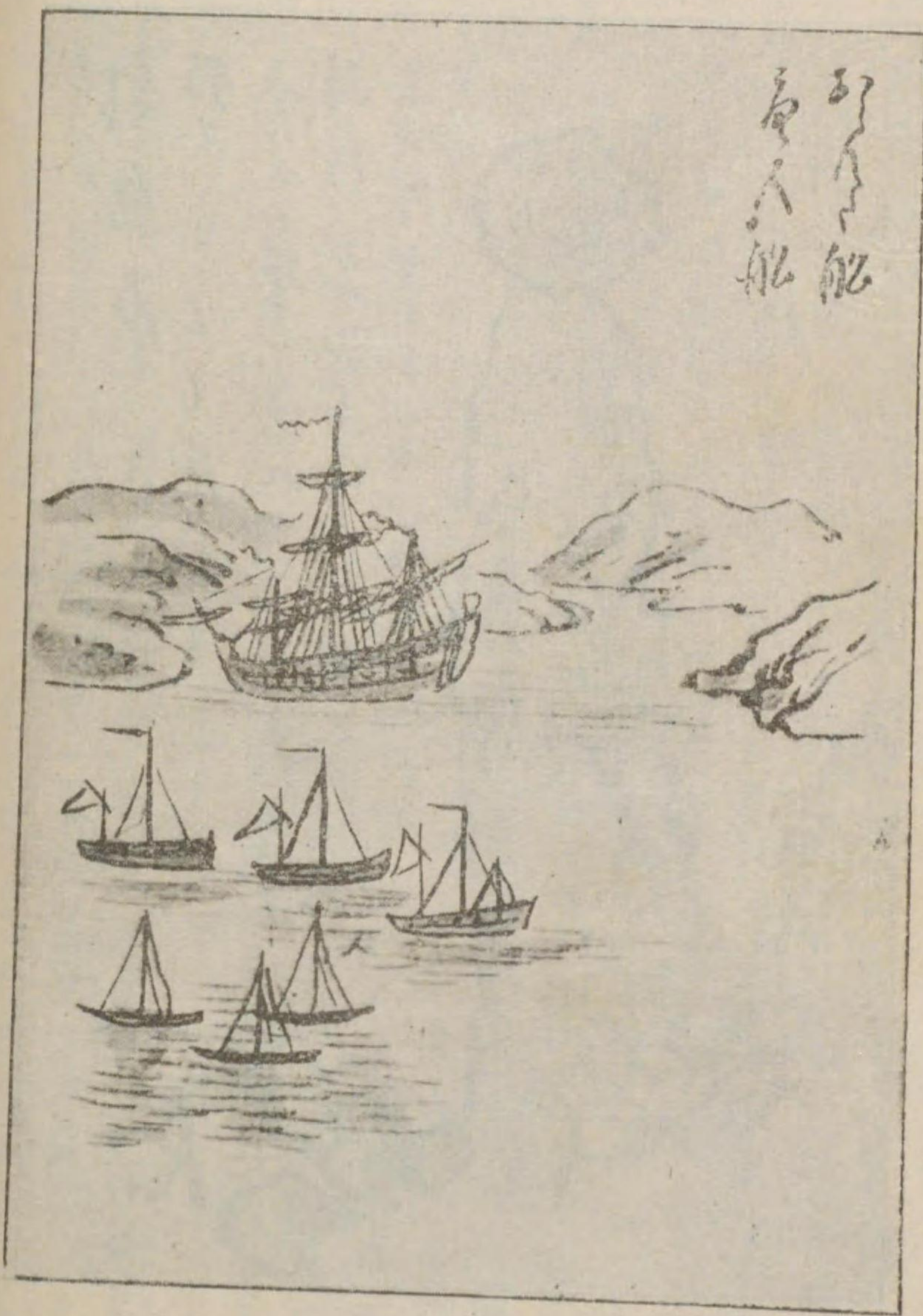
二人故、問屋場心付かずとて大笑しぬ。萩は佐賀城下より三里も入りたる事なり。此處より成瀬と云ふ處へ行きしに、是れ宜しからず、塚崎通り好しとぞ。鹽田より嬉野へ二里餘、嬉野より彼木の間、眞に大山坂路なり。漸く夜に入りて彼木に泊る。此邊、人を泊める事を商賈にする家無し。皆草履やら草鞋やら賣る至つて穢き家のみ。夫れ故に座敷と云ふは無し。家内の者の寢伏しする處に此方も一所に寢る事なり。九日。天氣。彼木を六時過ぎに出立して、三里行き、松原と云ふ處を過ぎて大村に入る處、五六丁の間綺麗なる處、半に櫻木を植う。また新城と云ふ處、船の着く處なり。夫れより大村に入る。城下、家毎に注繩を張り、入口に香を焚きあるを見て、甚だ怪み、問屋場にて之れを聞くに、此地、瘡瘡を嫌ふ。此節長崎邊流行す。夫れ故に斯くの如しと云ふ。夫れ故か婦人甚だ好し。大村より船に乗り、長井と云ふ處へ七里、船頭何やら話をする。一向に分からず。話の仕舞に「ドウドと投げたり」と云ふ。是れにて角力の事と知り。其日天氣好く、三四月の如し。山の岸にて、螺螺、鮑など取りて、程無く長井に着く。長井より十餘町過ぎて時津と云ふ處、是れは彼木より船の着く處と云ふ。此處に埒も無き所に宿を取る。此處より長崎へ三里と云ふ。

十日。時津を朝出立して、中野村、平野村など云ふ所を過ぎて行くに、此邊の犬、地犬に狎の交りて出来たるものなり。小童の遊び話の中に「夫れは和蘭陀の様ぢや」と云ふ。時津より十餘丁長崎の方、「さば腐らかし」と云ふ石あり。夫れより一方は畑、一方は山の根を行く處にして、岩に佛の形を彫り付けてあり。



甘ハ
鱈腐石
粗大、くさくさ、石、危く、かゝる
こゝに、さう、さう、さう、れ、や、ま、と
孫、行く、者、腐、石、れ、を、さ、う、と、ゆ、え、ん
と、や、わ、く、や、と、さ、う、ち、を、さ、う、と、ゆ、え、ん

舟人船



皆面部手足を打缺きてあり。是れは古、イギリス人渡りたる時の所行なりとぞ。此處より長崎の入口なり。是れは本道に非ず。本道は大村より諫草四里、矢上へ一里、日見へ一里、長崎へ一里なり。長崎入口の町を櫻の馬場と云ふ。夫れよりして浦上と云ふ處に至る。高き處にて山なり。此處も長崎へ入口、人家續く。長崎の町中見え、和蘭陀屋敷には幡〔旗〕を建て、唐人屋敷は十善寺と云ふ處にして低き所、能く見えず。唐船は七八艘、白き幡を立て、大波止と云ふ處に掛かりて、和蘭陀船は、其頃十月なれば大波止を出で、神崎と云ふ處は一里を隔つ。此處に一艘、今一艘は山に隠れて見えず。向ふ所は西にて沖なり。此處より向ひ地は稻佐と云ふ處なり。山に登り此の景色を寫す。長崎町數九十六町と云ふ。一體海際山にして、町中石階多し。旅館は無し。旅人滞留を禁ず。今の長崎にならざる前は、長崎甚左衛門と云ふ人の領地なり。此日本へ異國より船を着くるは、伊勢の大湊と云ふ所さだかならず。夫れより泉州堺の濱なり。また筑前博多、博多より肥前平戸嶋に渡海して、寛永辛巳の年、今の長崎になる。さて和蘭陀大通詞吉雄幸作、同じく本木榮之進兩人未だ役所より歸らず。夫れ故樺嶋町稻部松十郎へ行く。此者は和蘭陀部屋附役の者なり。先づ是へ暫く滞留す。日暮れて吉雄、本木の二人參る。また本木の息元吉參る。話す。唐人八月十五日、月餅と云ふを造り、夫れを貰ひ食ひしに、小麥の粉にて製し、油にて揚げたる物、至つて甘し。彼國糯米あると雖も吾が日本の米の如くならず。故に日本の餅無し。

十一日。天氣。嶋原屋敷へ行く。晩方風呂屋へ行く。居風呂なり。夜に入り平戸町幸作處へ行く。二階和

蘭陀座敷を見物す。イギリス細工のビイドロ額、欄間下に掛け並べ、下には椅子を並ぶ。其外奇妙なる蘭物
を飾り、酒肴を出だし、夜の九時過ぎに歸る。

十二日。天氣にて、朝早く御崎觀音皆皆參るとて、吾も行かんとて、此處より七里の路あり。松十郎夫婦、
外に鍵屋と云ふ家の女房また一人、男子五人にして參る。此地生涯眉を剃らず。夫れ故若く、また容色も
好く見ゆ。鍵屋婦は跣足參り、皆路山坂にして平地無し。西南を向いて行く。右は五嶋遙かに見ゆ。左は
天草、嶋原見え、脇津、深堀、戸町など云ふ處あり。二里半餘、山の上を通る所、左右海なり。脇津に三
崎觀音堂あり。此處に泊る。

十三日。曇る。時雨にて折折雨降る。連れの者は途中に滞留す。我等は歸る。和蘭陀船また唐船、沖に掛か
り居る。唐人下官の者七八人陸へ水を汲みに上がる。皆鼠色の木綿の着物、頭にはダツ帽を被りたり。初
めて唐人を見たり。路路濱冬青、コンノ菊、野にあり。脇津はまた長崎よりまた暖土なり。此邊の土民、
瑠〔琉〕球諸を常食とす。長崎にては芋粥を食す。芋至つて甘し。白赤の二品あり。

十四日。曇。丈助と云ふ人、松十郎近所の人なり。菅生山に居たる出家を同道す。菅生山は西國札所にて、
伊豫の國なり。階にて山に登り「降り脱力」する處、至つて妙なる所と云ふ。行かず。此の出家に聞く。

十五日。天氣。此の長崎へ入る口を西坂と云ふ。此處より見たるを圖す。晝頃此處の親類の人參る。是れ
は唐人掛りの者なり。此人の語る程、赤城は浙江の中、乍浦と云ふ處の人なり。少し書を善くす。然れど

東都芝門神僊坐

春波樓主人

Andrew

も無學人にて、皆商人の手代なり。方西園は福建の近邊にて船を仕出す者の親類にて、是れも商人にて交易に疎くして畫など描き、のらくら者なり。皆學文「間」又は詩など作る事は一向に知らずとなり。

十六日。天氣。朝飯後より勝木利助と云ふ人の方へ參り、晝頃より木庵開基の南京寺へ行き見るに、寺は山にあり。眞に唐めきたる事なり。夫れより白眠と云ふ人、印の上手にて名高き人なり。是れへ參り、知る人になる。悴は醫者にて槐庵と云ふ。此處を去つて丸山寄合町夜見世を見物す。見世に郡内縞の如き夜服にて、客を取れば衣裝を改むと云ふ。價、揚代十匁、雜用とも。また大夫あり、揚屋一軒あり。是れは揚屋へ呼ぶ事なり。揚代廿七匁、内十匁は雜用なり。漸く大夫六七人とぞ。此節夜芝居あり、また夫れへ行き芝居を見るに、砂糖葦の薦にて張りたる小屋にて、狂言は大友の眞鳥歌舞伎なり。據ろ無く見物して、夜の九時過ぎに歸りぬ。

十七日。曇る。和蘭陀出嶋へ入るには坊主、總髮はならずと云ふ。此處に於て剃つて野郎となり、江助と名を改む。一人も江助と云ふ者無し。とかく江漢先生と呼ぶ。また利助と槐庵と共に木庵開基の福濟寺へ行く。寺中永笑院に參り、酒出で、日暮歸る。額あり、大雄寶殿と、溫陵鄭泰印、是れは國性帝の事なりとぞ。

十八日。曇る。此日灸治するに此地に切艾無し。

十九日。天氣にて、小袖綿入一つ着て好し。晝より酒屋町鉅鹿祐五郎方へ參る。主人出でて云ふ、私の祖父

は支那明の世の者にて、外國より亂を起し明亡びるの時、亂を避けて此の日本長崎へ來りて、今此處に住居す。性は魏、鍾鹿と云ふ處の者なり。其頃は持ち來りし物も有り、家居も彼國の風に造り、お目に掛けたき物もありしに、火災にして失ひ、斯くの如きの體なりと、涙を浮べ斷りを申しき。成る程一向の貧乏人とは成りぬ。

廿日。雨天。鍛冶町荒木爲之進と云ふ者の處へ行く。是れは畫鑑定の役にて、夫れ故畫も少し描くなり。一向の下手。此處にて晝食を出だす。夫れより大德寺に行き、和尚に逢ひ、酒食を出だす。庭に「かひで」と云ふ唐楓あり。是れは黄色になるのみにして紅葉はせぬものなり。此節紅の如くなり。和尚の云ふ、今年初めて紅葉すと云ふ。さて庭より見下ろせば和蘭陀出嶋、唐人藏屋敷、十善寺、目の下に見ゆ。夫れよりして筑町服部甚兵衛方に、宮嶋にて別れし春木門彌と云ふ者、此處に滞留して居ると云ふ故に一寸寄りぬ。宿元へ手紙を頼む。

廿一日。曇りて雨。晝よりまた大德寺へ「シツボク」に呼ばれ馳走になる。夜に入り江戸宿老と云ふ人來り、知る人になる。夫れより田口總八郎と云ふ人、是れも「ヲトナ」と云ふ役人なり。之と共に丸山揚屋河崎屋と云ふ家に至り、大夫を揚げる。名は半大夫と云ふ。田口は小式部と云ふ。衣装は紋縮緬なり。また何やら金糸の入りたる物を打褂に着たり。髪は江戸の様なり。夜具は表木綿なり、裏は絹にて、蒲團同斷なり。長崎の衣装と云ふは昔の事なり。昔は唐人、和蘭陀も町に宿を取り、金一兩に付き十二匁の運上を

出だしたる時の事なり。今は唐人、和蘭陀人の代物、皆上へ買ひ上げ夫れよりして商人入札にて買ふ事とは成りぬ。別して此節は水野公と云ふお奉行此方、尙尙衰微したると云ふ。揚代廿五匁、酒肴數數出だす。外に雜用無し。揚屋へ料理、廿五匁の内十匁なりとぞ。夫れ故旅宿へ大夫を呼べば一日十五匁なり。二人共に長崎近所の産れと云ふ。何れも美人なり。此の揚屋の亭主は大坂者にて、此處に住居すと云ふ。草畫五六枚認める。お山達皆見物す。予が揚げし大夫の曰く「わたくしは江戸の路考と申す役者に善く似むと申す事、實なりや」と問ふ。茲に於て能く見れば成る程似て居たり。其夜此處に泊る。

廿二日。天氣。晝より元大工町唐人通詞吉雄佐十郎方へ行く。酒、吸物出す。吾等製作の目鏡を見せる。唐人、今渡海する船は私にする商人なり。皆蘇州と云ふ處より來る。則ち蘇州は日本の大坂の如し。南京第一繁昌の地なり。王命にて渡海する者、昔は范氏なり。中頃にては王氏來る。今は錢氏なり。外に十二家として、是れは自分一己の商に交易するなり。其船五六艘來るなり。日本より交易の代物は銅十萬斤を高とす。彼國より持ち渡る物、廣東邊の產物、藥種、砂糖類なり。また金銀をも持ち渡るなり。程赤城は十五年此方渡海すと云ふ。

廿三日。天氣。時雨。上玄として、家毎に餅を春く。晝より田口氏へ行き、藥園を見物す。夫れより梅ヶ崎と云ふ處、唐船掛かりてあるを、乗り、見物す。また唐人往來するを見る。歸りに上村德太郎、是れも和蘭陀掛りの者、是れへ寄る。酒、吸物を出す。夜に入り、四時に歸る。

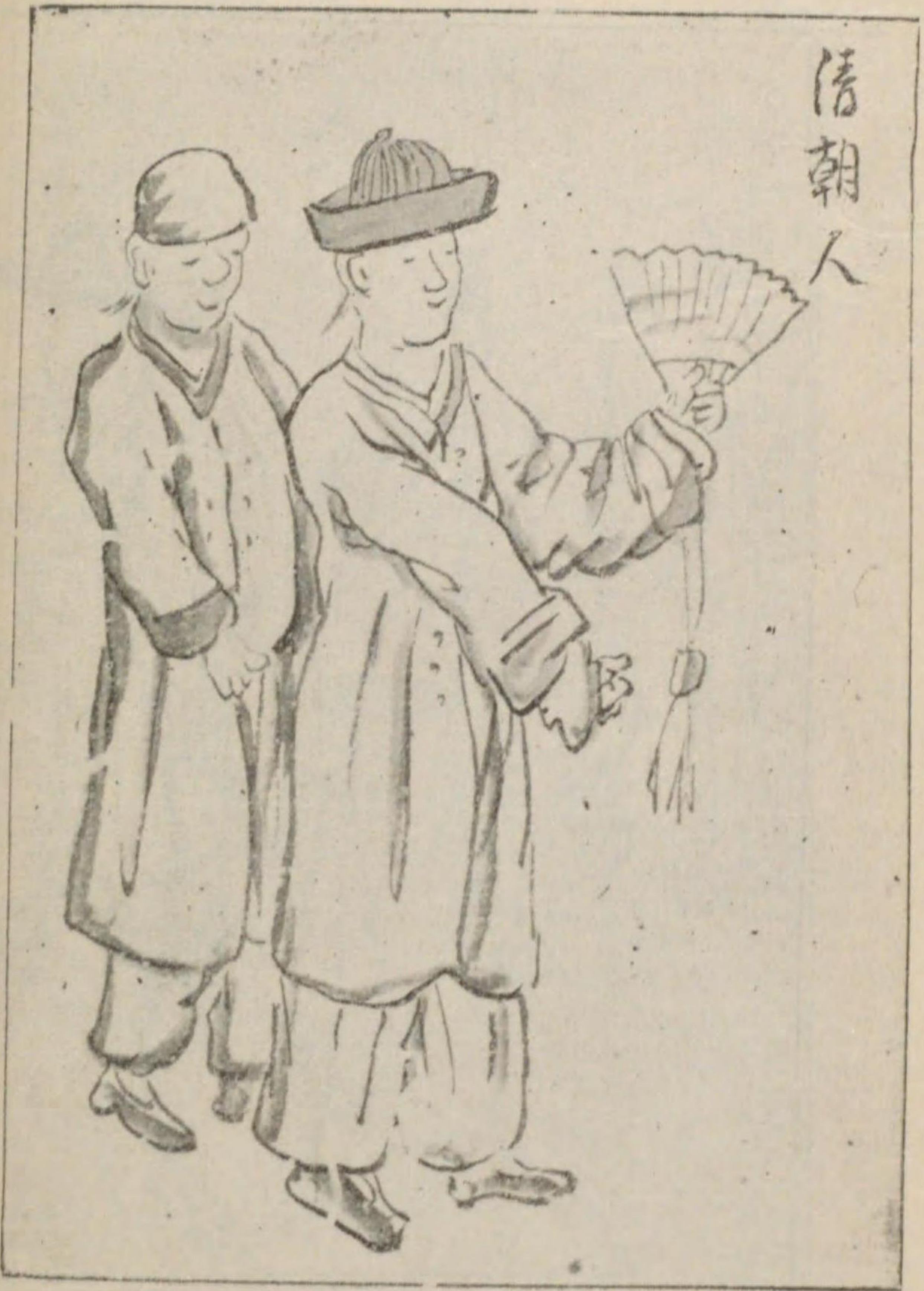
廿四日。天氣。時時雨。和蘭陀も唐人も共に館内へ入る事を禁す。勝木利兵衛は江戸會所の下役、是れへ参り、和蘭陀出嶋へ入らん事を談ず。吾をば白川侯の陰密ならんと思ひ、夫れ故世話をする者無し。茲に於て江戸會所の商人と成り、館内へ入る。絹袖位の小袖に脇差一本なり。青木門彌眞に通詞の草履取と成り、布子にカラ尻を褰げて行くを見たり。

廿五日。天氣。江戸會所より門の切手を請取り、吾も後に従ひ、勝木利兵衛外に長崎の者一人来る。門を入る所にて懐、袂を改む。何物にても持ち入る事を禁す。暫く行くと、去年江戸石町長崎屋と云ふ和蘭陀宿にて逢ひたる和蘭陀外科ストツツルと云ふ者なり、吾が長崎へ参る事は兼ねて江戸にて約束して置きぬ。夫れ故吾を見ると、先へ立ち、人の居ぬ牛部屋の方へ行く。路路何やら話すに、一向に通ぜず。唯だ「テイケネン、テイケネン」と云ふ事のみ、是れは江戸の丸の内見附見附を圖して貰ひたしと云ふ事なり。夫れよりして、ミネール、コム、カーモル、カーモルと云ひけり。是れは能く分かりて、能く通じけり。ミネールとは貴公と云ふ事、カーモルは部屋なり。コム、コムとは來れ來れと云ふ事なり。夫れ故に後に付きて行くに、二階へ土足にて登り、穢き疊を敷き、皆立ちて、坐す事無し。椅子に腰を掛け、シツポク臺の如き物の上にコップに酒等を載せ、其外火とぼし色色を飾るに、皆ビイドロ、銀細工なり。また白き鸚鵡の様な鳥、大きさは鳩程もありて、放畜にして、手に居る、顔へ付け、頭を口の中へ入れなどして愛する。此鳥、鸚哥の類にて、其後見ざるなり。また酒を吞ませけるに、何やら濁ろく「醱醱醱」の様なる酒

にて醱く思ひければ、「酔し酔し」と申すに、彼れ云ふには、「クスリ、クスリ」(藥藥)とて玉子へ指さしけれ。「クスリ、クスリ」は日本の辭なり。夫れよりして外へ出で、また通詞部屋へ参り、幸作に逢ふ。幸作申し付け、徳太郎、松十郎、安「蝕ス」にて、かびたん部屋へ行くに、外の土間より階三方より登る。大階なり。上に廊架ありて、先づ松十郎部屋へ行くに、皆履き物の儘なり。傍らに黒ん坊来る。松十の云ふ、「善く生寫に成され」と云ふ。此黒ん坊と云ふは和蘭陀の方の者にあらず、天竺の方、和蘭陀の出張、ヤハ「爪哇」嶋の者、或はアフリカ大洲の中「モノモウタアパ」と云ふ處の熱國の産れなり。故に色黒く、髪ちりちりと雲珠巻に成り、總べて目鼻も甚だ異なり。夏は裸の上へ袈裟の様なる物を着るなり。此時は多なり。和蘭陀より筒袖の衣類を與へ、下は日本の象股引に、履は雪駄を穿くなり。腰には日本の皮の下げ煙草入を下げたり。頭はベンガラ嶋「縞」とて木綿の赤き色の物にて包み、髭は無し。辭は天竺語にして、蘭人にも通ぜず。甚だ穢き者なり。夫れよりかびたん部屋へ行く。疊二十疊も敷き、四方欄間、下にビイドロに描きたる額を掛け並べ、下には椅子を並べ、椅子毎に唾壺とて唾吐、是れは銀にて堅二尺程にて花瓶の如し。疊の上に毛氈の如き、花を織りたる物を敷き、天井の中にビイドロにて作る瑠璃燈を吊り、向ふに紅き幕の下りたる書齋の如き處あり。障子皆ビイドロを以て張る。かびたん其内より出で、手に長いキセルを持ち、吾等に向つて挨拶す。松十郎通辯して云ふには、「ナント、リツパにケツコーカ」と、彼方から自慢して云ふなり。彼等、日本をば物を飾らず至つて素なる國風と思ひ云ふなるべし。夫れより此方



清朝人



クロ坊 スワルトヨニグ
頭ラハ 新道カヒラ
ベシカラ 鳴れホ綿
と 笑く 足日不
め象 引雪 踏ハス

スワルトとい 黒ヒヨウ
ヨシクとい 差イシヨナリ

からも「是れは目を驚かしたる事」と返答す。夫れより黒ん坊一人、銀の盆の上に金を焼付したるコップとフラスコと載せ傍らに立つ。其コップにて酒を呑む。「アネイス、ウエイン」と云ふ焼酒なり。是れは茴香にて造る酒なり。剛い酒故、吾に付き來る者へ與へけり。此かびたんは江戸へ五度参りたる者にて、知る者なり。名「ヨハンネス、カスバル、ロンベルグ」と云ふ。また一人のかびたんは二階住居にては無し。路に花畑と云ふあり。池の上に橋あり。其上に涼み所あり。玄關の標なる處より入りて、座敷へ通り、夫れより「玉つき」と云ふ處を見物す。是れは碁、双六などする標なるものにて、戯なり。四尺に七尺程に羅紗を張りて机の如し。夫れに玉を置き、馬を打つ鞭の如き棒にて突く事なり。四所に玉の落つる所ありて、其れへ突き入るる事なりとぞ。此の「かびたん」は當年初めて参り候者にて餘り懇意に無し。夫れより出嶋を出でける。吾等に附添ひ來る者三人、皆長崎者にて、一向和蘭陀人を見たる事無し。尤も此の出嶋、蘭人居所へは一向入る事ならず。吾が蘭人と物語するを見て眞に肝を潰し、其上「かびたん」と知る人なりとあれば、「何と云ふ人」と話し合へりとぞ。長崎の者は唐人は見れど蘭人は見たる事無し。佛參など皆駕籠に乗りて行く故なり。夫れ故に譯を知らぬ者は今にても奇妙なる人と云ふとぞ。西國長崎近邊の大名衆、一代に一度此嶋へお入りあるとぞ。其外は成らず。

廿六日。少少雨。向地稻佐悟眞寺に行き、唐人、和蘭陀の墳を見る。皆臥したる儘に葬ふ。蘭人ツール、コップと云ふ人の塚、石を蒲鋒形にして、何やら蘭字を彫り、金箔を入れ、上に砂時計を彫る。是れは漏刻盡きたる譬なり。宿へ歸りて牛の牛肉を食ふ。味ひ鴨の如し。和蘭陀、此節出船前にて牛を數死して鹽にす。其牛皆赤牛なり。蘭人鐵槌を以て額を打ち、殺す。また四足を縛り、横にして喉を切り、殺す。夫れより後足を縛り、車にて引き上げるに、口よりして水出づ。足の處より段段と皮を開き、悉く肉を鹽にす。彼國にては牛肉を上食とする。中以下は「パン」とて、小麦にて製す「る略カ」物なり、是れを食ふ。寒國にして米を生せざる故なり。

廿七日。とかく雨。折折時雨なり。朝五時頃、吉雄息定之助、和蘭陀通詞にて、其の文箇持「文庫持」と成り、紅手船へ、荷積み水門より小舟に乗り、一里沖、神崎の蘭船、船掛かりして、其船の側へ乗り付く。其高き事二丈程も有らんと見え、繩梯子を登る事至つて困かし。登り盡して下を見れば、屋根に登りて見下ろす如し。さて大船なかなか書にも辭にも述べ難し。船、「チャン」にて黒塗り、欄干のみ黄色なり。石火矢筒一方に二十五、總べて六十程あり。艙の方、屋形あり。ビイドロ障子にして海を望む。帆柱三が所に立つ。帆綱は眞に蜘蛛の巣の如し。綱毎「セビ」とて萬力車あり。綱は表と艙の方へは餘り張らず、左右へ數十筋に張る事剛しく、其綱に横にまた張りて梯子として登る。帆を掛くる桁は揚げ下ろしをせず。帆は此桁に巻く。久しく船掛かりする時は帆を外し、帆また長形に非ず、四角なり。中の柱に三つ、先の柱に二つ、矢帆一つ、また二つ、艙の方には大きな帆一つ、是れは向ふ風に乗る開き帆なり。年年船違ひぬ。表に獅子を黄に塗りてあり。船中を働く者を「マタロス」と云ふ。是れは和蘭陀地方の者なり。衣類

は蘭人の如く、寒中足は履無し、素足なり。是れは柱へ登り帆綱を渡る故なるか。此者陸へ上がらず、唯だ船中のみに暮す事なり。此の「マタロス」、帆綱より帆綱に渡り輕技をし、水中へも入る事、妙なり。黒ん坊は其技一向に出來ず。石火矢は毎朝一つ放つ事なり。また祝事には二つ三つも放つ。是れは日本、火を打つて淨める如し。船を動かす爲めに打つなど云ふは長崎者の嘘話なり。船は六月蕭岸して八月出船する。と雖も、新かびたん、古かびたんの勘定、其外取合、篤と濟まぬ中は、船は神崎の沖に掛け、十一月に至り、和蘭陀かびたん乗切して、東風を待つて出船す。

廿八日。朝曇る。五時より唐人通詞清川榮左衛門、下通詞吉嶋作十郎と共に、大波戸より屋根舟に乗り、稻佐悟眞寺へ唐人六十人釋佛參す。舟、向地の岸に着くと、寺より笛太鼓を打つ者を雇ひて、唐人の先へ立ち、笛太鼓を鳴らす。此者一向の下人にて、羽織も着ず、袴も無き體にて林「囃す」。管絃の氣取なり。寺の門に至ると止めるなり。眞に飽賣の如し。唐人、下官の者多し。其内善き人は十人、之を船頭と呼ぶ。宋敬庭と云ふ人に知己に成る。是れは五十位に見え、鬚少あり。其餘鬚無し。また西湖と云ふ人は四十位にして、是れは肥えたる人なり。顔色利口相に見ゆ。予が製する銅板畫の覗眼鏡を見せければ、皆皆感心する。シツポコ臺、四人詰にて吾も共に食ひけり。住僧、唐人に無心を申す故、數十人呼びたり。唐人の云ふには、「寺も大破に及べり、氣の毒に存じ、白砂糖三俵づつ奇心「寄進」致すべし、然し住僧の身持宜しからざるは無用に致すべし」と、通詞より住寺に申し聞ける。僧、頭を低れ、耻ぢ入りけり。總べて

此の長崎の寺は、とかく妾を招「抱」へ、肉食など恒とす。故にや、斯く云ひしなり。唐人の墓ある故、一年に何貫目と定め砂糖を寄心「進」するなり。唐人、塚の前にて衣類金銀を措きたるを板行に押したる紙を燃す。杯を「チユボイ」と云ふ。目鏡など見る事をば「カンカン」と云ふ。「以上第四卷」

廿九日。天氣。晝より勝木利助方へ參る。同道して、豚を煮て商ふ家ありと云ふ故に行きしに、無し。夫れより何やら塚も無き人の家に入り、寺の隱居の様なる者と酒を呑み、利助大醉して夜半宿へ歸る。利助は歌を歌ひ、酔つて、たはひ無し。一向に歸り路知れず。夜半、路を聞く人無し。眞に迷惑し、然れども「生醉本性違はず」とて、竟に宿に歸りぬ。夜更ければ利助方に泊る。

晦日。天氣。玉屋と云ふビイドロ細工の家へ行き、板ビイドロの傳授す。酒、吸物、硯蓋を出す。硯蓋を吾が前へ差出し、「御自由にお取り」と云ふ故に看を取り食ひければ、あとにて聞けば、看を取り食ふは甚だ失禮とぞ。先づ主人の方へ硯蓋を返し、「取つて下され」と云へば、「左様ならば御免」と云つて、主人看を取つてくれる。是れ長崎の禮なり。

十一月朔日。天氣。長崎は暖かなる土地にて、此節綿入小袖の上へ給小袖を重ね、其上へ薄き綿入羽織にて宜し。手足冷たき事無し。冬中、炬燵は無き者多し。此處は至つて狭き處にて、空腹になりても途中に食店無し。

二日。天氣。諏訪の社へ參詣す。此地の大社なり。利助方へ行く。江戸會所も參る。酒、吸物、蕎麥を出

す。義太夫淨瑠璃を聞く。長崎人の淨留里〔淨瑠璃〕を初めて聞く。
三日。天氣。近日此地を出立せんとて、船に乗り歸るべしとて、聞くに、大坂まで船賃、雜用、共に一人前七十五匁と云ふ。ポーフランスコ壹本に付き六十四文、六七本買ふ。唐人の帽子また下官の「ダツ帽」、其頃嶋〔縞〕縮面廉し。四五疋買ふ。

三日。天氣好し。松十郎家は四軒口、奥行き十間、土藏附、是れにて一年借り代十兩位、土藏無きは五六兩なり。此地は借家にて窟金とて一年に三十匁つ上より下されると云ふ。地主は三四百目上より下され、また勝屋町に和蘭陀船の圖、唐人屋敷の圖など賣る者、是れも二人扶持を取ると云ふ。總べて此類多し。是れは昔唐人、和蘭陀に直商せし時に、其後直きに交易する事を禁じたるに、其者ども渡世成りかぬる故、其者を色色役人として扶持を下されたり。此日和蘭陀乗り切り、夜に入り、石火矢の音數して、山山に小玉〔反響〕の響、また稻妻の如く光りて凄じ。石火矢の音も段段と遠く成りければ、幸作申すには、「和蘭陀、今夜船を出したり」と云ふ。東風を待つて船を出すなり。

四日。雨天。是れまで稻部半藏方に居る。明日出立すと偽り、幸作方へ行き居る。平戸屋敷留主居、江戸にて知る人故に尋ねる。留主居役三平治と云ふ人申すには「在所用船、五六日中に此處許へ來る故、其船に乗り平戸へ渡るべし」と云ふ。夫れに決す。

五日。天氣。またまた平戸屋敷、三平治方へ參る。酒、吸物を出す。また雞肉を食ふ。皮、骨共に切りた

る物なり。江戸の鶏肉は皮剥き、皮至つて剛し、骨至つて堅し、肉も筋多くして剛し。此處にて食ひたるは魚の煮たる如く、箸にて肉骨と能く離る。肉至つて柔かなり。歸りて幸作に話しければ、「何ぞ雞に異なる事無し、酒にて半時煮たる物」と云ふ。浦上にて賣るなり。五文錢を出せば羽を引きて賣る。此の浦上と云ふ處は、羊、豕、鶏を飼ひ賣るなり。夫れより幸作方へ歸り、枕元へ火鉢二つ置き、緞子縮面の夜具を着て、彼の和蘭陀二階に休みける。

六日。曇る。寒し。朝起き、勝手の方を見るに、皆何もかも和蘭陀風なり。夫れより二階に登り、椅子に凭り、羊、小鳥を焼きて、ポウトルを付け食ふ。飯の菜、羊に醬油を付け焼く。晚、甲子祭、小豆飯出來る。幸作倅定之助、定五郎來る。また細工場と云ふ處あり、見物す。土間にして、轆轤挽き、鍛冶道具、其餘奇妙なる形の物、數數あり。幸作細工はせねど好事に色色集めたる物なり。此日田舎者、病氣とて藥を貰ふ。幸作の云ふ、「シヤンスを、シヤンスを」と云ふ。何の事かと思ひしに、「相思」とて唐音にて色情と云ふ事とぞ。

七日。天氣。風立つ。和蘭陀、正月十五日立つ。色色調へ求めたる物、荷拵へし、此便に江戸へ遣はすべしとて頼む。

八日。曇。四時より平戸屋敷へ參り、衝立に墨梅を認め、其外、畫色色描き、酒を吞み歸る。夫れより大村町定之助へ參る。豚を煮て夜食を出す。至つて美味し。

九日。曇りて、大西風。寒し。頼まれたる書を所所へ遣はす。幸作を「おち様」と云ふ四歳位の小童あり、實は妾腹の子と云ふ。蘭語を能く覺えて、牛肉を「クウベイス」と云ひ、馬を「パールド」と云ひ、薩摩芋を遣れば「レツケル、レツケル」とて食ひけり。今幸作の後は此童なり。「レツケル」は美味の事。

十日。天氣。晚七時頃、役所より幸作を呼びに參る。歸りて承れば紅毛船の小舟、鍋嶋領地へ吹き流されたるを、漂流と云ひ立てし故に表向となる。晝頃より大徳寺へ行く。方丈に逢ひ、十四日に出立せん事を云ふ。酒、吸物を出し、唐人書、外に和蘭陀指輪、鐵にて作る煙草入、餞別に贈らる。此方からも紙の畫三枚、絹地畫一枚遣はす。平戸屋敷より飛脚船參り、十三日に出船と申し來る。

十一日。雨天。朝、鱈の「めた」に蕃菘、根葱を入れ、また何やら魚に橙子の酢を入れ、また梅干の肉に臭蕪をあしらへ、味噌にて、幸作朝より酒を呑み、吾等に進める。さてさて困り入る。夫れよりして薩摩芋の粥を食ふ。薩摩の國の醫者、幸作の弟子と成り居る。此者申すには、「在所は船中七十里、近日此處元を出立、見物ながらお出であらんか」と申しけれど、竟行かず。此者、薩摩琵琶を弾けり。古風なる物なり。夫れよりして猪の又と云ふ鐵細工人の處へ參る。細工道具等、砥車など、皆和蘭陀風にて、日本の鍛冶の様に無し。我等が作る所の銅板畫を見せけるに、甚だ肝を潰す。是れは和蘭陀銅板畫は曾て日本にては出來ぬと云ふ事を知る故なり。

十二日。大風雨。此地の時雨なり。幸作の像を草草たる墨畫にして、袴羽織にして坐し、手に蘭書を持ち、上に「エンゲル、ルーフ」を吹き居る圖なり。是れは備中倉舖「敷」と云ふ處の伯駒と云ふ醫に贈る。張仲圭の像を認め、由良泰伯と云ふ醫に遣はす。讚州の人にして長崎に住す。晩方に石見の人、松平周防侯の醫者、名は齡文と云ふ。鼻の缺けたる人なり。幸作へ弟子入る故に、和蘭陀二階タアフル四人詰め、來る者、予が名を知る。

十三日。時雨なり。石原休甫、外に一人、幸作の像を認め遣はす。皆皆謝銀を贈る。

十四日。時雨。幸作方を出立せんとす。酒、吸物を出し、和蘭陀ビイドロ、コップを贈る。袴にて外まで送る。利助、伯民は西坂まで送る。平戸屋敷へ寄り、夫れより時津の方に赴く。雨にて路すべり、晚七時に至る。來りし時泊りたる隣の家に泊る。昨夜までは好き夜具にて寢たるに、今夜はさてさて穢き家に泊る事かなと云ひけり。此所の者、食事するを見るに、曾て米麥を食はず、瑠球芋を蒸して籠に入れ、夫れのみ食ひ、菜には生大根薄く切り鹽にて揉みたるなり。

十五日。とかく時雨なり。朝五つ時に船を出す。風強し。波高し。大村領小串と云ふに船を掛け、また龜が浦に入る。雪と雨降る。小舟なれば笠を掛ければ立つ事ならず。船頭より穢き蒲團一枚借り、夫れを被り寢るに、鼻先へ雪、笠の間より降り込み積む。大難澁、話の種。さて長崎より此邊の風土、三十二三度の處にして、尤も海邊故、夏は暑く、冬は至つて暖かにして、雪霜希なり。家家に橙子の樹を植う。恒に酢に用ふ。「ザボン」として九年母に十倍の物、辻辻に賣る。大根太く短し。「ケラの尾」と云ふ。また細大根

白赤の二品、薩摩芋も同じ。蕪また同じ。茶釜無し。土瓶にて茶を煎す。口取、ボール、黒砂糖、或は蕪を酒醬油に漬ける。婦人生涯眉を剃らず。手の指に金輪を箱める。十月より此方時雨とて大雨雪まじり、雷風吹き、又は上天氣となる。甚だ暖氣となる。言語は東方と甚だ異なり。

十六日。天氣。小串と云ふ處にて舟にて夜を明し、朝、船を出して、六里程走りて針尾の瀬戸なり。右は大村領、左は平戸領なり。山兩方より入り込み、其間僅かにして波無く、潮雲珠巻き、木目の如し。或る岩石を觸れ、白浪飛んで沸湯の如し。引潮に渦へ乗り入る時は舟忽ち巻き込むと云ふ。夫れ故、潮の満ちたる時渡るなり。此の瀬戸の間を乗る事、凡そ半里程あるべし。船頭甚だ心を用ふる事なり。漸くにして此處を越え、小鯛が浦と云ふ處に七時掛かる。山に社あり、舟より上がり、磯邊歩るき、向ふの祠へ參るに見所無し。船頭其外の乗合の者も此處に知る者ありて、何處へか行き、歸りに求めたるや、「どぶろく」とて濁酒を我に進めける故、一口呑みて顔を鑿めて止めぬ。夫れより其酒の中りたるや、昨夜舟に臥し寒氣の中りたるか、頭痛などして氣分悪しし。夫れより程無くして大鯛が浦に掛かる。此處は皆平戸領なり。因つて田夫の家に上がり、火に當りけるが、氣分悪しき故に食事せず、横に伏しければ、何やら上に掛けけるが、とろとろと一寢入しけるが、僕來て云ふには、「今風が直り申す故に舟を出す」と。目を覺ましける氣分さつぱり心持好し。夫れより舟へ行くに、夜の八時頃なり。満月浪を照し、寒風肌を通す。東風吹いて舟走る事早し。牛が首など云ふ島を見る。重き流人は此處に來ると云ふ。夫れより九十九島の外海を乗り行く。眞に西は朝鮮、唐の大洋なり。風追手にて忽ち夜明けて四時過ぎに平戸島に着岸す。

十七日なり。天氣。船より上がり、船頭の宅に行きて食事す。夫れより長崎宿あり。宮の町橋口次兵衛と云ふ。此處に藤五良とて幸作の外料の弟子、四五日以前に參り居る。其者先づ酒を買ひ、鮪の刺身にて呑む。平戸は鮪、まぐろ、鱈、皆其毒に中り、濕瘡を病む者多し。宿の主人眼の悪しき人故、之を聞くに、「私瘡毒の病ありて兩眼抜け出で、一寸程下がり申す時に、熱病を煩ひしに、大熱の爲めに其の濕毒悉く脱け、夫れ故に眼斯くの如し」と云ふ。此宿、雨戸無し。障子、襖子無し。天井を張らず。さてさて塞し。此處も風土、長崎の如し。時雨にて大雨、風雪、霰降りて、東方の氣色無し。さて平戸城下、海岸に人家並びて、此節鮪漁にて大船岸に着き、鮪を積む事、一艘に何萬、數艘に積む故、海の潮、鮪の血流れて赤し。鮪船、此の時雨の嵐に帆を張り、玄海灘を過ぎて下の關に至り、防州灘を越え、阿波の鳴戸を渡り、志摩國鳥羽浦に掛け、伊豆の東洋を経、四五百里の海上、七八日にして江戸に着く。十二月「五島まぐろ」と云ふ物なり。兼ねて船に鹽を貯へ、船滞る時は鹽漬にす。其價十分一となる。此地其後追漁する物は皆油にす。鮪一つ船より船に買ふに金四十五匁位なり。故に鹽にしては大損とぞ。鮪一斤にて三十二文なり。肉黒赤し。毒あり。伊豆の海にて漁する「まぐろ」とはまた別種なるべし。唐蘇州邊にては丈きさ八九尺、大毒ありて人食はずとぞ。

十八日。今日も時雨、風雨なり。山本庄右衛門と云ふ人、江戸屋敷にて度度詰めたる人にて懇意、是れへ

尋ねる。酒出す。鮪、鱒の肴なり。此日平戸松浦侯へ我等参り候事を申上ぐるとぞ。
十九日。風雨、雪、霰、又は日照し、青天を見る。甚だ寒し。旅館主人の云ふ、「此處は盜賊は無き所」と云ふ。然れども戸も屏風も無くては寒し。夜に入り正右衛門方より申し来る。「明日、明後日の中、壹岐守お目に掛かれ申すべし」と申し来る。

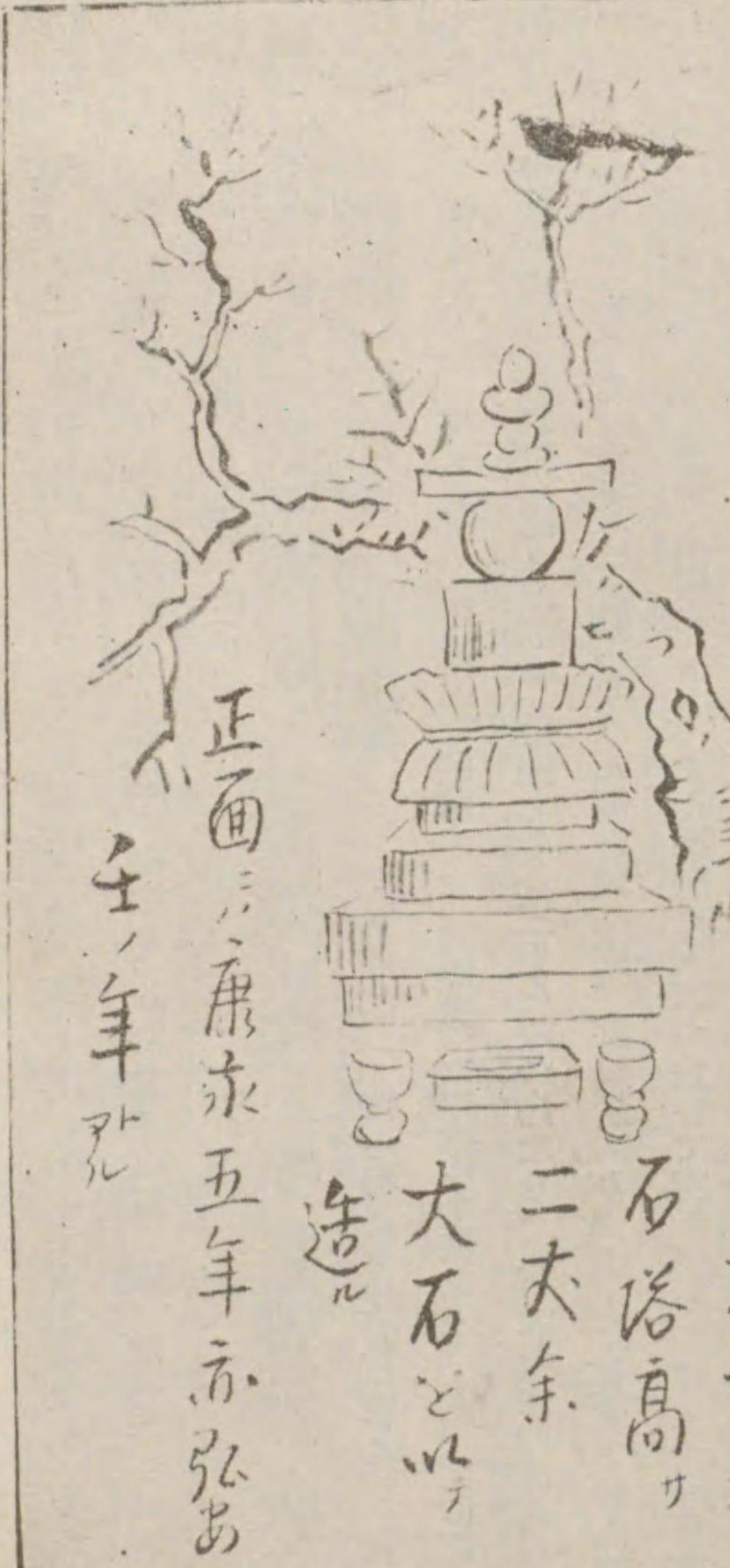
廿日。天氣。此處に來りて初めて好き天氣となる。また正右衛門方へ行く。銅板、目鏡取寄せ見せる。家の者出でて見物す。酒、吸物、飯を出す。明日壹岐守、使者屋にてお逢ひと申す事なり。ヒジキ、生なるは綠色にして先の方は平みなり。初めて食す。此處は此國の法にて、大小を帯びたる者には町の者下駄を



脱ぎ禮を成す。輕き者も同じ。夫れ故に脇差一本にて出でけれど僕一人連れると同じく禮を成す。失禮をする者あれば切捨と云ふ事とぞ。「上圖ハ生ノひじきナリ」

廿一日。また雨。夜に入り大風雨。晚八時より客家へ参る。町の中に門玄關附なり。八時頃にて候、馬にてお入り、小納戸方平兵衛案内にて、門の入口にて出向ひ、直にお逢ひあり。子小性七人、次の者四人、紅毛書物數數拜見、夫れより席畫を認め、酒、肴、菓子、薄茶は自身茶室にて下さる。夜の四時過ぎに旅宿に歸りぬ。町中大騒ぎする。旅館の主人曰く、

観音白院取王護院御願一所奉施入
鐘一口應永十二年未十二月之
付てあり信子観音堂アリ小松の茂成四
此不持と云々



正面ニ康永五年亦弘也
壬午年

石塔高サ
二丈余
大石と云テ
造ル

今日の様子を話し、「殿様自ら薄茶を立て、此の菓子を下されたる」と話し聞かすれば、亭主肝を潰し、「此様な事竟に承らず、殿様のあれへお出でにてお逢ひと云ふ事、けしからず重き事なり。あなた様のお宿仕り候へば、即ち殿様お入りあるも同前、有り難き事なり。此の菓子は眞に歎く事のならぬ物にて、疫病除に成り申す」とて、涙を流して恐れける。

廿二日。天氣。此宿餘り悪しく、故に小崎安兵衛とて足輕船方の頭役、夫れ故、西國諸大名より附屬あり、故に輕き者なれども勝手好し。夫れ故、小座敷綺麗にしてある故に、宮の町より此處に移る。安兵衛は六十餘の老人にて、忤もあり、孫もあり、皆皆出て敬尊す。其座敷に白張の小襖あり。先づ之に墨畫を描く。安兵衛話に、壹岐の國は五萬石の處と云ふ。此處より十三里を隔つ島なり。京大坂邊の流人の來る島なり。寺は五十ヶ寺あると云ふ。富貴なる者あり。八幡と云ふ處、屏風岩あり。山上に長者と云ふ物あり。四つありしに一つは掘りて内より金多く出でたり。また海邊に穴二つ並びて有り。一つは上十五日水涌く。一つは下十五日水涌くと云ふ。深き事は一向知れずとなり。また國分寺の跡、岩屋あり。石を疊んで家を造る。また針尾の瀬戸より眞珠を出だす。

廿三日。曇る。四時頃より安兵衛案内して、觀音院、此寺内に鐘あり。播州尾上の鐘と同じ物にして、天人を鑄たり。「平戸嶋觀音院、聖護院御願所、奉施入二鐘一口、應永十二年未十二月」、是れは彫り付けてあり。傍に觀音堂あり。小松の茂一重盛の所持と云ふ。櫻は八重、一重の交り、薩摩櫻と云ふ。此塔は此地の

者、富人にして娘を支那へ嫁

せしに、支那より是れを建つ
ると云ふ。まに此處に半田助
右衛門と云ふ者、甚だ富人に
して、右の堂塔を建て、また



自身の家の前を、大石を以て
往來の路を五六十間の間を敷
き詰め、今に其ままだあり。今
其末甚だの貧人となり、居風
呂屋をして悲しき暮しなり。

此日冬至なり。寺寺開基は皆支那の僧なり。故に此日を祭る。俗家にては家家餅を春き祝ふ。此所の者、短
日と云へど食を四度す。

廿四日。天氣にして、町の商家に行き、四枚襖、裏表、墨畫を描く。色色馳走する。小野尙益と云ふ畫師
と共に歸る。

廿五日。上天氣、如春。四時より白嶽へ登る。其路一里半あり。城下を過ぎて家中町あり。夫れより野山
へ出て野馬を見る。網頂に至り石の小さき宮居あり。茅生じて木無し。眼下に大島、宅島見え、遙かには對
馬、壹岐を望み、是れ北の方なり。近くに小島二つあり。「二かみ」と云ふ。北の方より東に寄りて「マダ
ラ島」あり。是れは唐津の領なり。西より南に生月島見ゆ。南の方、安萬嶽、平戸第一の高山なり。西方、
日本の地無し。朝鮮國見え。夫れより白嶽を下り、田助浦に至る。城下の裏、半里あり。長崎の方より
の船着なり。故に遊女あり。廿人程ある由。また地下の者として安「廉」者六七十人あるとぞ。遊女揚代十

七奴、雜用は別なり。さて吾が連れ二人あり。小豆島屋と云ふ揚屋の様なる家あり。二人の者案内して此處に至るに、先づ二階へ登り見るに、色色の物ありて、物置の様なる座敷なり。此家此處に一軒なり。彼の二人の者の勧めにて遊女を呼ぶに、衣裳は縮緬模様なり。裏紅なり。帯は緞子の様なる物にして、一寸裾を探り見るに、袷小袖を上へ着たるものなり。髪結び様、先づ大坂風にて奇妙なり。さて其家の嫁とて廿一二歳、良は白けれど黒子の夥い事ある女なり。此國にては黒子の事を痣と云ふ。其嫁、三味線を弾く。先づ江戸の潮來騒ぎの節なり。「よんやなぶし」と云ふ。「わしはたみ〔旅〕の者近う寄つてたもれ、情ありしと親にする」、「松に下り藤美事な物よ、人の花なら唯だ見たばかり、よんやな、よんやな」。其嫁、木綿の布子、麻の葉を染めたる前垂、帯も木綿なり。二人の連れ、其の服装奇妙なり、二百年程昔は此様なるべしと、心の中可笑しくぞ思ひける。其の間隔てて聞あり。夜具木綿なれど、さつぱりとして好し。予愛す婦は長崎邊の産れ、名は「國の江」と云ふ。婦の曰く、「不思議な事にて江戸のお方に逢ひし」と云ふ。妾何奈以ニ幸爲妓、得即今逢君。二人の者の婦は松風、二葉と云ふ名はすさまじき者歟。

廿七日。天氣となる。田助浦より歸り、安兵衛が方に居る。周文吉來る。是れは君邊を務める者。晝より魚の店と云ふ所、商人の方へ行き、襖と袋戸を描く。酒、菓子を出だして馳走する。此家に藏する晝あり、鑑定を乞ふ。「如川周信、暮年得法眼之位階而卒、此品罕干也。有古法眼畫、其筆意如雲谷、雖然筆勢爲妙可愛」と表具に裏書す。眞に傍若無人なり。文吉、松益傍らに侍りける。夜に入り歸る。

廿六日。雨天。此處に山形六郎は「鯨突き」なりしが、御用金數千出だしければ、侍に取り立てられ、今は平戸に住す。此日彼が所へ參る。酒、菓子を出だす。此處にも藏する晝あり。山水二幅、明人の晝なり。金碧山水、名あり、「千里」と。また鶴の晝、林良などと云ふべきもの、座敷四枚襖、京都の晝師應舉なり。鯉二つ藻なり。また翡翠の飛びたる圖なり。眞に上手なり。裏は曲水蘭亭の圖、之は描手別なり。風土放言、長崎と同じ。水仙、蘭、石斛、風蘭、自ら野に生ず。人の聲を上げ、またまた聲高に笑ふ事を怨ぶと云ふ。

廿九日。天氣。此日晚方より表具細工の者の方へ行く。酒肴を出だし何がな興「饗」應せんとて、自分の妹を杓取に出しけり。其の衣服、黒き木綿の色入りに模様を染め出し、裏には紅を附けたる綿を着たり。

十二月朔日。天氣。西風。また表具細工人宇吉方へ行き、屏風に狗子を描く。酒、菓子を出だす。船方の足輕ども來りて歌を歌ふ。「平戸お客はほうきでござる、田助浦にて夜を明す」、「サツサツ、振れ振れ六尺袖よ、四十過ぎれば振りや成らぬ」、「坊さん山路や破れた衣、肩に掛からで氣に掛かる」。

二日。また朝より風雨、雪、霞まじる。此地海と山あれども、溪流谷川無し。宇吉を使として魚の店商人方へ參る。酒を出し、鴨の玉子とち、鯛の節掛、はんぺんを出し、興「饗」應す。此地の鴨一向油〔脂〕無く、味無し。鯛は至つて味好し。油〔脂〕多くして多く食へず。

三日。今日も風雨、霞。鯨を取る島生月へ渡海三里あり。兎角に渡る日無し。此日晝を描き暮す。此處にては福祿壽の事を歳徳神と云ひ、蝦蟇を「ランゼウコ」と云ひ、反皮〔蝮蛇〕を「平口」と云ふ。

四日。天氣。風少しあり。山形新四郎は六郎と親類の者にて、住居は生月島なり。此者と生月島に渡るに、先づ城下より一里野山を越えて薄香浦と云ふ處に至る。少少人家あり。此處より船を出すに、五人にして艫を押す。風ありて浪高し。夫れ故に須草と云ふ處へ船に入る。此處には家無く岩塗にして魚屋あり。之は生月より人數を此處に置き、鯨の來る時、船を出す。また鮪漁をもす。先づ此處に上がりて食事などして、風間を待つに、いよいよ剛し。此處にて鮪漁五六十あり。其鮪舟に乗りて生月へ渡るに、波、舟の上を飛び越える事數度なり。表の方に笞を張り、二人坐す。舟夫六人、眞に恐ろしき大浪なり。舟を押す者、掛け聲、「アリヤ、アリヤ、アリヤ」と云つて軍船の如し。漸く日暮生月に着岸す。舟夫の者手も足も皆鮪の血に染み、眞に軍の如し。二時ばかりの間、恐ろしき目に逢うたり。此處に鯨師、益富又左衛門と云ふ者なり、其息亦之助兩人留主「守」故、先づ一寸見世先に上がり、火を以て衣服の濡れたるを乾かす。殊に寒月故寒し。程無くして主人歸り、又左衛門は平戸へ参りたる由、悴亦之助出でて、支關様の處を開き、座敷へ通し、上座に置き、闕の外にて挨拶す。先づ酒、吸物を出して、飯を出す。亦之助三十歳の者にて、好き男振、言語此國の様にあらず、至つて通人なり。夫れより程無く同舟したる新四郎参る。是れは此國の物云ひにて、人物も此地の者と見ゆ。平戸侯より袋戸の畫四枚頂戴す。名印無し。即ち予が描きたる畫なり。兼ねて名を知りければ、いよいよ肝を潰しけれ。吾等此島に留まり、鯨の實談をせんとて、三十日留まる。鯨は寒中より正月松の内を第一の漁の時節と云ふ。



復草
生月一浪



孩子山獄

西の方首首色一鳴と又ハト云
日不、地、あ、あ、あ

五日。天氣好く、ドミたる天氣なり。此處に孩子在岳とて、此島の大山なり。四時頃より酒、茶、菓子を持ち、此山に登る。主人亦之助、新四郎、吾が僕と四人、小童に毛氈など持たせ、村村を過ぎて行く。一老夫傍らに平伏して居る。亦之助大音にて「通れ」と云ふ。眞に此所の公方様なり。夫れより行くに、岩を壁と成したる家あり。亦之助の産婆の家なりとて、此處へ寄る。老婆、飯を食ひ居る。吾、色話しければ、老婆何やら可笑しき事とて、口に含んだる飯を膳一ぱいへ吹き出しけり。亦之助に、「あれは、どうした」と聞きければ、「江戸からお出での人の言葉が可笑しいとての事なり」とぞ。夫れより段段山に登るに、柴、茅生じて木無し。急に登る處六七丁ありて頂に至る。總べて廿町程あり。上に遠見番所あり。足輕一人居る。其者の云ふ、「一年に兩三度、西の方首色山を見る」と云ふ。是れは支那の方の山なり、日本の地にあらず。大方日本に近き島ならん。頂上、岩石の上に毛氈を敷き、盃を取つて四方蒼海を望み、外國に遊びたる心地ぞする。番人六十歳位の者、江戸に十年居たと云ふ。江戸は十里四方軒を並べて人家續き、其外は田畑にて、大根の太さ、さし渡し七八寸もあると云ふ。大笑しけり。夫れより段段と山を下り、彼の老婆が處に寄り、瑠球芋の蒸したるを食ひ、益富宅へ歸りぬ。

六日。天氣。亦之助に鯨を取るの時節を聞くに、冬、小寒十日前、鯨來る時なり。之を「小寒カグメ」と云つて「戴く」と云ふ義なりと。其時より鯨を取る備を成す。また春の土用に漁を止むと。朝飯前の話なり。夫れより新四郎方へ行く。酒、鴨の吸物、鮎の肉を出し、日暮れて歸る。此海より「エイノ尾」と云

ふもの、天に登る事あり。是れは龍なりと云ふ。登らんとする時、黒雲下がりて海の潮を巻き、次第次第に天に登るに、雲中より「エイ」と云ふ魚の尾の如き物ひらひらとして見え遠さかる。故に「エイの尾」が登ると云ふなり。此日新四郎より朝鮮鉢七つ入子を贈る。之を鮪船に積みけるに、七日目に四五百里の海上を経て江戸に参りたり。

七日。天氣。此處は朝、茶を土瓶にて煎じ、夫れを持ち出して茶を進めるに、茶うけ、「モシクシ」と云ふ物なり。之は「赤エイ」と云ふ魚の干したるを打ちて麻の如くし、夫れへ酒醬油を掛けたるなり。之は生臭き事無し。此物無き時は鮪を煮たる物なり。此處に目白と云ふ小鳥、能く見るに、江戸にて云ふ朝鮮目白なり。此處にては壹州目白と云ふなり。

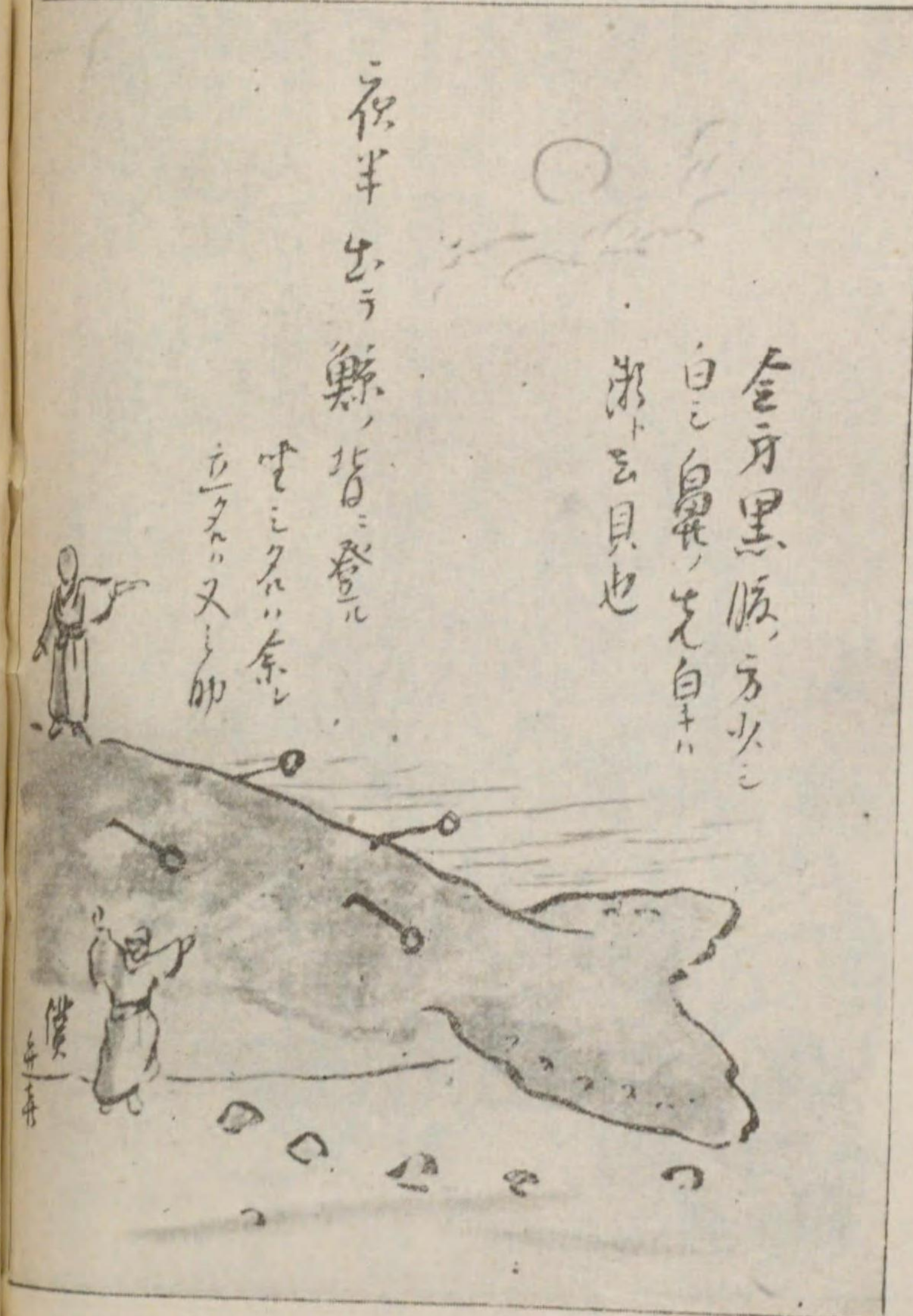
八日。曇。此島の西の方松本と云ふ處、鮪ある由、朝より亦之助、新四郎同道して行くに、鮪二百四十二疋と云ふ。大漁の時は千も取れる由。さて其鮪は山山の腰を群れて廻るもの故、山の腰に網を敷き張る。其れは幕の如くにして底無し。また鮪見櫓を建て、鮪來る時は旗を出して之を知らせる。口網の舟、之を見て網の口を締める。網、底無しと雖も、鮪、下を潜りて逃ぐる事無し。茲に於て舟四方より集まり圍んで一方より麻綱の網と布き換へ、舟六艘にて圍む時に、鮪眞に小魚を掌に抄ひたる如し。夫れを鳶口の様なる鍵にて引き揚ぐる。海、血の波立つ。眞に珍しき見物なり。之を見終りて、陸に納屋に至りしに、其時四國阿波より力持、曲持などする藝者來りて此處に居る故に、亦之助其藝を好みければ、色色藝をしけり。



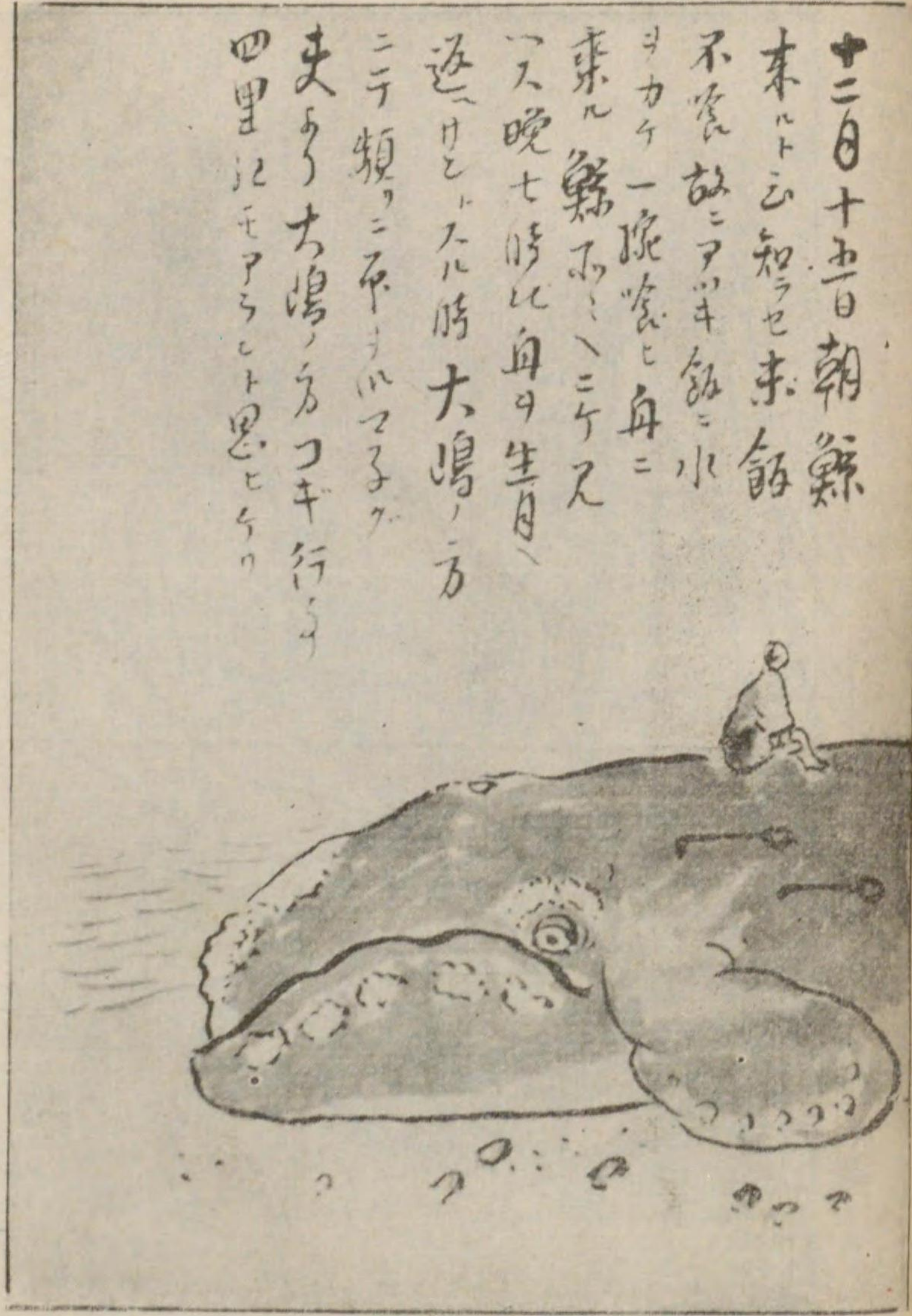
全身黒飯、方少
白、白、先、白、
湖、貝也

夜半、出、
縣、皆、登、

唯、名、余、
立、又、



十二月十五日朝、
末、ト、知、セ、未、
不、食、故、ア、
カ、ケ、一、
来、
一、
返、
ニ、
夫、
四、





鯨視標

鯨来時ハタチ
出知セル

鯨視



コレハホトシテ鯨ノ口ノ白鼻ノ先キ
鱧ナド付テアル者ニテ
鯨ヨリ生シテ貝ナリ具
貝ニホ茸ノ爪ナル者
付テ活キテキメキ者ヲ
ウラカス者瀬美
鯨ニアリ
大キサ丸圓

コレハ生頭
鯨ノ者

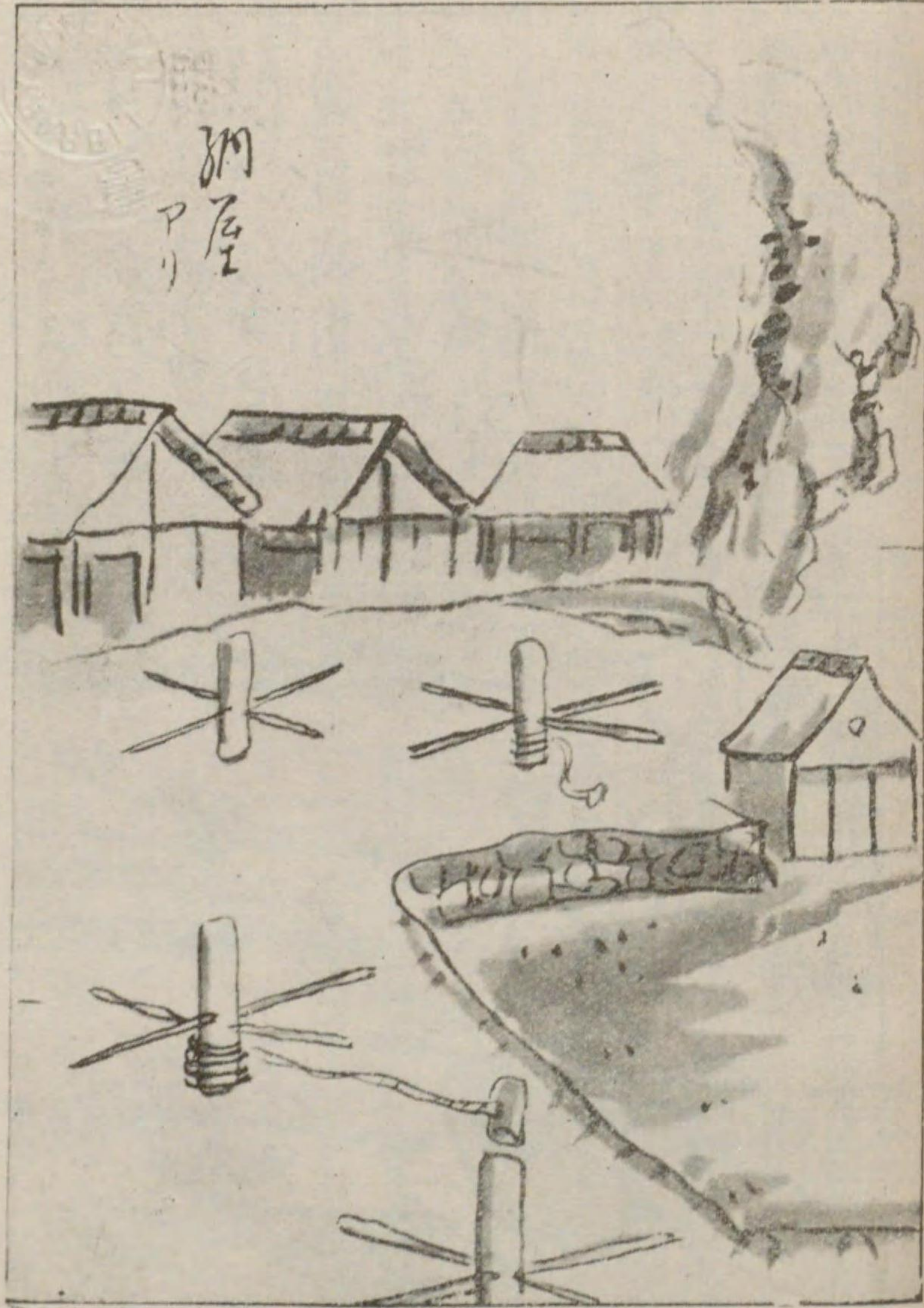
足
此年春

貝色
白

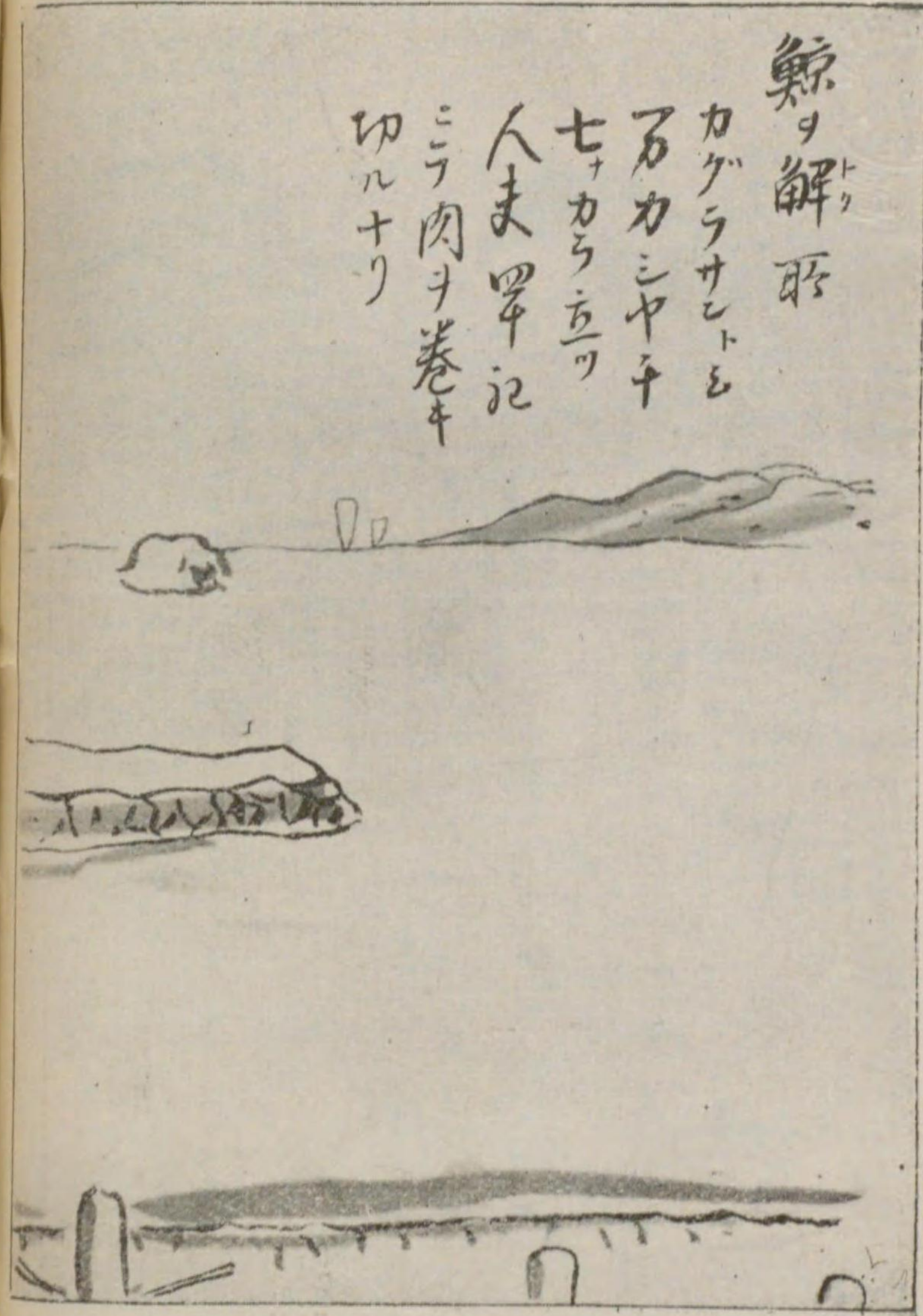
貝ニ白ラ別物
ナリ

コレハ死シテ物ス
内ニ足メキ者
アリ





洞屋
アリ



鯨ノ解^ト貯

カケラサレトモ
万カシヤナ
七⁺カラ立ツ
人ま⁺四⁺記
ニラ肉⁺ナ卷⁺キ
切⁺ル⁺ナリ



戊申暮ヨリ己酉ノ暮正
 四日四時 舟場と舟ニテ
 来出ス又ふ助ト我
 乃レ旅先舟場ニ
 出出テ春レ平
 と明後舟

舟前、石右治
 舟場、人
 舟場、人
 舟場、人

其所の者肝を潰して見物す。夫れよりして宿へ歸りぬ。往來皆舟。

九日。また時雨、雪、霰、風吹き、此日絹地に畫を認める。其頃筑前より左右治とて表具紙細工の法師來り居て、襖、衝立など張りける。此坊、尺八を吹き、亦之助三弦を弾く。新四郎歌うたふ。夜の九時まで話す。

十日。同じく時雨。此島、流れ三里、人家僅かにして、皆漁夫野人にして話すのみ。蕎麥を打ち食はず。役〔藥〕味變りたる事無し。

十一日。時雨、風烈、霰。至つて寒し。手足冷たし。亦之助の云ふ、此氣候必ず鯨岸に寄るとぞ。此日佛事とて平皿に素麵に鹽松茸、酢あへ、色色切り込み、酢醬油を温めて掛ける。また大根大きく切り、胡麻を磨り掛ける。外に奇妙なる事無し。

十二日。風雨。寒し。必ず此の暴風雨の後鯨來る由。此節、鰯魚の漁あり。鰯、刺身の如く切りて箸に挿みて、下地を熱沸らかして其中へ入れ、二三返かき廻して食ふなり。芹、此島の名産。夕方、新四郎方へ行き小豆粥を食ふ。

十三日。天氣になる。鯨見えると云ふ。鯨舟に乗る。舟夫六人にして艀を押す。走る事眞に矢の如し。風柔かにして浪無し。唯だ「うねり」と云ひて、山の如くになるなり。「タカマツ」潮を吹く。「タカマツ」來りては鯨居らず。(頭注、タカマツは鯨を食ふ魚なり。)夫れより生月の方へ漕ぎ寄せて歸りけるに、さて鯨舟は舟縁を「とんとん」と頻りに打つ事なり。其音海底に響きて鯨を驚かすなり。舟中より地續きの方

を望むに、眞に支那の地かと訝はれけり。此日此處も煤取の祝として生酢などして、煤は取らず。十四日。また雨ばらつく。新四郎方へ松本にて見し四國の藝者來り、見物に行く。毬の曲力持、皆感じける。

十五日。天氣。新四郎頼みの牡丹の晝出來上がる。夜に入り三人して狂言などし、大笑する。

十六日。天氣。朝起きると、鯨來ると知らせる。吾等此間に懲り、鯨舟には乗るまじきと思ひしに、「さあ、さあ」と促り立てければ、飯に水を掛け、一椀食ひ、夫れなりに舟に乗る。乗るが早いか、櫓を押すが疾いか、眞に矢の如し。彼方、此方と漕ぐ。鯨何方へか行きて見えぬ。故に舟を生月に返さんとする時に、沖の方にて頻りに旗を以て招く。晚七時頃なり。朝より一椀の飯のみにして舟に揉まれ、舟心地して氣分悪しく、然れども舟は大嶋の方へ、大嶋の方へと、八挺櫓にして飛ぶが如く、掛け聲は「アライヤ、アライヤ、アライヤ」走る。氣分以外「に脱力」悪しき故に、魚矛に附きたる綱の内に伏す。凡そ四里程も走りたる時、首を揚げ見るに、鯨、浪の中より踊り出で、潮を吹き、また海底へ入る。其廻りに舟七八艘取巻く。主人亦之助「鯨取れたり、取れたり」と云ふ聲に、氣分バキと快く成り、見物するに、魚矛に柄あり綱ありて、舟を鯨の背に乗り付けるが如く、鯨を隔つ事僅かに二間三間なり。此鯨、十七本魚矛を打つ故に、十七艘舟を引く。次第に鯨弱りて、潮を吹かずして氣のみ吹く。茲に於て劍と云ふ物を打つ。舟三艘づつ、鯨の左右に在りて打つ事數度なり。茲に於て鯨大に弱りたる時、一人鯨の頭、潮吹き之處へ登り、

手に双と大綱とを持ち、此處に穴を穿ち、其綱を通す。鯨は其間に幾度と無く海に入りたり、又現はれたりす。また一人は海へ飛び入り、大綱を持つて鯨の腹の方へ廻りて、鯨を吊り上げるなり。此働き眞に危き事云はん方無し。夫れよりして舟二艘に丸太を二本横に渡して、鯨を吊り、其舟を引舟にす。鯨も未だ死せずして、共に共に鯨を動かして岸に着く。之を「持双」と云ふ。鯨、沖にて死する時は沈みて浮ばず。之を「死魚矛」と云ふ。故に此の掛引困かしく、我等が船は先へ歸り、鯨は夜の四時前に着岸す。此處は三崎とて鯨を解く所なり。宅より一里東の方なり。「此鯨は眞に先生に見せん爲めに取れたる」と主人亦之助云へり。何奈となれば大潮なれば鯨此岸に寄りたり、また夜に成りたれば明朝切り解く事なり。此の時節に得る事、此嶋に兩三度に過ぎず。鯨、「セミ」とて、第一番の上品なりとぞ。鯨番に申付け、今夜九時に起すべしと、夫れより納屋に泊る。一寝入する。果して番人聲を揚げて起す。出でて見るに、満月照して潮干「引」て、鯨全身を現はし、大きき十五間の瀬美鯨なりき。

十七日。明七つ時より人足數十人、タイ松を照し、鯨を解く。各長刀の如き物を持つて鯨の背に登り斷ち切る、先づ兩脇を切り落し、頭の上を切る。夫れより尾の方を切り、また背を切り、兩脇を切り落す。頭を切りて各萬力車にて引くなり。夫れよりしては腸、骨に至る。人夫、納屋へ運ぶ。肉納屋、骨納屋、腸納屋あり。また大工小屋、鍛冶小屋、桶屋小屋、舟大工小屋あり。さて鯨の肉骨を、納屋の内にて數十人の人にて細かく切り、大釜に入れて油を煎す。十七竈あり。前に大樋あり。土藏の内へ流す。瀬美鯨

十間餘の物、油二百樽、金にして四百兩なり。鯨に齧る所無し。骨煎じたる穀も砂糖の中に入ると云ふ。筋は唐弓絃たうきうせんに成るなり。口中こうちゆうに有る鯢さい、是れは鯨の鰭ひんと云つて、色色細工物に成る。唯だ齧る物は耳骨のみ。是れは大きさ六七寸「シヤコ貝」の如き物なり。予二つ三つ拾ひて持ち歸りぬ。此日も鯨の來る事二度なり。各得ず。大魚と雖も大海にて小魚の知し。十度に一度も得る事難し。晚景舟にて本宅へ歸りぬ。十八日。昨夜より雨風、霰、終日止まず。鯨の腸はらわたを色色にして食す。是れは他所に無き物なり。十九日。風少少止む。此邊の風土、兎角此節時雨七八日續き、其中は手水鉢の内柄杓氷り付き、雪霰降ると云へど、積らず、唯だ地の白く成るのみ。また天氣と成ると、眞に三月の如く、綿入小袖一つにて宜し。眞に長閑なり。此嶋の寂しき處に數日留まりて風與故郷の事を思ひ出し、頻りに歸りたし。主人亦之助へ話しければ、「只今からお立ちにても三十餘日掛かり申す」とて笑ひけれ。其様なる時は酒を呑むが宜しとて、酒呑んで妻子の事をも忘れたり。

廿日。又曇る。霰を認め掛かりしに、兎角猶氣胸寒き、氣分悪しし。夫れ故休む。

廿一日。曇る。今日不快。主人は平戸へ渡る。後にて鯨來る由。此日暖氣。

廿二日。曇る。晝頃鯨來ると云ふ。新四郎と山に登り見るに、鯨、彼方此方に出でて潮を吹く。舟六七艘にて追ふ。天氣と成る。

廿三日。朝、霰降る。寒し。主人云ふ、此六月四日の夜の事なり、平戸足輕の中、嫁を取り、婿人に參り、親族八人舟に乗り、酒を呑みたるや、田助浦の海に落ち死にけるとぞ。内十四五の者と船頭二人助かりける。兎角船は危き故、乗らぬが宜し。此節江戸は嘸騒がしかるべし。此嶋は至つて閑なり。

廿四日。天氣。風。襖うすまに鶏を認める。此日鯨兩三度來る。各得ず。當年は至つて不漁と云ふ。

廿五日。朝、霰降る。後天氣。山形新四郎方へ行く。壹州にて取りたる鯨を食ふ。大主人又左衛門方へ行く。菓子出づ。

廿六日。又大風雨、霰。寒し。今日煤取小豆飯、平は鮑、唐の芋の頭に菜をあしらへ、汁は鯨の肉。筑前の人來り居しに、話に、先日時津の渡りにて、大坂の藝子七八人乗りたる船、破船したると云ふ。

廿七日。天氣。新四郎方に居る時に、鯨取れたると云ふ。夫れより三崎へ行くに、海岸を越えて行くに、此嶋、船を乗り出だす砂濱兩三ヶ所のみにして、皆岸、大磐石なり。其の大石に登り越え、登り越えして行く事一里、大難義して、漸く三崎へ行き着く。鯨は座頭と云ふ魚なり。四丈程あり。潮の中にて切り解く。全身見えず。此間亦之助が云ふ通り、時節悪しければ全身を見たる者鮮し。殊に極月より正月松の内、此間盛りに漁するの時なり。故に平戸の者一人も鯨の象を知らず。尤もの事なり。此日餅搗き。

廿八日。朝日照す、又曇る。雨むらむら降る。昨日搗きたる餅、三寸位、饅頭の如くして小豆少し付け、椀に盛り、出す。食ふ模似して飯に替へる。汗子「粉」、自在餅無し。

廿九日。天氣。此間中認める畫に名印をする。夜に入り大風。



大晦日。曇る。正月に成るとて門松を立つる。何も變りたる事無し。唯だ閑かなるのみ。「以上第五卷」
 天明己酉。元日。天氣。寒し。朝明け七時に起き、家内の者、我等も、共に雑煮を祝ふ事なり。餅丸し。
 芋、鮑、昆布を入れる。四時頃、節料理を食ひ、夫れより衣服を改め、大主人又左衛門方へ行く。酒出づる。
 又左衛門は六十に近き人にて、内方は五十位の婦人、金人錦のつま裏付けて、打掛縮緬縹縹を着たり。
 夫れより此處の親族亦右衛門と云ふ人の方へ行く。此處の主人は五十位にして、婦人は三十一二と見え、
 美なり。筑前より此嶋に嫁し來ると云ふ。娘一人あり。十六位にして同じく好き生れ付なり。皆緋縮緬の
 上へ模様の打掛着たり。此地紬を紫或は藤色にして、紫縮緬より之を貴ぶ。髪は江戸風に似たり。此家の臺
 所に「カヂキ通し」と云ふ魚、正月の焼物にするとして吊りてあるを寫す。

二日。天氣。右の亦右衛門發起にて、海邊へ小屋を掛け、芝居を初めける。兼ねて亦右衛門、人形を遣ふ。
 其頃淨留理「淨瑠璃」を語る者來りければ、鶯の段なり。我等と亦右衛門家内、娘、床几を二脚程並べ、先
 づ棧敷の形なり。見物す。あとは皆土間にて田夫、漁夫、老若男女、數百人押し合ひ、へし合ひ、大騒ぎ
 なり。中に七十位の老婆の見物せんとて、押されて難澁をするを見て感じける。此の小嶋に産れ、一つ生涯、
 都會の地を知らず、眞に悲しき事なりと思へば、涙が浮みける。十六七の女房に紅を付ける。

三日。天氣。鯨取ると云ふ事、また三崎へ行く。歸り又左衛門と同舟す。此處の例とて雑煮の向ふへ生大根
 二つに切り、下に「ゆづり葉」を敷き、右に生鯛を二疋腹合せに付ける。昨今大嶋にて四つ鯨を取ると云ふ。

ライ鳥



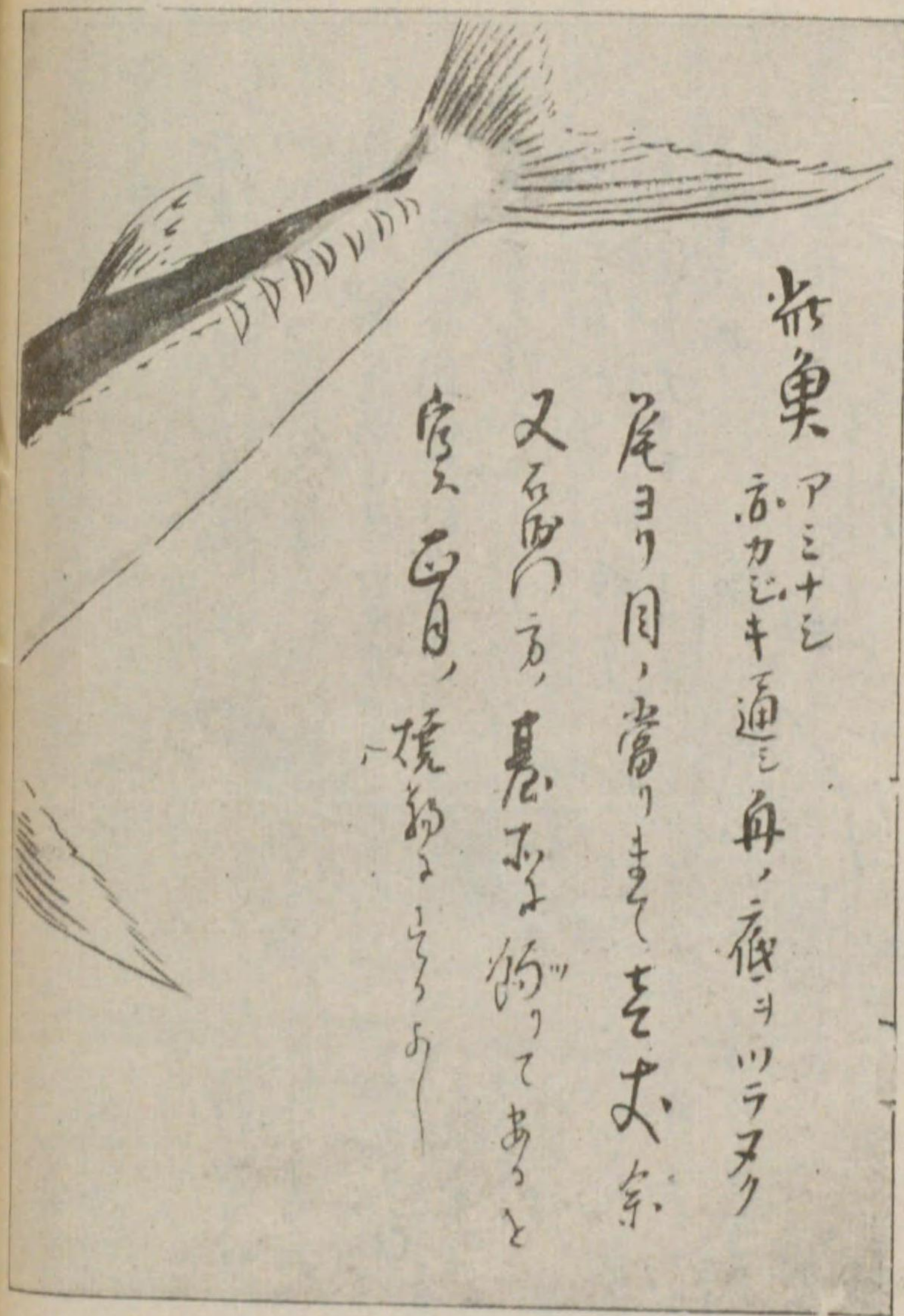
ライ鳥 見ては鯨漢
 の時何方より來り
 鯨と解く時其の口
 には肉はわらわら
 かなるのりかきり
 陸より歩むる
 あつそを大キカ
 白鳥はぬ

モウ
 ウス
 赤

仲カモメ
 とよむる
 全身白
 スコシ黒
 フマリ



背の色鞘、
脈白



新鳥

アミナシ
ホカシキ通

舟、夜ヨツラヌク

尾ヨリ目、當りまてを大糸

又石田の方、暮あす釣つてあつと

宿六日、境約々々あり

平戸嶋
田助浦



四日。天氣好し。亦之助と同舟して、此の生月嶋を發して、宅嶋、大嶋、右に白岳の絶壁を見て、油木と云ふ處に舟を寄せ、鮪納屋に至り、食事す。夫れより田助浦釜屋と云ふ家に登る。此處は此地の揚屋なり。土藏造りにして、二階に登り見るに、油樽やら物置の椽なる所なり。此處に亦之助、親昵のお山あり。是れを呼ぶ。名は玉川と云ふ。産れは長崎の元古川町の者と云ふ。また姫鶴と云ふお山、予之を愛す。此所の上品なり。各紋縮緬、花色模様の小袖を着、兩婦とも美人なり。夜半大風雨。波の音、耳に聳ち、掛かり船、掛け聲して何やら引く。浦邊の趣なり。

五日。大風雨。晝頃止む。此處よりまた舟に乗り、岩石に觸れる白波を見て、平戸浦に至る。川崎屋と云ふ家に參る。雑煮、飯、酒を出す。亦之助、金千五百疋、晝帖の料とて千疋、僕に百疋、之を贈る。新四郎より千疋、僕に銀子之を贈る。冬小寒より春の土用まで鯨を取る備へあり。人夫二千人を養ふ。此嶋の一人なり。

六日。天氣。さて平戸は都の景色にして、門松軒を並べ、上下着たる禮者行きちがふ。足輕安兵衛方へ行く。伴猶八皆皆出でて、雑煮、酒、吸物を出す。夫れより川崎屋へ歸ると、此處に神主大藏と云ふ人參り、「明日上、社參あり。其節お逢ひなされ申す」とて、懷中より目錄千疋取出だし、「是れは上より下され候との事、私より貴公に上げ申すべし」と。

七日。天氣。朝六つ時半頃、麻上下を着して社内に參り居る。五時過ぎ、壹岐守侯、裝束にて社參、大紋の

武士三人附添ひ、神主、別當、太鼓打ち、笛吹き、相詰める。拜殿にてお話申して退く。夫れよりまた安兵衛方へ寄る。「一生の別れなり」とて又又酒を出し、別れを惜みける。

八日。天氣。益富氏は大嶋にて鯨數數取れたるを聞き、夜の内行く。又又大藏參りて、遠目鏡を餞別に贈る。亦之助へも手紙を残し、安兵衛案内して田比羅の渡し場まで送る。渡り一里なり。此處にて平戸嶋を離る。後ろを顧みるに、平戸の方より雲を起し、忽ち雨と成る。厨と云ふ處にて豆腐屋に寄り晝食す。此邊一向の田舎なり。此處も鮪漁をす。夫れより「ツキノカハ」と云ふ處に至る。雨いよいよ降る。此處に大藏神主の下、武野多宮と云ふ者あり。大藏の手紙を持ち、此處に泊るに、未だ七時過ぎなり。雨いよいよ降る。甚だ寒し。さて大田舎にて、此の社人の家に老婆二人、若い女一人居る。多宮は留主〔守〕なり。夫れ故手紙は讀めず。一向不挨拶なり。大藏の手紙には「此人は殿様のお客なり」と申し遣はすと有りけれど、手紙を讀む人無し。夫れ故草鞋を脱ぎたるままにて上がり、庭敷の上に坐しけり。圍爐裏に生松の木を燃し燻し、煙草の脂だらけ、さてさて穢けれど、寒き故圍爐裏に當りける。其處らを見れば、家は一尺程も横に曲り、裏口に戸無し。夜半頃まで主人歸らず。夫れ故に股引のままにて横に成りければ、何やら穢き蒲團を掛けけり。一向眠れずして居る中、破れ袴を穿き、袂にころころと鈴の音をして、高間の原なり。正月故に五里も六里も遠方を籠注繩に歩くくなりとぞ。

九日。曇る。大風。寒し。さて主人は夜の未だ明けぬに出で行きけり。程無く我等も起き、正月の事なれ



油水ととびふふり
コシハ
口直
波
セマツテ
吹く

西日九日本跡多宮を調川と云

赤糸泊

かんきとく 朝生と

七人と

雅煮と

出ス 盃と



ば崎も無き雜煮を出だしけり。雨も止みけれ。此處を出立して見れば、泊り屋も一二軒あり。夫れより一里を過ぎて、今福と云ふ處に至り、七つ時過ぎに今利と云ふ宿に泊る。問屋を別當と云ふ。旅人宿一向に無し。巡禮宿一軒あるのみ。夫れ故平戸の者と云ひければ、夫れ故焼物問屋に泊る。食事等好し。内も好し。さて此處までの路路、入海にして好き景色多し。皆寫す。

十日。夜より風雪。五時に此處を出立して行く。皆山路なり。唐津の堺、西の方、屋敷野と云ふ所、山北に村あり。雪まだらに積み、景好し。夫れより徳末と云ふ。是れまで四里、夫れより田畑の路、右左山山高し。日暮前、唐津の城の脇、濱崎と云ふ處、筑前屋庄助と云ふ家に泊る。好き宿なりき。直ぐに居風呂屋へ行きしに、此邊皆石炭を焚く。路路風雪、霰降る。漸く人心持「地」する。

十一日。天氣にはあれど、甚だ寒風。濱崎と云ふ處を出て、吉井の間、川あり。夫れより濱邊へ出て、右は西海、唐津の城見ゆ。深江と云ふ處より馬に乗る。前原より駕籠に乗り、漸く日暮、今宿、唐津屋利助方へ泊る。生月嶋にて逢ひたる幸左衛門と云ふ人の弟なり。さて此處は間の宿にや、松並木の間の家にて崎も無き大田舎なり。座敷様なる處、茅屋、天井無し。煙いぶせくして屋中を廻る。是れまで行「來か、傍訓キタとあり」る路、雷山雪降り、各またら、上に瀧ありとぞ。

十二日。天氣。無風、暖かなり。僕昨夜より何にやら中りたるか、又は寒氣故か、吐し或は下し、不快なり。夫れ故少少の荷物を持たせ、姪の濱まで先へ行き、また福岡にて次ぐ。此處にて待ち合せけるに、馬

に乗り來る。夫れより博多に至る。半里あり。此處は黒田侯三十萬石の領地にて、姪の濱より此處まで人家
 續けり。博多鰯町、由岐屋甚兵衛、生月の間屋なり。晝時此處に着くなり。見世の向ふに別家あり。我等
 のみ此處に居る。奇麗にして起居安し。菓子、茶を出す。兎角僕辨吉不快なり。平戸より是れまでの往來、
 人行希なり。殊に寒氣の節、昨日と一昨日、風雪の山路、眞に難澁なりき。

十三日。雨天。滞留す。主人出でて話す。主人の母親出て話す。此の婆婆様、門徒宗にて、「菩提所の和
 尚を内内生寫しに致したし」とて、此家の老奴と一所に寺へ參り、院主に面會して歸りぬ。此寺の庭に木
 の化石あり、大きき一間餘なり。淡墨色にて、後ろの方を見れば、眞黒なる處あり。形、松の木にして枝
 あり。是れは石炭の中より出でたる物なり。此邊豆腐屋、餅屋、風呂屋、皆石炭を焚く故に臭し。此の石
 炭は山の根より掘り出す。開闢以前の化石なり。硫黄の氣の燃ゆるなり。さて富士の畫を認め亭主に贈る。
 酒、菓子を出し馳走す。此地も暖土にして、橙子の木を家毎に植ゑて酢に用ふ。

十四日。雨天。此日出立せんとす。主人云ふ、明日は此處許、松林「囃」と申して先づ祭の様なる事にて、家
 家煉酒を造り祝ふ。元來此の松林と云ふは、昔、此の博多に唐船の着きたる處にて天領なり。今黒田侯の領
 地と成る。昔の遺風残りて、町人麻の肩衣、下は「タチ付」を穿き、草鞋にて福岡の城内へ入りて、玄關
 に酒盃あり。夫れを呑み、歸る事なり。今は祭の様に成り、頭には紫、又は紅、色色に染めたる縮緬の
 投頭巾を被り、腰に三尺手拭を締め、手に扇を持ち行くなり。往來、棧敷を掛け、家中の婦女見物す。夫





山 富 唐津
山 富 唐津

ハゼ村

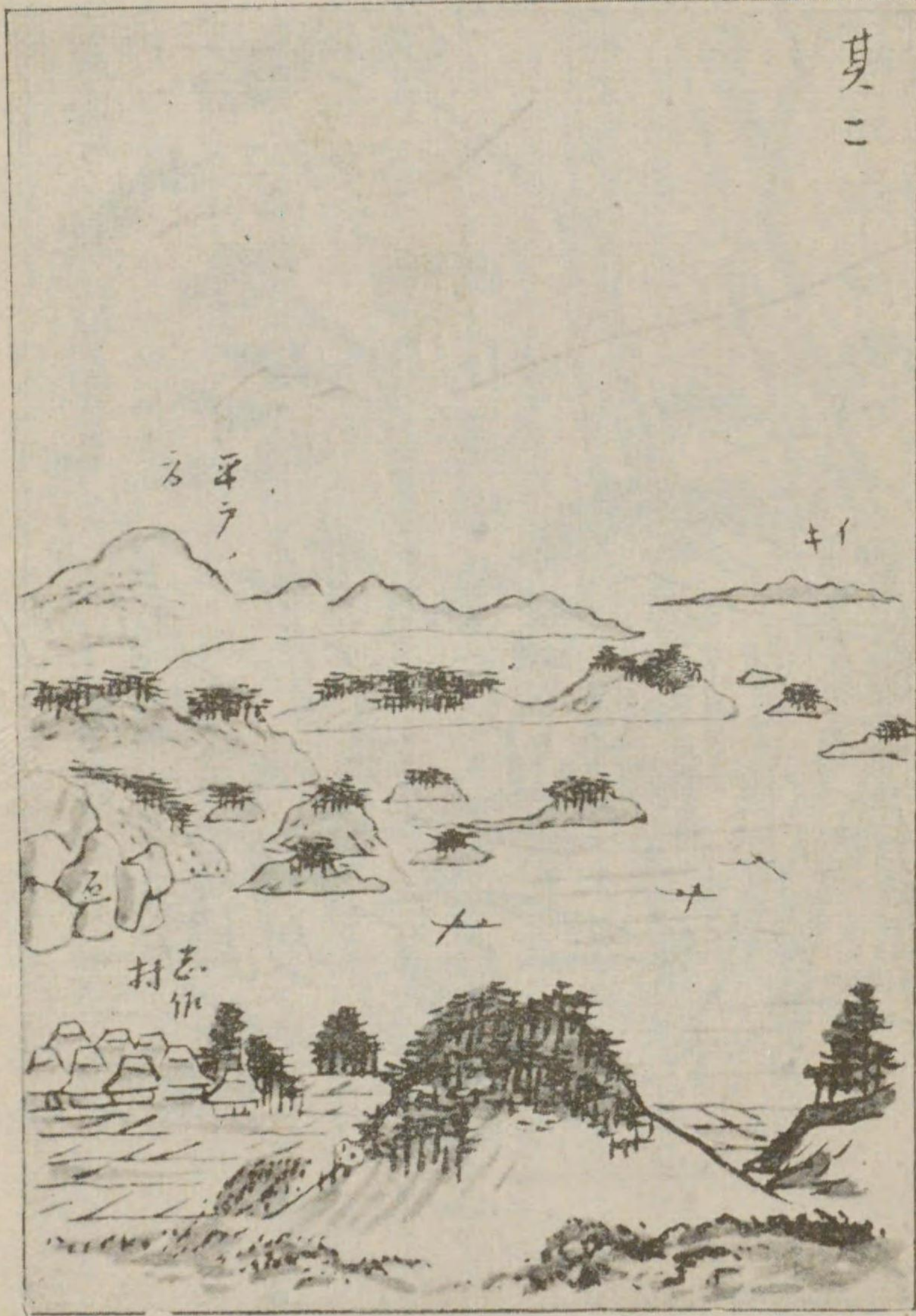


調川 御厨ノ路
七ツ島ト云

山 賢 佐

佐野 有田山 焼物

其二



一五九

志保ヨリ今福ノ方
北
方
ノ
方



一五八



れに對して色色の戯れ口を云うても失禮にあらずとぞ。また福人の造り物、踊屋臺、夜半過ぎまで三味線、太鼓にて囃すなり。櫛田の宮、博多第一の大社なり。また柳町とて遊里あり。是れは至つてザツとしたる所なり。此地、姪の濱より福岡まで一里餘、福岡より博多まで十八町、人家續きて、繁昌の地なり。西は海、南は山なり。

十六日。天氣。出立せんとす。老婦色色取揃へ飯出す。茶、梅干、外に金子を添へて餞別とす。五時少し過ぎて發足し、程無く箱崎八幡、往來なり。參詣す。海の中路見える。玄界嶋、鹿〔志賀〕の嶋など云ふ嶋嶋見え、好き景色、夫れより松原を通り、晝頃より雨降り出して、いよいよ大降と成る。青柳に至り晝食す。是れまで四里あり。此處より駕籠に乗る。雨益益剛し。路皆山坂、畝町と云ふ處、是れまで二里あり。問屋に參り、人足を頼みければ、最早七つ時過ぎなれば、是れにお泊りと云ふ。雨止まず。「夫れなら泊るべし、上がる處ありや」と云ひければ、「いざ是れへ」と云ふ。見るにさつぱりとしたる所一間あり。疊も好し。窓より外を見れば漸く一重の早梅の盛りなり。土瓶に好き茶を入れ、茶うけ香の物、味噌漬、澤庵漬、茶漬、色色皿に盛り出す。また酒を買つて呑む。夫れより飯出す。此處許は魚は一向に無し。玉子ふはふはにして出しけり。今利〔伊萬里〕路にて足の甲腫れ痛む。夜に入り雨止まず。

十七日。兎角雨天。五つ時畝町を出足して、駕籠にて赤間よりまた駕籠を次ぎ、木屋の瀬へ四里、此路眞に田の如し。此邊石炭を掘り出す。農夫の墓、路側に有り。石塔皆石炭の中より出て燃えず。物皆木の化



石なり。木目あり。節枝ある有り。小なるは路路幾らもありて、拾ひて二つ三つは持ち歸りけれど、荷重くなる故に拾はず。僕辨喜も馬に乗る。馬の足一二尺泥に入る。また田畑に鶴多し。眞奈鶴、黒鶴、白鶴なり。白鶴は全身白く、尾の先少黒き處あり。啄、足、代赭石に黄混したる色、啄は鶴の如し。七つ時に木屋の瀬に泊る。石炭の風呂に入る。

十八日。雨折折降る。朝六つ時立つ。駕籠にて黒崎まで、また馬にて小倉へ次「着」き、直ぐに渡し船に乗る。さて風無く海平か。引嶋遠く見え、眼流嶋向ふに具え、與平塚の前を乗り、行き掛けと違ひ、波無く、好き舟遊なりき。七つ時赤間が關に着く。朝鮮人、萩へ漂流し、此所へ來ると云ふ。また和蘭陀人廿日に此處に來る由。船に和蘭陀の幡を建てたり。

十九日。天氣。一日滯留す。阿彌陀寺に行き、開帳す。安徳帝入水の海にて、陵もあり。天皇の木像、左右の障子、極彩色にして、古法眼の畫と云ふ。二位の尼、内侍、及び平家の一族の像を畫く。次の障子には平家一代の盛衰、合戦の始終を圖せり。是れは土佐光信の筆。また後ろの山上には、壇の浦にて入水したる人人の墳墓あり。寶物に土御門の院並に後奈良の院、正親町の院、右の繪旨五通、鎌倉の御教書二十三通、尊氏の花押御教書二通、太閤秀吉の短冊、吉田卜部家證文、大家代代、毛利、吉川、小早川數人の書十餘通、古筆の平家物語十二卷、是れは筆者數人なり。皆長門本にて珍しき本なり。法師其畫に指さし、平家没落次第を物語す。昔を思ひ出し目に涙を浮べたり。早友「鞆」明神は向ふ地なり。此處より望むに

十町許に見ゆる瀬戸口なり。平家蟹は世に數ある蟹と違ひ、背の甲怒れる顔色あり。硯石は赤きと青あり。此山の淺村山より出るとぞ。また大積山と云ふよりも出る。稻荷町と云ふ處、遊女あり。格子造り、見世付は遊女列を成さず、皆横竪に居て至極ザツとしたる所なり。

廿日。はらはら雪霰降る。此處に筑前若松、船は百石積みの小船、米を積み、外に乗合無し。船賃四十目、古き蒲團壹貫二百にて借り、大坂まで借り切り乗り出しけれど、瀬戸口潮さし込み、帆を十分に張れども、船後戻りする故に、陸へ上がり、風呂にはひり、船頭と同じく何やら埒も無き人の家に行く。雪霰降り、寒し。七つ時頃また船に乗り、彼の借りたる穢き蒲團を被り寝ると、女の聲にて何やら物云ふ。船頭に、「あれは何ぢや」と聞きければ「船頭なり」と云ふ。此船へ呼ぶに二百文なりと。「或は畏る、同郷ならん」の詩あり、和漢同じ事なり。さてさて珍しき事かなとて、一眠して夜明けたり。

廿一日。曇りて風あり。船走る事早し。忽ち上關の沖を乗り、三十五里走る。「ヌワ」と云ふ嶋に掛かる。廿二日。天「氣脫カ」西風。夜半船を出して、藝州の中、「ミタライ」と云ふ處を見て走り、備後の鞆と云ふ處に泊す。船頭此處へ碇を頼む故、船より上がる。予も共に小舟に乗り上がる。此處は福山の領地にて船著なり。保命酒の名物あり。蕎麥屋、酒屋、湯屋あり。酒など呑み、また船に乗る。船中さてさて寒し。難澁する。陸へ上がらんと思へども、岡山へ田舎路十八里あるとぞ。

廿四日。天氣、風あり。眞に船走る事疾し。二十四五里過ぎて、備前の牛窓と云ふ處に掛りける。家千軒あ

る處なり。此の追手にては明日は大坂へ著くと雖も、餘り難義故に此處にて上がる。泊屋一軒あり、泊る。
廿五日。天氣。大西風烈し。朝五時出立して行くに、寒風骨を透す。片上へ五里、岡山へ七里、何分岡山へ行きたく、三里の廻りと云ふ。さて田舎路風烈しく、風を防ぎ休むべき所無し。眞に烈風骨肉を透すとは此事なり。三里を過ぎて奥の郷と云ふ處にて一軒家あり。此處にて酒を買ひて呑み、少し呼吸をして、夫れより走りて川あり、舟にて渡る。また大きな樋あり。漸くにして岡山石關町赤穂屋喜左衛門方へ行く。親子出て「只今お歸りか」とて、奥の離れ座敷へ伴ひ、炬燵をして當て、「當りカト思へド、原本ニハ當ノ字ニ「アテ」ト傍訓ヲ施セリ」湯に入る。食事して酒の肴、刺身を出だす。其の切身齒に當りてゴリゴリと云ふ。刺身の氷りたるなり。當春へ掛けての寒さ、四十年此方の寒氣と申す事なりとぞ。江戸は此様に無しと。また火事も餘り大火は無しと申し參り候。主人話なり。喜左衛門親は七十に近き人にて、至つて好事家なり。夜四時過ぎまで話盡きず。
廿六日。寒風、後雪と成る。寒に中りたるや、氣分勝れず。晝二三紙認め、晝食に白魚平皿に盛り出す。一升三匁と云ふ。

廿七日。天氣。寒さ薄し。備中足守は木下侯の領地なり。此處より西の方、九月十一日長崎へ參り掛け寄りたるに、領主、江戸よりお歸り無し。此節御着と申す事故、明日など參らんと思ふ。

廿八日。天氣。晝より曇る。喜左衛門同道にて四時頃石關町を出て、行く事二里、宮内と云ふ處あり。遊女ある所、茶屋あり。菊屋と云ふ揚屋なり。此處に至り妓二人呼ぶ。大坂風なり。嶋「縞」縮緬毛留の帶、髮大嶋田、木櫛横に挿し、笄、簪、簪、籠甲なり。大坂の唄、江戸の騒ぎ唄、興に入りて面白し。さて大坂より西の方酒を出すに、肴、刺身、硯蓋にて、吸物は數獻呑みたる上に出すなり。此日も寒き日にて、一向に熱き物を出ださず。漸く仕舞頃に吸物を出だしけれ。夫れより横路へ入る。行く事二里あり。足守に至り黒宮と「をカ」弔ふ。酒、飯出す。夜に入り能く寝る。

廿九日。天氣。寒し。旅宿を町の備前屋と云ふに移す。小座敷、炬燵あり。
卅日。天氣好し。御殿へ出る。お逢ひあり。前日御獵あり、鹿三疋、其肉を下さる。

二月朔日。晝より雨。此所にては「一夜正月」とて昨日餅を搗き、今朝雑煮を食ふ。町家、袴上下にて禮に出る。武家に無し。昨日の鹿肉を料理人に申付け候へば殊の外困りける。此處は吉備津の宮の氏子にて、毛者「獸」を嫌ふ。夜に入り雨ますます降る。

二日。雨止まず。晝を認める。町家へは家中の者來す。夫れ故徒然にて暮す。

三日。天氣と成る。暖色を催す。柏井と云ふ處へ一里、黒宮發起して温泉場とす。未だ浴する人無し。此處より五六町を過ぎて中山と云ふ處、岩石聳ちたる處なり。見物す。歸りて直ぐに御殿へ參る。夜の八つ時に歸る。

四日。上天氣。暖氣。四時より狩にお出之あり。予が旅宿の前の町を過ぎ、一里程を行きて、供に歩立に

て山深く入り、兎一疋を得る。鹿三つ出でけれど取れず。夫れより山を下り、何とか云ふ里に至り、富家の商人方を膳所とし、此處にて晝食す。夫れよりしてまた向ふの山に入る。勢子の者數十人、太鞍、銅鑼を打つて、山の根を追ふ。鹿一疋、池の邊に出で、後ろの山に入る時に鐵砲雨の如く、鹿、鐵砲に中り藪の中に入る。予走つて鹿の耳元を突き破り、生血を吸ひければ、皆皆肝を潰す。鹿の生血は生を養ふ良薬と聞きければなり。夫れより日も晩景に成りければ、此處よりお歸りとして、同勢の中に入り歸る。路、田畑の間を通るに、先へ立つたる人、吾が噂をす。「あれは江戸の江漢と云ふ者なり。鹿の耳元を裂きて血を吸ひけり。怖ろしき者なり」と云ふ。日も暮れければ、田夫田畑の間へ「タイ松」を持ち、數數出し、路を照し、田夫の家には行燈を門口に出し、また「タイ松」を持たせ城下まで連れ行くは、尙尙有り難く思ふ由、老人は數珠を以て拜むなり。眞に愚直なる者にて、上に居る者之を憐むべし。

五日。雨。晝より天氣。晝過ぎ御殿へ出て、小襖二組、櫻に小鳥、流に鮎の畫なり。明日出立せんと申上げければ、「初午見物して八日に出立すべし」と、鹿の肉、鴨一羽を下さる。

六日。天氣。鴨、鹿、料理申付け、酒を呑み、宿の伴淨瑠璃を語り、一興す。夫れよりまた御殿へ行き、初午趣好をす。夜八時に歸る。

七日。曇る。八時頃より雪降り出す。庭の中、色色飾り物、田舎者見物に来る。雪故皆歸る。其日も夜の八時旅宿へ歸る。

八日。天氣。寒く氷る。今日四時出立せんとてお暇乞に罷り出る。足守侯お逢ひ、金五百疋と八丈嶋〔縞〕一反下され、夫れより所所暇乞に參り、宿へは庄屋方より蕎麥を贈る。段段暇取り、漸く八つ時過ぎになる。宿の主人、料理人、二人にて町はづれまで送る。此處より二里、宮内へ出て往來なり。また二里行き岡山石關町若林氏に至る。親七郎次、伴喜左衛門出て「能く能く御歸り。此間中指を屈し占などとしてお待ち申す」とて早早食事を出し、湯に入り、また奥の座敷へ行き、炬燵をして當りながら、父子咄す。「寒氣強ければ寛寛と御滞留あれ」と。さて何方へ行きても尊敬されるも不思議なる事かな。

九日。雨。蠟畫をビイドロに認める。伴喜左衛門は好事者にて、吾を信する事如神。親七郎治六十餘の人にて、書も讀め、甚だ風流人にて、夜の八つ時まで話す。同家若林ト助と云ふ人來る。

十日。雨天。山川金左衛門、岡山の家中來る。十三年以前、江戸勤番にて逢うたる人、晝を樂む人なり。晝よりト助方へ行き、夫れより備中玉嶋の人、ト助方に居て、喜左衛門と共に羅漢寺其餘の寺を見物す。昔、新太郎少將、能澤と謀つて寺寺を破却すと云ふ。今は舊の如くと成れり。玉嶋在の人云ふ、「玉嶋は船着にて頗る好事の人あり、何んと我等と一所に玉嶋へお出で」と申す。あと戻りなり、不行。兎角長旅して、吾宿に妻子あれば歸りたく思ふ。人は出家に成るべし、吾も出家ならば何ん十年も玉嶋は疎か、何處までも、死ぬまで遊歴せんに、残念なる事なり。尾州の人とて泰清院と云ふ寺にて逢ふ。吾が名を聞き、甚だ懼る。何方へ行きても吾名を不知者鮮し。

十二日。曇る。泰清院にて逢ふ尾州の人參る。銅板を見せければ肝を潰す。此地白魚澤山、平皿に三盃食ふ。また灰貝と云ふは石灰の代りに成る「シツクイ」なり。此貝「サルボウ貝」に似て、裏の方まで「ウネ」あり。此肉を食ふ。是れは他に無きと云ふ。ト助も來る。夜九つ時過ぎまで話す。雨天にても明日出立せんとて荷拵へする。

十三日。雨止まず。朝五時過ぎ少少止む。故に此處を出立して、裏路お城の邊を通り、松本と云ふ處まで皆皆送る。喜左衛門甚だ別れを惜み、兩眼に涙を浮べけり。喜左衛門云ふには、「當春は參宮致し、必ず大坂にてお目に掛かるべし」と約しけるが、其後に聞けば、參宮して歸りて死したると云ふ。吾に別れを惜みたる、前表なるや。此日南風、暖氣、麥畑に雲雀啼きて空に舞ひ、藤井より「ひと市」にて駕籠に乗る。吉井川の邊にて晝食す。加加戸、伊部を越え、片上よりまた駕籠に乗り、三里の間、八木山路、山中、夜に入り三つ石松屋と云ふ好き家に泊る。晩方寒し。

十四日。曇。北風寒し。三つ石を明七つ時に出立して、有年まで三里、山路なり。漸くにして夜明けたり。有年河、舟渡し、正條より駕籠にて姫路に泊る。此處より丹波へ出でて、夫れより京へ行く心得なれど、兎角故郷へ歸りたし、妻子ある故か。夫れ故に所行き残したる所多し。今更思へば残念なり。姫路皮四五枚買ふ。商人の云ふ、京先代寺當月八日焼失と云ふ。去年の大火に焼け残りたる處なり。十五日。天氣。無風。五時過ぎに出立して、表屋庄左衛門方へ寄り、丹波福智山へ行くには市の河に付き

て山に入る由、此節雪もあり。また路難所なれば不行。加古川へ四里、大久保へ三里半五十丁、また一里程行き、明石川ばたに泊る。大倉谷、本宿なり。此處より淡路嶋見え、大坂に近よりたる心持「地」する。十六日。天氣。六時過ぎ明石を發足して、舞子が濱、風景好し。敦盛の石塔の前にて蕎麥を食ひ、程無く兵庫に至る。楠の碑あり。少し山に入りて廣嚴寺に寶物あり。楠の碑を石摺にして賣る。また清盛の石塔あり。布引の瀧は摩邪山の下にあり。山の中腹より望みて好き瀧なり。岡本と云ふ處、其頃梅盛り、兵庫の者梅見に行く。夫れより西の宮に泊る。以上十里の路なり。

楠の碑

忠孝著乎天下、日月麗乎天、天地無日月則晦蒙否塞、人心廢忠孝則亂賊相尋、乾坤反覆、余聞楠公諱正成者、忠勇節烈、國士無双、蒐其行事、不可概見、大抵公之用兵、審強弱之勢、於幾先決成敗之機、於呼吸一知入善任、體士推誠、是以謀無不中、而戰無不克、誓心天地、金石不渝、不爲利回、不爲害怵、故能興復王室還於舊都、諺云前門拒狼、後門退虎、廟誤不臧、元兇接踵、構殺國儲、傾移鐘簾、功垂成而震主策、雖善而弗庸、自古未有元帥妬前、庸臣專斷而大將能立功、於外者卒之以身許國之死、靡他觀、其臨終訓子、從容就義、託孤寄命、言不及私、自非精忠貫日、能如是整而暇乎、父子兄弟世篤、忠貞節孝萃於一門盛矣哉、至今王公大人、以及三軍巷之士交口誦說之不衰、其必有天過人者、惜乎載筆者、無所考、信不能發揚其盛美



大徳二耳、

右故河攝泉三州守、贈正三位近衛中將楠公贊、明徴士舜水朱之瑜、字魯璵之所撰、勅代碑文、以垂不朽、

右は兵庫湊川楠義士の碑、明の舜水の文なり。

十七日。雨大降。大坂まで五里駕籠に乗る。晩七つ時頃、丸清方に著く。宿元の状正月二日出、無事なる由、安心する。

十八日。天氣。北堀江兼葭堂へ行く。色色談話す。晝過ぎ歸る。晩方丸庄、治兵衛、扇久、丸清と共に道頓堀へ行く。茶屋竹庄にて妓子小梅其外五人、白人右近、甚だドロロンコとなり、夜の八つ時過ぎに歸る。

十九日。長崎の圖を描き、兼葭堂へ遣はす。此日雪降り寒し。夜山崎町丸清へ伏見九兵衛と同道して行き、酒を呑む。肴、酢し、豆腐なり。

廿日。曇。暖。扇面に晝を數數描き、兼葭より菓子を贈る。晝頃風呂屋へ行く。四つ時まで掛かり湯無し。流し皆石灰タタキ、扇風呂と云ふには扇を彫り、戸棚風呂なり。

廿一日。曇。虎の晝を認め、浮ぶ瀬福屋と云ふ茶屋へ遣はす由。また兼葭へ行く。馳走する。薩摩の人天文を知る人來る。吾が名を聞きて驚く。また十一屋五郎兵衛と云ふ人來る。隋圓文廻しを新製すと云ふ。

廿二日。雨天。十一屋五郎兵衛、尼が崎屋五兵衛兩人、吾等を伴ひ、道頓堀芝之居を見物す。離助、金作、

非人敵打の狂言大當り。芝居は江戸の操り芝居程なり。棧敷兩方に十軒づつあり。幕兩方より締める。是れより新狂言初まりと云ふ時、役者皆頭を下げる。日暮に芝居終りて、兵庫屋と云ふ茶屋に行き、食事して歸る。

廿三日。曇。朝、右の兩人參る。四つ時前十二屋案内して天神「傍訓ニハ「ナニハ」トアリ、難波橋カ」橋を渡り、池田路即ち池田に至る。池田河流れて酒造家三十軒程あり。伊丹には百餘軒あり。池田の名酒は満願寺なり。此處にては其酒を不賣。伊丹はケンピシ「劍菱」、綿屋七つ星なり。此處を過ぎて多田と云ふ處に至る。多田の宮あり。また温泉あり。中野屋五郎兵衛方に泊る。此近くに銀山あり。

廿四日。曇。後天氣。此處より三里を行きて深山に入る。瀧あり、箕尾の瀧と云ふ。好き瀧なり。右の方岩石を踏んで攀ち上り、勝尾寺に至り、觀音の札所なり。大坂の城見ゆ。此處より五里あり。山上より望むに、山無し。平地に見え、山を下れば皆山路なり。河二つを越え、一つは長柄の渡しと云ふ。北堀江三町目尼が崎屋五兵衛方に夜の四時過ぎに參る。さて其路食物無し。暗夜田の畔路にて難義する。

廿五日。天氣。晝時より天王寺へ行く。京、壬生寺開帳、壬生狂言を見る。夫れより清水寺へ行き、歸りに十一屋五郎兵衛へ參る。蕎麥を出す。尼五同道なり。

廿六日。曇。尼五より丸清へ行く。兼葭堂へ暇乞參る。酒出で、唐墨、唐扇を餞別に贈る。明朝奈良の方へ出立せんと思ふ。ナマナヤ治兵衛參る。酒肴を出だし、夜四時過ぎ歸る。甚だ別れを惜む。



箕尾山
瀑布
正面ヨリ見テ
解き流